

埼玉県和光市

ごぼうやま
午王山遺跡総括報告書

2019. 6

和光市教育委員会

埼玉県和光市

ごぼうやま
午王山遺跡総括報告書

2019. 6

和光市教育委員会



午玉山遺跡第2次調査空撮 1981(昭和56)年



午王山遺跡空撮南から 2019(平成31)年4月



第9次調査空撮 2001(平成13)年



第8次調査空撮遠景 2000(平成12)年



第8次調査空撮



第9次調査空撮 2001(平成13)年



第9次調査A区空撮



第9次調査B区空撮



第2次調査A溝



第10次調査B溝調査風景



第7次調査A溝調査風景



第13次調査C溝調査風景



第2次調査全景



第4次調査全景



第6次調査全景



銅鐸形土製品

銅釧



岩鼻式土器と久々原式土器



下戸塚式土器



午玉山遺跡空撮北東から 2019(平成31)年4月



午玉山遺跡空撮東から 2019(平成31)年4月

序 文

現在和光市内には、43か所の埋蔵文化財包蔵地が確認されています。これら埋蔵文化財をはじめとする文化財は、我が国の長い歴史の中で生まれ、今日まで守り伝えられてきた貴重な財産であり、私たちにはこれを保護し後世に伝えていく使命があると考えています。

埼玉県和光市新倉3丁目2831番1外に所在する午王山遺跡は、「新羅から来た王子が住んでいた。」という伝説が残されている遺跡です。これまでの15回にわたる発掘調査で主に弥生時代の遺構・遺物が多量に発見され、市民や研究者から貴重な環濠集落遺跡であることが広く知られております。それにより、当市では2013（平成25）年4月に、遺跡の第15次調査地点（新倉3丁目2831-1）を公有地化し、和光市指定文化財（史跡）に指定することで遺跡の保存を進めてきました。また、2018（平成30）年2月には午王山遺跡から出土した弥生時代の遺物121点が「午王山遺跡出土品」として埼玉県指定文化財（考古資料）に指定され、遺跡・遺物ともに注目されている遺跡です。

和光市教育委員会では、午王山遺跡の重要性を鑑み、これまでに行われた発掘調査や確認調査の成果を集成し総合的に分析することで、改めて午王山遺跡の実態と貴重な文化遺産であることを明確にするため、この度『午王山遺跡総括報告書』を刊行する運びとなりました。本書が、午王山遺跡を含め弥生時代の環濠集落研究及び地域文化交流の研究と埋蔵文化財の保護を図るための資料として活用されることを切に願っております。

最後になりますが、本書の刊行に当たり、文化庁文化財第二課並びに埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、午王山遺跡総括報告書策定委員会委員各位、そして土地所有者の方々と数多くの関係者の皆さまからのご指導とご協力を賜り、心より厚くお礼申し上げます。

令和元年6月

和光市教育委員会
教育長 戸部 恵一

例 言

1. 本書は埼玉県和光市新倉3丁目2831番1外に所在する午王山遺跡についての総括報告書である。
2. 本書の作成は、埼玉県和光市教育委員会事務局生涯学習課を事務局とし、午王山遺跡総括報告書策定委員会設置要綱に基づく午王山遺跡総括報告書策定委員会による指導のもと、2018（平成30）年度から2019（平成31（令和元））年度にかけて実施した。
3. 本書策定事業は、2019（平成31（令和元））年度文化庁国庫補助金対象事業として実施されたものである。
4. 発掘調査は、宅地造成工事、道路改良工事、農地改良工事に伴う記録保存のための発掘調査及び保存目的のための範囲内容確認調査である。宅地造成工事、道路改良工事に伴う記録保存のための発掘調査は原因者の負担により、農地改良工事に伴う記録保存のための発掘調査については国庫補助金、県費補助金の交付を受け、また保存目的のための範囲内容確認調査は市費により実施した。第1次を和光市午王山遺跡調査会が、第2次～第6次・第8次・第9次、第11次・第12次、第14次及び第15次調査を和光市教育委員会が、第7次・第10次・第13次調査を和光市遺跡調査会が実施した。
5. 発掘調査及び本書の作成にあたっては、文化庁文化財第二課、埼玉県教育局市町村支援部文化資源課の指導・助言を受けた。
6. 各調査区の年次、調査期間、地番、調査面積、主な遺構・遺物は第1章のとおりである。
7. 報告書の執筆は、第1章を糸野友也、第2章第1節を江口やよい、第2節を坂口由加里、第3章第1節及び第6節を安井翠、第2節を鈴木敏弘、第3節、第5節、第7節、第4章及び第6章を鈴木一郎、第3章第4節を前田秀則、第5章第1節を遠藤英子、第2節を小倉淳一、第3節を柿沼幹夫、第4節を石川日出志が行った。
8. 午王山遺跡全体測量図の作成は、株式会社東京航業研究所に委託した。
9. 出土遺物は、和光市教育委員会が保管・管理している。
10. 遺構・遺物については再検討をしたため、既に刊行された報告書等と解釈が異なる部分があるが、本書を優先する。
11. 発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の諸氏、諸機関からご教示・ご援助を賜った。記して謝意を表します（敬称略・順不同）。

和光市文化財保護委員会 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 公益財団法人東京都スポーツ文化事業団東京都埋蔵文化財センター 朝霞市立博物館 朝霞市埋蔵文化財センター 板橋区教育委員会 西東京市教育委員会 文京区教育委員会（株）武蔵文化財研究所

江原 順 大久保聡 大谷 徹 尾形則敏 加藤秀之 川畑隼人 倉澤麻由子 黒尾和久
近藤 敏 佐藤康二 斯波 治 知久裕昭 照林敏郎 徳留彰紀 中岡貴裕 瀧田佳男
根本 靖 野沢 均 野中 仁 藤井幸司 松本 完 宮瀧交二 山田尚友

凡 例

1. 本書図版の縮尺は、原則として以下のようにし、適宜スケールを付した。
遺構 住居跡 1/150 溝跡 1/300 方形周溝墓 1/150・1/400
遺物 土器・土製品 1/3 集成図遺物 1/6
2. 図版中の焼土・赤色塗彩にスクリーントーン(ドット)を用いた。
3. 遺物観察の数値はcmで、()は復元値を示す。
4. 遺物観察表の胎土は次の表記で示している。
A：砂粒、B：赤色粒、C：白色粒、D：小石、E：金雲母、F：雲母、G：石英、
H：長石、I：輝石・角閃石、J：白色針状物質、K：繊維
5. 遺物観察表に記載した色調の表現は、『新訂標準土色帖』(1997年版・農林水産省監修)に従った。
6. 挿図中の方位は磁北を示し、水系レベルは海拔標高を示す。
7. 遺構の主軸方向 N—○—E・Wは、磁北からの角度を示す。
8. 遺構図版中の一点鎖線は攪乱を示し、点線は推定を示す。
9. 遺構番号は、本書の作成にあたり一部を改めて表記した。そのため、既刊の報告書とは異なるものがある。

目 次

口絵	
序文	
例言・凡例	
目次(本文・挿図・口絵カラー・挿表・図版)	
第1章	総括報告書作成の目的と経緯 1
第1節	総括報告書作成の目的 1
第2節	総括報告書作成の方針 3
第3節	総括報告書作成の経緯と組織 3
第2章	遺跡の地理的環境と歴史的環境 5
第1節	立地と地理的環境 5
第2節	周辺の遺跡と歴史的環境 10
第3章	午王山遺跡の調査経過 21
第1節	本調査以前 21
第2節	第1次・第2次調査 27
第3節	第3次～第7次調査 29
第4節	第8次～第14次調査 30
第5節	保存目的(第15次)調査と調査全体の概要 32
第6節	確認調査報告 44
第7節	第2次調査出土遺物補遺 49
第4章	検出された遺構と遺物 67
第1節	弥生時代住居跡と遺物 67
第2節	弥生時代環濠と遺物 121
第3節	弥生時代方形周溝墓と遺物 140
第5章	弥生時代集落と出土遺物の分析・検討 145
第1節	レプリカ法による午王山遺跡の栽培穀物調査 145
第2節	東日本の環濠集落からみた午王山遺跡 157
第3節	午王山遺跡出土弥生土器の編年的位置づけ 177
第4節	午王山遺跡と弥生時代の動向 219

第VI章	総括	227
第1節	午王山遺跡弥生時代集落の展開	227
第2節	午王山遺跡と周辺の弥生時代集落	236
第3節	午王山遺跡の調査成果と歴史的価値	238

引用・参考文献

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	武蔵野台地と周辺地形区分図	5	第39図	第25号住居跡出土遺物	56
第2図	午王山遺跡座標図	6	第40図	第30号住居跡出土遺物	56
第3図	午王山遺跡地形図	7	第41図	第31号住居跡出土遺物	56
第4図	午王山遺跡発掘調査位置図	9	第42図	第32号住居跡出土遺物	56
第5図	和光市遺跡分布図	13	第43図	第33号住居跡出土遺物	57
第6図	午王山遺跡周辺弥生時代遺跡分布図	17	第44図	第36号住居跡出土遺物	57
第7図	表面採取再実測遺物	23	第45図	第43号住居跡出土遺物	57
第8図	表面採取遺物	24	第46図	第44号住居跡出土遺物	57
第9図	午王山遺跡全体図	25	第47図	A溝(第2次調査第2号溝)出土遺物	58
第10図	第1次調査区全体図	34	第48図	第2次調査区出土遺物	58
第11図	第2次調査区全体図	35	第49図	第1号住居跡	81
第12図	第3次調査区全体図	36	第50図	第2号住居跡	81
第13図	第5次調査区全体図	37	第51図	第3号住居跡	81
第14図	第4・5次調査区全体図	38	第52図	第4号住居跡	81
第15図	第6・7次調査区全体図	39	第53図	第5号住居跡	82
第16図	第8・9次調査区全体図	40	第54図	第6号住居跡	82
第17図	第9次調査区・15次調査区全体図	41	第55図	第7号住居跡	82
第18図	第10・11次調査区全体図	42	第56図	第8号住居跡	82
第19図	第12・14次調査区全体図	43	第57図	第9号住居跡	83
第20図	第13次調査区全体図	44	第58図	第10号住居跡	83
第21図	新倉3丁目2837-1地点トレンチ配置図	46	第59図	第11号住居跡	83
第22図	新倉3丁目2829-1地点トレンチ配置図	46	第60図	第12号住居跡	83
第23図	新倉3丁目2811-1地点トレンチ配置図	47	第61図	第13号住居跡	84
第24図	新倉3丁目2811-1地点トレンチ柱状図	47	第62図	第14号住居跡	84
第25図	新倉3丁目2830-1地点トレンチ配置図	48	第63図	第15号住居跡	84
第26図	新倉3丁目2830-1地点出土遺物	48	第64図	第16号住居跡	84
第27図	第3号住居跡出土遺物	52	第65図	第17号住居跡	85
第28図	第6号住居跡出土遺物	52	第66図	第18号住居跡	85
第29図	第7号住居跡出土遺物	52	第67図	第19号住居跡	85
第30図	第9号住居跡出土遺物	53	第68図	第20号住居跡	85
第31図	第10号住居跡出土遺物	53	第69図	第21・23号住居跡	86
第32図	第16号住居跡出土遺物	54	第70図	第22号住居跡	86
第33図	第17号住居跡出土遺物	54	第71図	第24号住居跡	86
第34図	第18号住居跡出土遺物	54	第72図	第25号住居跡	86
第35図	第19号住居跡出土遺物	55	第73図	第26号住居跡	87
第36図	第21号住居跡出土遺物	55	第74図	第27号住居跡	87
第37図	第22号住居跡出土遺物	55	第75図	第28号住居跡	87
第38図	第23号住居跡出土遺物	55	第76図	第29号住居跡	87

第 77 图	第30号住居跡	87	第129图	第86号住居跡	102
第 78 图	第31号住居跡	88	第130图	第87号住居跡	103
第 79 图	第32号住居跡	88	第131图	第88号住居跡	103
第 80 图	第33・43号住居跡	88	第132图	第89号住居跡	103
第 81 图	第34号住居跡	88	第133图	第90号住居跡	104
第 82 图	第35号住居跡	88	第134图	第91号住居跡	104
第 83 图	第36号住居跡	88	第135图	第92号住居跡	104
第 84 图	第37号住居跡	89	第136图	第93号住居跡	105
第 85 图	第38号住居跡	89	第137图	第94号住居跡	105
第 86 图	第39号住居跡	89	第138图	第95号住居跡	105
第 87 图	第40号住居跡	89	第139图	第96号住居跡	105
第 88 图	第41号住居跡	89	第140图	第97号住居跡	106
第 89 图	第42号住居跡	89	第141图	第98号住居跡	106
第 90 图	第44・46号住居跡	90	第142图	第99号住居跡	106
第 91 图	第45号住居跡	90	第143图	第100号住居跡	107
第 92 图	第46号住居跡	90	第144图	第101号住居跡	107
第 93 图	第47号住居跡	90	第145图	第102号住居跡	107
第 94 图	第48・49号住居跡	91	第146图	第103号住居跡	107
第 95 图	第50号住居跡	91	第147图	第104号住居跡	108
第 96 图	第51号住居跡	91	第148图	第105号住居跡	108
第 97 图	第52号住居跡	92	第149图	第106号住居跡	108
第 98 图	第53・54号住居跡	92	第150图	第107号住居跡	108
第 99 图	第55号住居跡	92	第151图	第108号住居跡	109
第100图	第56号住居跡	92	第152图	第109号住居跡	110
第101图	第57号住居跡	93	第153图	第110号住居跡	110
第102图	第58号住居跡	94	第154图	第111号住居跡	110
第103图	第59号住居跡	94	第155图	第112号住居跡	111
第104图	第60・61号住居跡	94	第156图	第113号住居跡	111
第105图	第62号住居跡	94	第157图	第114号住居跡	111
第106图	第63号住居跡	95	第158图	第115号住居跡	111
第107图	第64号住居跡	95	第159图	第116号住居跡	112
第108图	第65号住居跡	95	第160图	第117号住居跡	112
第109图	第66号住居跡	95	第161图	第118号住居跡	112
第110图	第67号住居跡	95	第162图	第119号住居跡	112
第111图	第68号住居跡	96	第163图	第120・121号住居跡	113
第112图	第69号住居跡	96	第164图	第122号住居跡	113
第113图	第70号住居跡	96	第165图	第123号住居跡	113
第114图	第71号住居跡	96	第166图	第124号住居跡	113
第115图	第72号住居跡	97	第167图	第125号住居跡	113
第116图	第73号住居跡	98	第168图	第126号住居跡	114
第117图	第74号住居跡	98	第169图	第127号住居跡	114
第118图	第75号住居跡	98	第170图	第128号住居跡	114
第119图	第76号住居跡	99	第171图	第129号住居跡	114
第120图	第77号住居跡	99	第172图	第130号住居跡	114
第121图	第78号住居跡	99	第173图	第131号住居跡	115
第122图	第79号住居跡	100	第174图	第132号住居跡	115
第123图	第80号住居跡	100	第175图	第133号住居跡	115
第124图	第81号住居跡	100	第176图	第134号住居跡	116
第125图	第82号住居跡	101	第177图	第135号住居跡	116
第126图	第83号住居跡	101	第178图	第136号住居跡	116
第127图	第84号住居跡	102	第179图	第137号住居跡	116
第128图	第85号住居跡	102	第180图	第138号住居跡	117

第181図	第139号住居跡	117	第226図	関東地方の弥生時代後期から古墳時代前期における環濠の規模比較(2)	169
第182図	第140号住居跡	117	第227図	花ノ木遺跡で検出された溝	170
第183図	第141号住居跡	118	第228図	中里原遺跡第1次調査区で検出された溝	171
第184図	第142号住居跡	119	第229図	伊場遺跡の多重環濠	172
第185図	第143号住居跡	119	第230図	午王山遺跡の宮ノ台式土器と周辺遺跡との比較-1	180
第186図	第144号住居跡	119	第231図	午王山遺跡の宮ノ台式土器と周辺遺跡との比較-2	181
第187図	第145号住居跡	120	第232図	岩鼻式土器1期と時間的併行関係を示す資料	183
第188図	第146号住居跡	120	第233図	午王山遺跡とその周辺域 後期前半期の土器編年	184
第189図	第147・148・149号住居跡	120	第234図	菊川式土器 壺の編年(抄)	187
第190図	午王山遺跡A・B・C溝全体配置図	126	第235図	下戸塚式土器生成に関わる土器群	189
第191図	午王山遺跡環濠東側図	127	第236図	午王山遺跡 下戸塚式中・古期の土器	192
第192図	午王山遺跡環濠西側図	129	第237図	午王山遺跡とその周辺域 下戸塚式から弥生町式の壺の頸部部裝飾帯	193
第193図	C溝配置図	131	第238図	午王山遺跡 下戸塚式中・新期の土器	196
第194図	A溝2次調査(1号溝)出土遺物	132	第239図	下戸塚式中・古期の土器と畿河の土器との比較	198
第195図	A溝5次調査A区(1号溝)出土遺物	132	第240図	近隣遺跡の下戸塚式中期ないしは併行期の土器	200
第196図	A溝11次調査(1号溝)出土遺物	133	第241図	下戸塚式新・古期の土器	202
第197図	A溝2次調査(2号溝)出土遺物	133	第242図	下戸塚式新・新期の土器	204
第198図	A溝3次調査(2号溝)出土遺物	134	第243図	下戸塚式新・古期との併行関係土器	205
第199図	A溝4次調査(2号溝)出土遺物(1)	135	第244図	午王山遺跡にはない弥生町式土器の壺	207
第200図	A溝4次調査(2号溝)出土遺物(2)	136	第245図	武蔵野台地東北縁(白子川・黒目川・柳瀬川流域) 後期土器編年-1	209
第201図	A溝5次調査B区(2号溝)出土遺物(1)	136	第246図	武蔵野台地東北縁(白子川・黒目川・柳瀬川流域) 後期土器編年-2	210
第202図	A溝5次調査B区(2号溝)出土遺物(2)	137	第247図	武蔵野台地東北縁(白子川・黒目川・柳瀬川流域) 後期土器編年-3	211
第203図	A溝7次調査(2号溝)出土遺物(1)	138	第248図	午王山遺跡周辺弥生時代遺跡分布図	220
第204図	A溝7次調査(2号溝)出土遺物(2)	139	第249図	関東の弥生時代中期後半と後期前半の土器型式分布	221
第205図	A溝10次調査(1号溝)出土遺物	139	第250図	弥生後期における東海系土器の関東への普及	223
第206図	B溝3次調査(6号溝)出土遺物	139	第251図	低地性集落の出現	224
第207図	B溝4次調査(6号溝)出土遺物	139	第252図	弥生後期の青銅器関連遺物の分布	225
第208図	B溝5次調査B区(6号溝)出土遺物	139	第253図	午王山遺跡弥生時代中期後半遺構分布図	229
第209図	B溝10次調査(6号溝)出土遺物	139	第254図	午王山遺跡弥生時代後期前半遺構分布図	230
第210図	C溝13次調査(5号溝)出土遺物	139	第255図	午王山遺跡弥生時代後期中葉前半遺構分布図	231
第211図	第1・10次調査区方形周溝墓配置図	142	第256図	午王山遺跡弥生時代後期中葉後半遺構分布図	232
第212図	第1号方形周溝墓	143	第257図	午王山遺跡弥生時代後期後半遺構分布図	233
第213図	第2号方形周溝墓	143	第258図	A溝出土銅鐸形土製品	235
第214図	第3号方形周溝墓	144	第259図	午王山遺跡周辺弥生時代遺跡分布図	239
第215図	第4号方形周溝墓	144	第260図	環濠集成図(1)	240
第216図	第5号方形周溝墓	144	第261図	環濠集成図(2)	241
第217図	午王山遺跡の環濠推定復元案	158			
第218図	関東地方における環濠の推定面積	160			
第219図	関東地方における環濠の推定周長	160			
第220図	関東地方における環濠の推定掘削土量	160			
第221図	環濠面積と環濠周長の相関	161			
第222図	環濠周長と掘削土量の相関	161			
第223図	猫島遺跡の環濠集落	163			
第224図	関東地方における弥生時代中期・後期の環濠・条濠を有する遺跡の分布	166			
第225図	関東地方の弥生時代後期から古墳時代前期における環濠の規模比較(1)	168			

口絵カラー目次

1	午王山遺跡第2次調査空撮 1981(昭和56)年	6-1	第2次調査全景
2-1	午王山遺跡空撮南から 2019(平成31)年4月	6-2	第4次調査全景
2-2	第9次調査空撮 2001(平成13)年	6-3	第6次調査全景
3-1	第8次調査空撮遠景 2000(平成12)年	7-1	銅鐸形土製品
3-2	第8次調査空撮	7-2	銅鐸
4-1	第9次調査空撮 2001(平成13)年	7-3	岩鼻式土器と久ヶ原式土器
4-2	第9次調査A区空撮	7-4	下戸塚式土器
4-3	第9次調査B区空撮	8-1	午王山遺跡空撮北東から 2019(平成31)年4月
5-1	第2次調査A溝	8-2	午王山遺跡空撮東から 2019(平成31)年4月
5-2	第10次調査B溝調査風景		
5-3	第7次調査A溝調査風景		
5-4	第13次調査C溝調査風景		

挿表目次

第1表	午王山遺跡調査一覧表	2	第17表	第23号住居跡出土遺物観察表	63
第2表	市内遺跡一覧表	12	第18表	第25号住居跡出土遺物観察表	63
第3表	周辺の弥生時代遺跡一覧表	18	第19表	第30号住居跡出土遺物観察表	63
第4表	表面採取再実測遺物観察表	23	第20表	第31号住居跡出土遺物観察表	64
第5表	新倉3丁目2830-1地点出土遺物観察表	48	第21表	第32号住居跡出土遺物観察表	64
第6表	第3号住居跡出土遺物観察表	59	第22表	第33号住居跡出土遺物観察表	64
第7表	第6号住居跡出土遺物観察表	59	第23表	第36号住居跡出土遺物観察表	64
第8表	第7号住居跡出土遺物観察表	59	第24表	第43号住居跡出土遺物観察表	65
第9表	第9号住居跡出土遺物観察表	60	第25表	第44号住居跡出土遺物観察表	65
第10表	第10号住居跡出土遺物観察表	60	第26表	A溝出土遺物観察表	65
第11表	第16号住居跡出土遺物観察表	61	第27表	第2次調査区出土遺物観察表	66
第12表	第17号住居跡出土遺物観察表	61	第28表	午王山遺跡レブリカ法調査同定資料一覧	149
第13表	第18号住居跡出土遺物観察表	61	第29表	午王山遺跡レブリカ調査土器型式別同定穀物集計	151
第14表	第19号住居跡出土遺物観察表	62	第30表	午王山遺跡とその周辺域 弥生時代中期後半から後期末の編年	208
第15表	第21号住居跡出土遺物観察表	62			
第16表	第22号住居跡出土遺物観察表	63			

図 版 目 次

- 図版 1 午王山遺跡全景
午王山遺跡空撮南から 2019(平成31)年4月
午王山遺跡第2次調査空撮北西から 1981(昭和56)年
- 図版 2 午王山遺跡全景
午王山遺跡第2次調査全景 1981(昭和56)年
- 図版 3 第1次調査
第1次調査前全景
第1次調査全景
- 図版 4 第1次調査
方形周溝墓確認状況
方形周溝墓全景
- 図版 5 第2次調査
第2次調査A溝と第30・25号住居跡
第2次調査東から/第2次調査A溝東側
- 図版 6 第3次調査
第3次調査A溝西から
第3次調査B溝遺物出土状況
- 図版 7 第4次調査
第4次調査全景東から
B溝土層堆積状態
A・B溝
- 図版 8 第4次調査
第4次調査第51号住居跡/第51号住居跡遺物出土状況
第4次調査B溝全景/第4次調査B溝遺物出土状況
- 図版 9 第5次調査
第5次調査A区A溝/第5次調査B区A溝
第5次調査B区B溝/B溝北から
- 図版 10 第6次調査
第6次調査
第6次調査第74号住居跡
第74号住居跡/第74号住居跡遺物出土状態
- 図版 11 第7・8次調査
第7次調査A溝西から
第8次調査遠景東から
第8次調査
- 図版 12 第9次調査
第9次調査
第9次調査A区/第9次調査B区
- 図版 13 第10次調査
第10次調査A溝/第10次調査B溝調査風景
第10次調査B溝西から
第10次調査第4号方形周溝墓
- 図版 14 第11・13次調査
第11次調査A溝北から
第13次調査C溝/調査風景
- 図版 15 第12・14次調査
第12次調査全景南東から
第14次調査全景南西から
- 図版 16 午王山遺跡全景
午王山遺跡全景 2019(平成31)年4月
午王山遺跡全景 1977(昭和52)年1月
- 図版 17 出土遺物
銅形土製品 第3次調査・第5次調査・第7次調査/銅網
第82号住居跡出土遺物
第72号住居跡出土遺物
- 図版 18 出土遺物
第97・108号住居跡出土遺物
第74号住居跡出土遺物
第141号住居跡出土遺物
第10号住居跡出土遺物
- 図版 19 出土遺物
A溝出土遺物
- 図版 20 圧痕土器と同定した栽培穀物
写真1~13/実測図1~2
- 図版 21 圧痕土器と同定した栽培穀物
写真14~25/実測図3~5
- 図版 22 圧痕土器と同定した栽培穀物
写真26~37/実測図6~8
- 図版 23 圧痕土器と同定した栽培穀物
写真38~47/実測図9~13
- 図版 24 圧痕土器と同定した栽培穀物
写真48~55/実測図14~17

第1章 総括報告書作成の目的と経緯

第1節 総括報告書作成の目的

埼玉県和光市新倉3丁目2831番1外に所在する午王山遺跡は、旧石器時代、縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の各時代の遺構・遺物が存在する複合遺跡である。午王山遺跡は1960年代の谷井 彪による論考（資料紹介）により認識・注目されることとなった。1979（昭和54）年から2011（平成23）年まで、過去15回にわたる発掘調査により遺跡の内容が把握され、特に弥生時代の遺構、遺物が多数出土しており、午王山全体が一つの環濠集落として展開されていたことが明らかになっている（第9図）。

午王山遺跡の特徴は、主に以下6点を挙げることができる。

- ① 荒川（旧入間川）低地に臨む独立丘に立地する、主に弥生時代後期の集落遺跡であり、中央平坦部の居住域と東縁辺部の墓域からなる集落の全容が把握できる。
- ② 弥生時代中期後半から後期後半までの集落で、後期中葉後に位置づけられる環濠を持つことから、集落の変遷と環濠との関係がつかめる。
- ③ 集落を囲むように3条の溝が設けられており、関東地方では類例の少ない多重環濠を持つ集落である可能性が高い。
- ④ 弥生時代後期の土器には、南関東系の久ヶ原式、中部高地系の岩鼻式、東海東部系の菊川式の3系統がみられ、遠隔地との交流や往来が確認できる。
- ⑤ 堅穴住居跡（以下、住居跡とする）の平面形態、柱穴、炬の特徴、銅鐔形土製品や銅銅の出土など、遺構や土器以外の遺物からも遠隔地との交流がつかめる。
- ⑥ 以上のことから、弥生時代後期の関東地方を代表する集落遺跡のひとつであるとともに、荒川流域を中心として関東地方の弥生社会を解明する鍵となり得る遺跡である。また、弥生時代後期における広域にわたる交流と、地域間関係の再編過程が把握できる。

このような遺跡の重要性を鑑み、当市では2013（平成25）年4月に、遺跡の第15次調査地区（新倉3丁目2831-1）306㎡を公有地化し、和光市指定文化財（史跡）に指定することで遺跡の保存を進めた。また、2018（平成30）年2月には午王山遺跡から出土した弥生時代の遺物121点が、「午王山遺跡出土品」として埼玉県指定文化財（考古資料）に指定され、遺跡・遺物ともに市民にも重要性が周知されてきた。加えて出土遺物が埼玉県指定を受けたことで、午王山遺跡は埼玉県内外の弥生時代研究者から改めて注目されることとなった。

午王山遺跡は、既に15回の発掘調査が行われており（第1表）、調査地点ごとに報告書が完成し、調査成果が公開され遺跡の特徴が明らかとなっているが、各報告書は各調査地点を報告するものであり遺跡全体の価値や意義を総括するものではなかった。一方で、遺跡内の一部に開発が入るなど、このままでは将来に午王山遺跡を残すことが難しいことから、早急な保存体制が望まれている。これらを総合的に判断した結果、これまでの調査成果を総括し、弥生時代集落として武蔵野台地・大宮台地における特徴や重要性を解明することにより午王山遺跡の学術的な価値を明らかにし、今後の保存と活用の基本情報とするため、総括報告書を作成した。

第1表 午王山遺跡調査一覧表

年度	調査次	調査期間	地番	調査面積	主な遺構・遺物	担当者	報告書
1978～1979 (昭和53～54)	第1次	1979.3.20～6.16	新倉3丁目2867-1 外	約2,200㎡	弥生時代の方形周溝墓3基、 中世の火葬墓5基・板碑45基	鈴木敏弘	・新倉午王山遺跡 ・にいくらごぼりやま1979
1981 (昭和56)	第2次	1981.8.10～11.30	新倉3丁目2836-1 外	約1,500㎡	弥生時代の住居跡49軒・溝3 条	鈴木敏弘	・和光市埋文 報告書第9集 ・にいくらごぼりやま1982
1992 (平成4)	第3次	1993.3.1～3.26	新倉3丁目2861-1	約272㎡	弥生時代の溝2条、銅鐸形土 製品、古墳時代の住居跡1軒	鈴木一郎	和光市埋文報 告書第15集
1993 (平成5)	第4次	1993.8.30～9.22	新倉3丁目2844-1	約510㎡	弥生時代の住居跡7軒・溝2 条	鈴木一郎	和光市埋文報 告書第13集
1994 (平成6)	第5次A区	1994.6.30～9.2	新倉3丁目2836-1	約800㎡	弥生時代の住居跡2軒・溝1 条	鈴木一郎	和光市埋文報 告書第18集
1994 (平成6)	第5次B区	1994.6.30～9.2	新倉3丁目2842- 1,2843-1	約594㎡	弥生時代の住居跡13軒・溝2 条、銅鐸形土製品・土鈴	鈴木一郎	和光市埋文報 告書第18集
1995～1996 (平成7～8)	第6次	1996.2.13～8.30	新倉3丁目2841- 1,2842-1	約1,119㎡	弥生時代の住居跡25軒	鈴木一郎	和光市埋文報 告書第23集
1997 (平成9)	第7次	1998.3.17～3.25	新倉3丁目2847- 1,2861-2	約105.6㎡	弥生時代の溝1条、銅鐸形土 製品	鈴木一郎	和光市埋文報 告書第31集
2000 (平成12)	第8次	2000.4.3～7.18	新倉3丁目2839-1	約787㎡	弥生時代の住居跡24軒	鈴木一郎 前田秀則	和光市埋文報 告書第33集
2000～2001 (平成12～13)	第9次A区	2001.2.13～6.10	新倉3丁目2832-1	約368㎡	弥生時代の住居跡9軒	鈴木一郎 前田秀則	和光市埋文報 告書第35集
2000～2001 (平成12～13)	第9次B区	2001.2.26～6.29	新倉3丁目2840-1	約479㎡	弥生時代の住居跡16軒	鈴木一郎 前田秀則	和光市埋文報 告書第35集
2004 (平成16)	第10次	2004.11.1～11.26	新倉3丁目2837-1	約567㎡	弥生時代の住居跡1軒・溝2 条・方形周溝墓2基	鈴木一郎 前田秀則	和光市埋文報 告書第57集
2004 (平成16)	第11次	2004.11.16～12.24	新倉3丁目2838-1	約178㎡	弥生時代の住居跡1軒・溝1 条	鈴木一郎 前田秀則	和光市埋文報 告書第39集
2004～2005 (平成16～17)	第12次	2005.1.28～5.9	新倉3丁目2834-1	約400㎡	弥生時代の住居跡11軒、土 製勾玉・ミナ7土製品	鈴木一郎 前田秀則	和光市埋文報 告書第40集
2006 (平成18)	第13次	2006.8.16～8.24	新倉3丁目2825-3	約5㎡	弥生時代の溝1条	鈴木一郎	和光市埋文報 告書第38集
2006～2007 (平成18～19)	第14次	2007.3.5～5.11	新倉3丁目2834-1	約684㎡	弥生時代の住居跡16軒、土 製の小玉・双角有孔土製品	鈴木一郎 前田秀則	和光市埋文報 告書第42集
2011 (平成23)	第15次	2011.4.26～4.28	新倉3丁目2831-1	約306㎡	弥生時代の住居跡6軒・土坑 2基	鈴木一郎	和光市埋文報 告書第46集

第2節 総括報告書作成の方針

本総括報告書の作成に際しては、以下のような方針を立てて作業に当たった。

- ① 1979（昭和54）年度から2011（平成23）年度まで15次にわたる発掘調査の成果を統一的に整理検討して、午王山遺跡の全体像を具体的かつ的確に把握できるようにする。
- ② それに基づいて、午王山遺跡の特徴および重要性を明確にする。
- ③ 今後の保存と活用を考える際の基本情報とする。

第3節 総括報告書作成の経緯と組織

総括報告書作成の経緯 午王山遺跡で実施した発掘調査の記録については、1979（昭和54）年の第1次調査から直近の第15次調査まで、調査報告書により報告している。第1次調査によって中世の板碑群や弥生時代の3基の方形周溝墓が検出され、続く第2次調査で弥生時代の環濠集落の存在が確認されるなど、発掘調査の開始当初から報告書の中で遺跡の重要性が示されてきた。和光市文化財保護委員会委員からも、早くから遺跡の重要性が唱えられ、保存・活用の必要性への指摘を受けてきた。

市では、2007（平成19）年7月に第1次調査出土板碑群を和光市指定文化財（考古資料）に指定し、2013（平成25）年4月には、第15次調査区（新倉3丁目2831-1）306㎡を和光市指定文化財（史跡）に指定するなど、遺跡の保存を進めた。また、2018（平成30）年2月には午王山遺跡から出土した弥生時代の遺物121点が、「午王山遺跡出土品」として埼玉県指定文化財（考古資料）に指定されている。

このように、2018（平成30）年に入り出土遺物が県指定文化財に指定されるなど、改めて午王山遺跡の重要性が注目されてきた。午王山遺跡の今後の保護の方向性について和光市長をはじめ市長部局を交えて検討し、検討の結果、市の施策として国史跡の指定を目指し、文部科学大臣宛ての意見具申書の提出に向けた調査を進めることとなった。これらの市の方向性に関し、2018（平成30）年8月に開催した和光市文化財保護委員会の中で全会一致で承認された。

一般的には、史跡検討委員会を設置し、遺跡の重要性や価値づけの検討を行い、再評価するところであるが、開発が進み宅地が散見され始めている午王山遺跡の現状や、過去15回にわたる発掘調査の記録を報告書の中で示しており、遺跡の代表的な特徴の一つである多重環濠の可能性を示す2条の環濠の並行関係が理解できていること、居住域と墓域からなる集落の全容が把握できていること等、遺跡の詳細が明らかになっていることなどから、2019（平成31）年1月に学識経験者により構成した午王山遺跡総括報告書策定委員会を設置し、総括報告書の作成を進めることとなった。

総括報告書の刊行に伴い、2019（平成31）年4月に全体測量を実施し、世界測地系での遺跡内の位置座標の確認を行った（第2図）。併せて最新の航空写真撮影により、遺跡・地形の最新情報を記録した。

総括報告書作成の組織 2018（平成30）年度から総括報告書の作成に着手し、2019（令和元）年6月に総括報告書の刊行に至った。本事業は、2018年度は和光市単費により、2019年度

は文化庁国庫補助事業として実施した。

各年度における事業の実施体制は、以下のとおりである。

午王山遺跡総括報告書策定委員会 2018（平成30）年度～2019（平成31（令和元））年度

石川日出志 明治大学教授

小倉 淳一 法政大学教授

柿沼 幹夫 前埼玉県文化財保護審議会委員 さいたま市遺跡調査会会長

午王山遺跡総括報告書執筆委員（午王山遺跡総括報告書策定委員会オブザーバー）

遠藤 英子 元明治大学黒曜石研究センター研究員

鈴木 敏弘 和光市文化財保護委員会委員

2018（平成30）年度実施内容 出土資料の基礎整理・総括報告書原稿及び図版作成・編集
教育委員会事務局

教育長 戸部 恵一 教育部長 東内 京一

生涯学習課課長 横山 英子 課長補佐兼文化財保護担当統括主査 鈴木 一郎

文化財保護担当 主査 岸 勝己 主任 石田 清 主事 糸野 友也 安井 翠

文化財調査指導員 前田 秀則

整理作業参加者

非常勤職員 江口やよい 大内 一雄 坂口由加里

2019（平成31（令和元））年度実施内容 総括報告書原稿及び図版作成・編集・刊行
教育委員会事務局

教育長 戸部 恵一 教育部長 結城浩一郎

生涯学習課課長 茂呂あかね 課長補佐兼文化財保護担当統括主査 鈴木 一郎

文化財保護担当 主査 岸 勝己 主任 糸野 友也 主事 安井 翠

文化財調査指導員 前田 秀則

整理作業参加者

非常勤職員 江口やよい 大内 一雄 坂口由加里

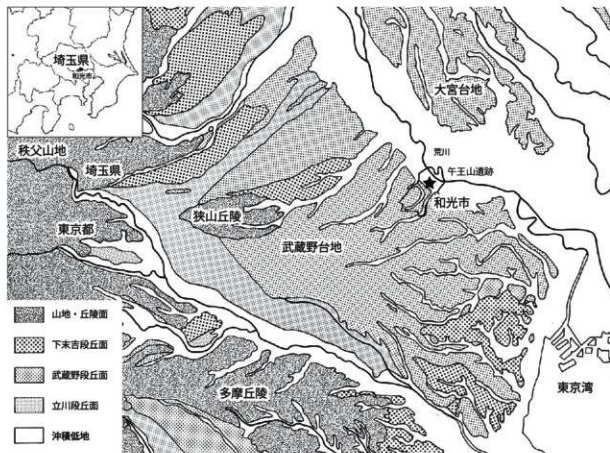
第Ⅱ章 遺跡の地理的環境と歴史的環境

第1節 立地と地理的環境

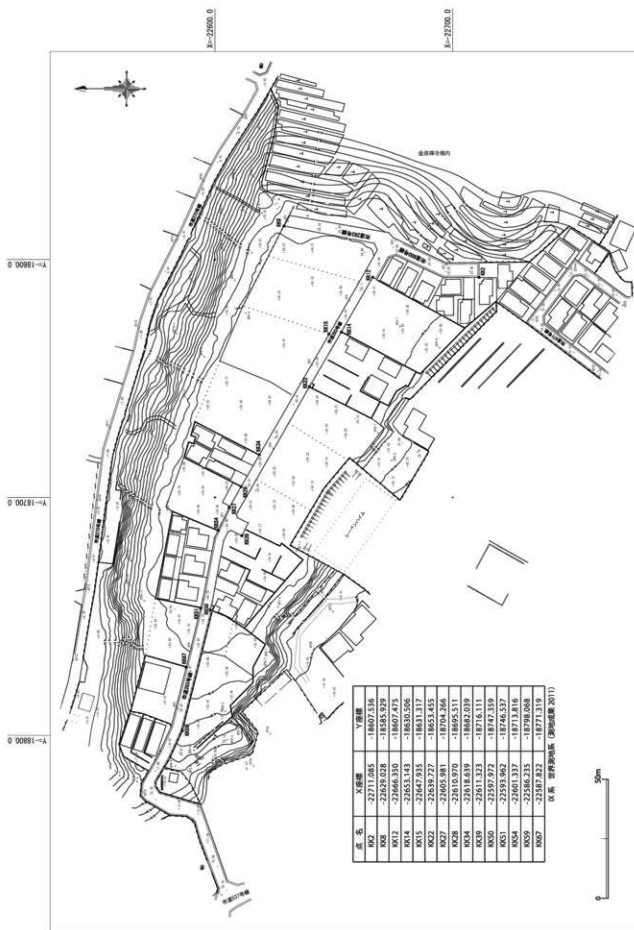
(1) 和光市の地理的状況

午王山遺跡は、埼玉県和光市に所在する。和光市の規模は、東西約2.5km・南北約4.9km、面積11.04㎢をはかる。北は荒川（旧入間川）を挟み戸田市、東は白子川を挟み東京都板橋区、南は東京都練馬区、西は越戸川を挟み朝霞市と隣接している。市内の中央を南北に縦断するように東京外かく環状道路、東側の南北を主要地方道練馬川口線（県道68号線）が貫き、市内中央には東西に東武東上線・地下鉄有楽町線・副都心線が走るほか、それに並行して同じく東西方向に川越街道（国道254号線）が通る。このような都心への交通の利便性は和光市の大きな魅力の一つであり、また都心から15～20km圏内に位置することから、近年市街地化が急速に進む地域である。

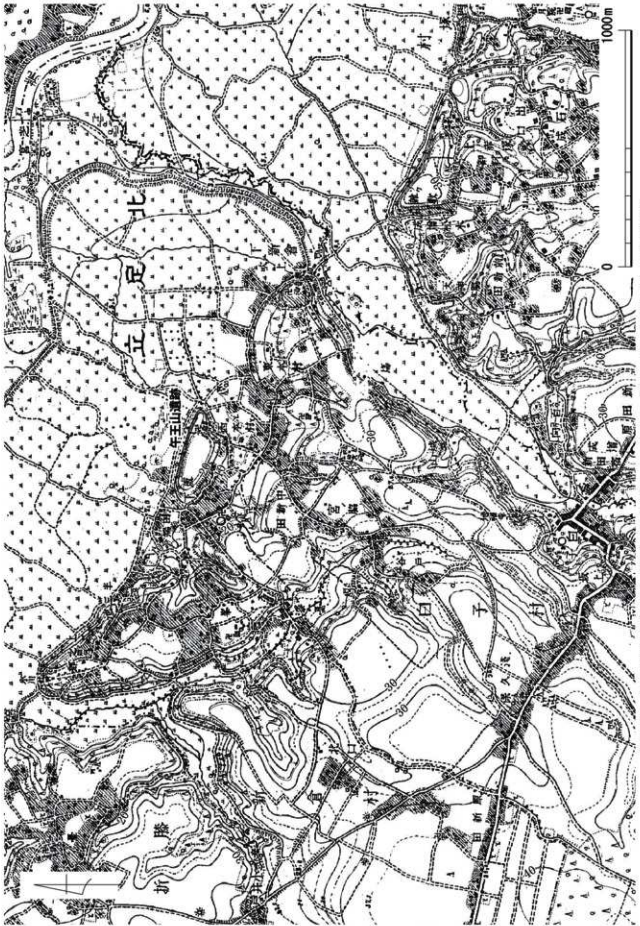
和光市の地形は、武蔵野台地と荒川低地からなり、台地が約70%、沖積低地が約30%の割合で市域を占める。和光市の大半が位置する武蔵野台地は関東平野の南西部に広がる洪積台地で、北西を荒川の支流である入間川、北東を荒川、南を多摩川の各河川およびそれらの氾濫原である沖積低地によって画された、東西幅約50kmの規模を有する国内最大級の洪積台地の一つである。武蔵野台地の標高は青梅付近の約180mを扇頂として東に向かって徐々に



第1図 武蔵野台地と周辺地形区分図 (S=1/400000)



第2図 午王山遺跡座標図



第3圖 牛玉山遺跡地形図〈明治43年測図二万分之一「白子」を改変〉(S=1/16000)

に低くなり、和光市域では台地上で24～40m程となっている。武蔵野台地内には形成時期や標高、構成層を異にした段丘面が存在することが分かっている（貝塚1979）。古い順に多摩面（狭山丘陵）、下末吉面、武蔵野面（武蔵野段丘）、立川面（立川段丘）と大きく4つに分類され、このうち本市域は武蔵野面に位置している。

和光市内における武蔵野台地の地層は、最上層は黒色腐食土に覆われた土壌で、この下に関東ローム層である立川ローム層・武蔵野ローム層、次に凝灰質の粘土層が分布する。その下には砂礫を含む武蔵野礫層、さらに下には貝化石・果孔化石を含む海成層である東京層が横たわる。この東京層はさらに、細砂層の上部東京層と、砂礫層の東京礫層に分けることができる。

和光市の地形発達をみるにあたり、武蔵野台地の成り立ちを追っていくと、約10万年前に古東京湾の海退が始まり、その際に湾内に沈み取り残された貝類が化石として堆積し東京層となる。つづく約8万年前には、古多摩川を氾濫原とし武蔵野礫層を形成し、その上にローム層が積もっていく。そして約6万年前には、荒川・利根川が同時に荒川筋を流下する。約2万年前、ウルム氷期の中でも最も寒冷な時期を迎えると、台地と低地の高低差は最大となる（中村2018）。この間に、武蔵野台地に小支谷の刻みが数多く入り込み、午王山遺跡が乗る小丘が形成されたと考えられる。

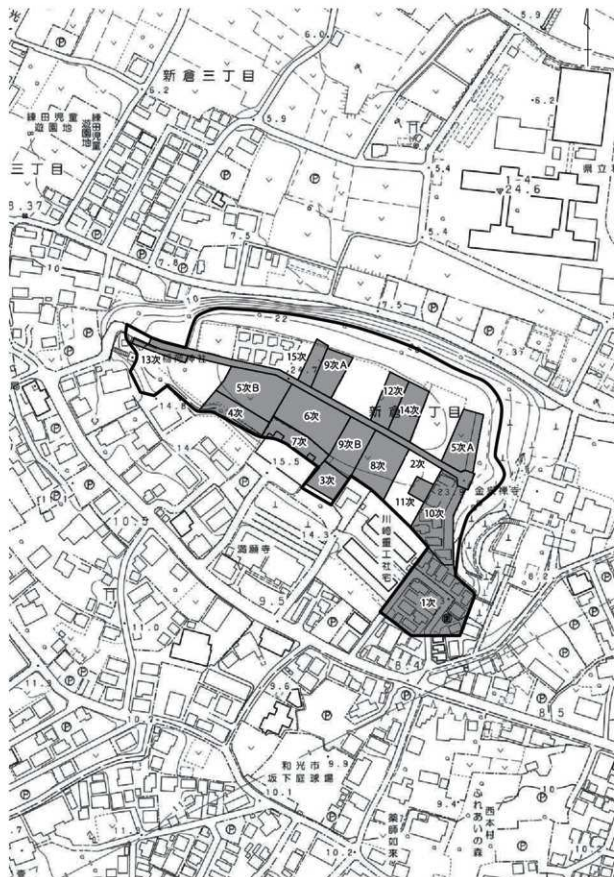
市内を流れる主要な河川は荒川（旧入間川）と白子川、越戸川の3河川で、ほかは市内中央部を流れる谷中川と谷戸川である。白子川は、練馬区東大泉（大泉井頭公園）を発し和光市・練馬区の境、板橋区との境を流れ新河岸川にそそぐ。越戸川は、七ツ釜（東京メトロ和光車両基地内・陸上自衛隊朝霞駐屯地内など）を発し和光市・朝霞市の境を流れ、強清水などの湧水を集めながら谷中川と合流し新河岸川にそそぐ。また谷中川は、旧大泉村長久保付近（大泉中央公園）を源として和光市の中央部を流れ、途中から谷戸川が合流し越戸川にそそぐ。市域は荒川及びこれらの中小河川により、台地には多くの浸食谷が形成され、複雑な地形を呈している。そのため市内各所には湧水が多く見られ、現在約20か所を数える。

（2）午王山遺跡の地理と地形の概要

午王山遺跡は、武蔵野台地の北東端に位置し荒川右岸の独立丘上に立地する。遺跡の規模は、東西約250m、南北では東側が約170m・西側が約50m、面積は約19,781㎡を測る。標高は約24mで、低地との比高差は約18mである。また遺跡が乗る午王山全体を見ると、ふもとで東西約350m、南北では東側が約200m・西側が約150m、面積は約61,250㎡である。

午王山遺跡の平坦部及び斜面部の現況をみると、北側斜面は雑木林で、急斜面のため「土砂災害特別警戒区域」に指定され、東側は寺院とそれに付属する墓地となり、上部平坦部は畑地として営まれているほか、一部は宅地となっている。

午王山遺跡の周囲は荒川によって形成された沖積低地である。開析された遺跡南側は、宅地化され住宅が密集する。遺跡北側の荒川低地帯はかつて「新倉田んぼ」と称され多くが水田として利用されていた。その中で午王山の北側には広い湿地帯が広がり、午王山近くを一大湧水地点として豊富な湧水により中央には「溜池」と呼ばれた農業用水池が存在した。昭和初期には農業用水の役割を發揮していたが、その後農業人口が減り、水田と導水路も減少した。やがて昭和16年に農民から「養魚場として利用したい」という声が上がリ、翌



第4図 午王山遺跡発掘調査位置図 (S=1/2500)

年には鯉の稚魚を放ち用水池は養魚場に姿を変えた。しかし数年後には雷魚の出現により池は荒れ、管理者の人手不足も重なり養魚場としての役目を終えることとなった。やがて昭和25年頃には湧水は涸れ、ついには用水池としての機能を完全に失う。のちにこの地は埋め立てられ、現在は昭和47年に開校した県立和光高校が所在する。

現在、午玉山北側の一部では、堆積した土層を観察することができる。武蔵野礫層や粘土層のほか上部東京層の最上層の一部があらわれ、海成層の中には生痕化石を観ることができる。

【引用・参考文献】

- 貝塚夷平 1979『東京の自然史（増補第二版）』紀伊國屋書店
 中村新之介 2018『平成29年度 特別展 水のゆくえ～荒川の歴史～』板橋区立郷土資料館
 和光市 1983『にくらさかした・くらしのあゆみ・』和光市坂下公民館歴史委員会
 和光市 1987『和光市史 通史編 上巻』和光市
 和光市 2015『和光市市民提案型協働事業 和光市湧水環境調査 報告書』和光市市民環境部環境課 NPO 法人 和光・緑と湧き水の会

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

遺跡の概要 午玉山遺跡は、埼玉県和光市新倉3丁目2831番1外にかけて所在する。本遺跡の発掘調査は1979（昭和54）年に実施された第1次調査に始まり、現在までに市道整備や宅地造成、農地改良工事に伴う調査と史跡整備に伴う確認調査が計15回行われている（第4図）。これまでの調査の結果から旧石器時代から近世までの複合遺跡であることが判明している。なかでも主体となるのは弥生時代で、これまでに確認された住居跡は、弥生時代中期後半から後期後半までの152軒にのぼり、出土遺物から弥生時代後期中葉から後期後半に比定される住居跡が多数を占めている。住居跡以外の遺構としては、方形周溝墓が遺跡南東側第1次調査区の緩斜面から3基、隣接する第10次調査区から2基検出されている。また、環濠が3条検出された。内環濠のA溝（旧第1号溝・第2号溝）は第2次・3次・4次・5次・7次・10次・11次調査から、外環濠のB溝（旧第6号溝）は第3次・4次・5次・10次調査から、条濠とみられるC溝（旧第5号溝）は第2次・13次調査からそれぞれ検出されており、本遺跡は環濠集落として周知の遺跡である（第9図）。このほか、時期は異なるが、第1次調査区からは中世の板碑が45基検出されており、和光市指定文化財となっている。

（1）午玉山遺跡周囲の弥生時代の市内遺跡

現在和光市内では43か所の遺跡が確認されている（第5図・第2表）。このうち、午玉山遺跡周囲の弥生時代の市内遺跡では、本遺跡の北西側、南東方向に伸びる幅の狭い台地上には上之郷遺跡（No.1）、花ノ木遺跡（No.2）、半三池遺跡（No.34）、峯遺跡（No.35）、峯前遺跡（No.3）が位置している。

舌状の台地先端に位置する上之郷遺跡は2回の調査が実施されており、弥生時代の遺構は弥生時代後期の住居跡が3軒検出されている。

花ノ木遺跡では和光市主体の調査15回と東京外かく環状道路建設に伴い実施された埼玉

県埋蔵文化財調査事業団による調査を合わせて16回の調査が実施されており、旧石器時代から近世にかけての遺構と遺物が検出されている。なかでも弥生時代・古墳時代・平安時代が主体で、弥生時代の遺構は住居跡が17軒、方形周溝墓が8基、環濠が3条検出されている。環濠は事業団調査区から2条、和光市主体の発掘調査区からは事業団調査区から検出された二重環濠とは別方向に展開する環濠が1条検出されており、二つの集落の存在が確認されている。

半三池遺跡は1回の調査が実施されている。弥生時代の「V字状」の溝が1条検出され、花ノ木遺跡の環濠との関連性が指摘されている。

峯遺跡は3回の調査が実施されている。主体となるのは弥生時代・古墳時代・平安時代で、弥生時代の遺構は弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡が2軒検出されている。

峯前遺跡は7回の調査が実施されている。主体となるのは弥生時代・古墳時代・平安時代で、弥生時代の遺構は弥生時代後期の住居跡が9軒、弥生時代後期末から古墳時代前期の方形周溝墓が3基検出されている。

午王山遺跡の南西側の谷を挟んだ台地上には漆台遺跡(No.43)、四ツ木遺跡(No.4)が位置している。

漆台遺跡は2回の調査が実施されている。弥生時代の遺構は弥生時代後期の住居跡が1軒検出されている。

四ツ木遺跡では5回の調査が実施されている。主体となるのは縄文時代・弥生時代・古墳時代で、弥生時代の遺構は弥生時代後期から古墳時代前期の住居跡が26軒、方形周溝墓が2基検出されている。

午王山遺跡の南側の谷を挟んだ台地上には妙典寺遺跡(No.14)、下里遺跡(No.12)、支谷を挟んで吹上遺跡(No.13)、吹上原遺跡(No.15)、市場峽・市場上遺跡(No.17)が位置している。

妙典寺遺跡は6回の調査が実施されている。主体となるのは弥生時代・古墳時代で、弥生時代の遺構は弥生時代後期の住居跡が9軒、後期末の住居跡が19軒、後期後半から古墳時代前期の住居跡が1軒検出されている。第2次調査区第22号住居跡からは環状石斧が出土している。

下里遺跡は1回の調査が実施されている。弥生時代の遺構は方形周溝墓が1基検出されている。

吹上遺跡は4回の調査が実施されている。主体となるのは弥生時代・古墳時代・平安時代で、弥生時代の遺構は弥生時代後期の住居跡が34軒、環濠が1条、環濠と推測される溝が1条、方形周溝墓と推測される溝が1条検出されている。第3次調査区第26号住居跡からは青銅製環状品が出土し、指輪と考えられている。

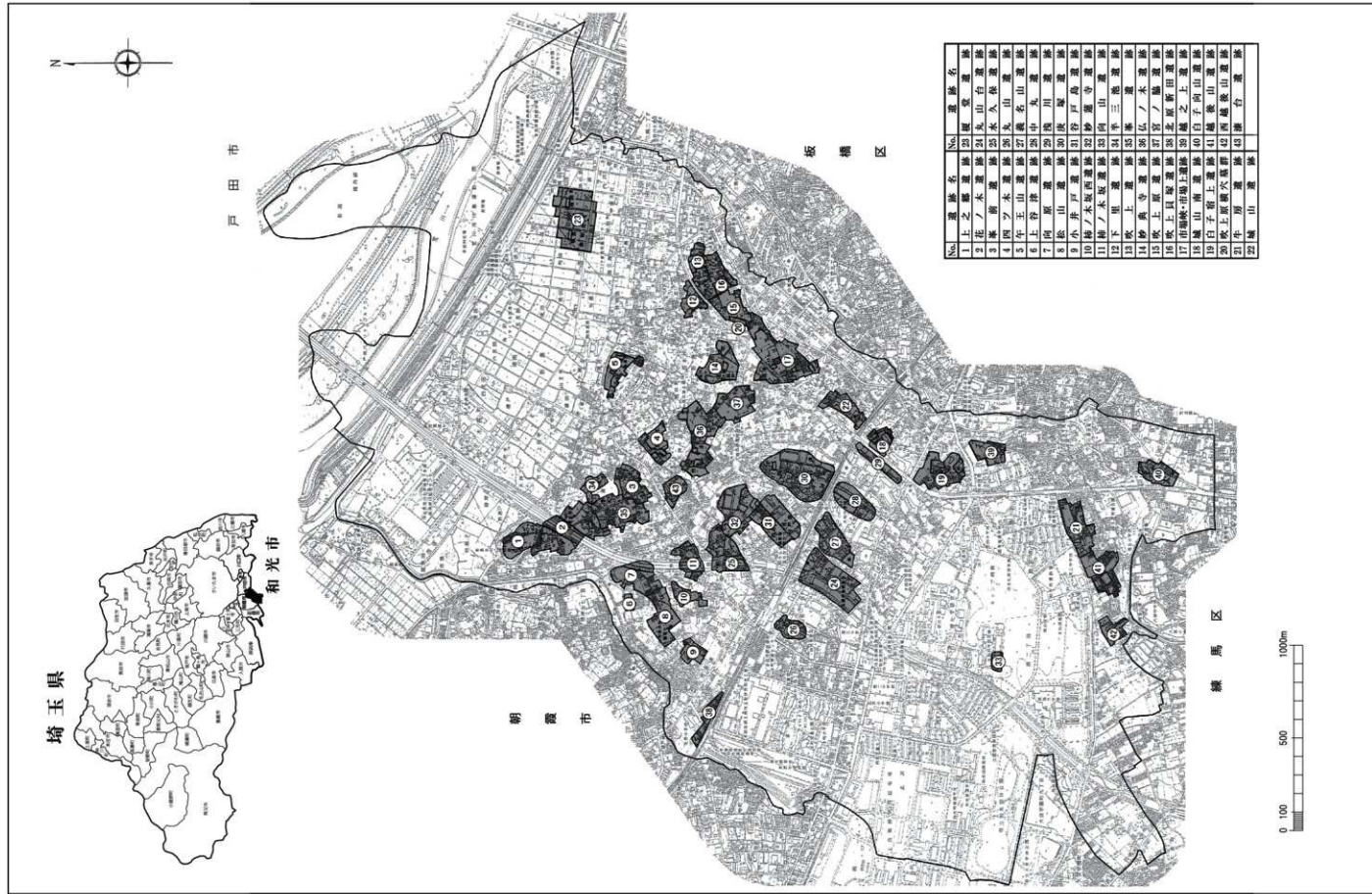
吹上原遺跡は8回の調査が実施されている。主体となるのは縄文時代・弥生時代・古墳時代で、弥生時代の遺構は弥生時代後期の方形周溝墓が28基、溝が3条検出されており、吹上遺跡の墓域として考えられている。また、古墳時代の円墳が周溝のみであるが4基検出されている。

市場峽・市場上遺跡は28回の調査が実施されている。主体となるのは弥生時代・古墳時

第2表 市内遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	主な時代・時期	所在地
1	上之郷	集	弥(中・後)・古(前)	新倉2丁目3207～3210外
2	花ノ木	集	旧・弥(中・後)・古・平	新倉2丁目3440～3443外
3	峯前	集	弥(後)・平	新倉2丁目2987～2989外
4	四ツ木	集	旧・縄(早・後～晩)・弥(後)・平	新倉3丁目2925～2928外
5	午王山	集	旧・弥(中・後)・平・中	新倉3丁目2829～2843外
6	上谷津	集	縄	新倉1丁目3937外
7	向原	集	縄	新倉1丁目3848～3854外
8	松山	集	縄	新倉1丁目4012～4020外
9	小井戸	集	縄	新倉1丁目4252～4255外
10	柿ノ木坂西	集	縄・中	新倉1丁目3786～3791外
11	柿ノ木坂	集	旧・縄(後)・平	新倉1丁目3764～3773外
12	下里	集・貝	弥(後)・古・奈	下新倉4丁目4424外
13	吹上	集・貝	縄・弥(後)・古・奈・平	白子3丁目4417～4421外
14	妙典寺	集	縄・弥(後)・古	下新倉4丁目2045～2059
15	吹上原	集・古	縄(中)・弥(後)・古	白子3丁目4445～4448外
16	吹上貝塚	集・貝	縄(前・中)	白子3丁目4376外
17	市場畷・市場上	集・貝・横	縄(早・前・後)・弥(後)・平	白子3丁目589～596外
18	城山南	集	旧・縄	白子2丁目1043～1048外
19	白子宿上	集・貝	縄(早・前・後)・古・平	白子2丁目1101～1107外
20	吹上原横穴墓群	横	古(後)	白子3丁目178.4463.4464外
21	牛房	集	縄・古	南1丁目2386～2391外
22	城山	集	縄・弥(後)・古・平	白子3丁目735～743外
23	榎堂	集	弥(後)・古・平・中	下新倉6丁目133外
24	丸山台	集	縄(後)	丸山台2丁目25-1外
25	水久保	集	旧・縄(中)・古・平	新倉1丁目3673～3717外
26	丸山	集	縄	丸山台1丁目11-3外
27	義名山	集	縄(後)	丸山台2丁目23-1外
28	中丸	集	縄	丸山台2丁目8-11外
29	浅川	集	縄	丸山台3丁目10-9外
30	庚塚	集	縄(中)・中	下新倉2丁目1376～1380外
31	谷戸島	集	縄(中)	下新倉2丁目1233～1238外
32	妙蓮寺	集	旧・縄(中)・古(後)・中	下新倉2丁目1124外
33	向山	集	縄(中)	南2丁目1535外
34	半三池	集	弥(後)	新倉2丁目3009～3012外
35	峯	集	縄・弥(後)・古・平	新倉2丁目3466～3474外
36	仏ノ木	集	旧・古・平	下新倉3丁目906外
37	宮ノ脇	集	縄・平	下新倉3丁目1020外
38	北原新田	集	縄	新倉1丁目4324～4327外
39	越之上	集	縄・古(前)	白子2丁目1363～1378外
40	白子向山	集	縄	白子1丁目1959～1961外
41	越後山	集	旧・縄(中)・古	南1丁目2447～2465外
42	西越後山	集	縄(早)・古(前)	南1丁目2540～2545外
43	漆台	集	縄・平	新倉2丁目3581～3605外

種別 集:集落跡 貝:貝塚 横:横穴墓 古:古墳
 時代 旧:旧石器 縄:縄文 弥:弥生 古:古墳 奈:奈良 平:平安 中:中世 近:近世
 ()内は時期



第5図 和光市遺跡分布図

代・平安時代で、弥生時代の遺構は弥生時代後期から後期末の住居跡57軒が検出されている。

(2) 午王山遺跡周辺の弥生時代遺跡

午王山遺跡が立地する荒川下流域では、中・小河川による支谷によって形成された台地上や低地の自然堤防上に弥生時代の集落遺跡の分布が数多くみられる。第6図に遺跡の分布を示した。

以下には周辺の遺跡として埼玉県富士見市、志木市、朝霞市、和光市、さいたま市、川口市、戸田市、東京都板橋区、北区、荒川区、文京区、新宿区、中野区の主な遺跡の概要を時期ごとに説明する。遺跡については第3表に午王山遺跡周辺の弥生時代遺跡一覧表を提示しているので併せて参照されたい(遺跡番号は第6図の番号と一致している)。

弥生時代中期 遺跡は低地を望む台地端部や深く入った谷の縁辺部に立地するが、さいたま市本村遺跡(No.84)は荒川低地内の自然堤防上に立地している。

武蔵野台地では富士見市南通遺跡(No.12)、朝霞市ハケタ・中通遺跡(No.21)、向山遺跡(No.30)、新屋敷遺跡(No.33)、和光市花ノ木遺跡(No.36)、午王山遺跡(No.42)、板橋区成増との山遺跡(No.51)、赤塚氷川神社北方遺跡(No.53)、松月院境内・大門・赤塚下寺家番匠免遺跡(No.54)、沖山遺跡(No.55)、四葉地区遺跡(No.56)、中台三丁目東丘陵・中台島中遺跡(No.61)、志村城山遺跡(No.62)、小豆沢貝塚遺跡(No.63)、北区赤羽台遺跡(No.67)、亀山遺跡(No.70)、飛鳥山遺跡(No.72)、御殿前遺跡(No.74)、荒川区道灌山遺跡(No.79)、文京区千駄木三丁目南遺跡(No.110)、本郷元町遺跡(No.111)新宿区下落合二丁目遺跡(No.80)、下戸塚遺跡(No.81)等が分布する。このうち、沖山遺跡、志村城山遺跡、亀山遺跡、飛鳥山遺跡、道灌山遺跡、千駄木三丁目南遺跡、本郷元町遺跡では環濠が検出されている。道灌山遺跡北西側に隣接する北区田端不動坂遺跡で検出された溝跡が道灌山遺跡で検出した環濠の一部である可能性があり、同一集落であることが指摘されている。方形周溝墓はハケタ・中通遺跡、向山遺跡、赤塚氷川神社北方遺跡、志村城山遺跡、赤羽台遺跡、御殿前遺跡、下落合二丁目遺跡で確認されている。また、下落合二丁目遺跡では土坑からほぼ方形の大型土器棺が検出されている。

大宮台地ではさいたま市太田窪貝塚遺跡(No.97)、円正寺遺跡(No.98)、明花向遺跡(No.99)、大北遺跡(No.102)等が分布する。明花向遺跡では方形周溝墓が確認されている。

弥生時代後期 遺跡数が増加し、検出された住居跡の軒数は多数にのぼる。遺跡は中期同様に台地端部、谷の縁辺部に立地するが、北区豊島馬場遺跡(No.68)、さいたま市本村遺跡、戸田市鍛冶谷・新田口遺跡(No.108)は荒川低地内の自然堤防上に立地する。

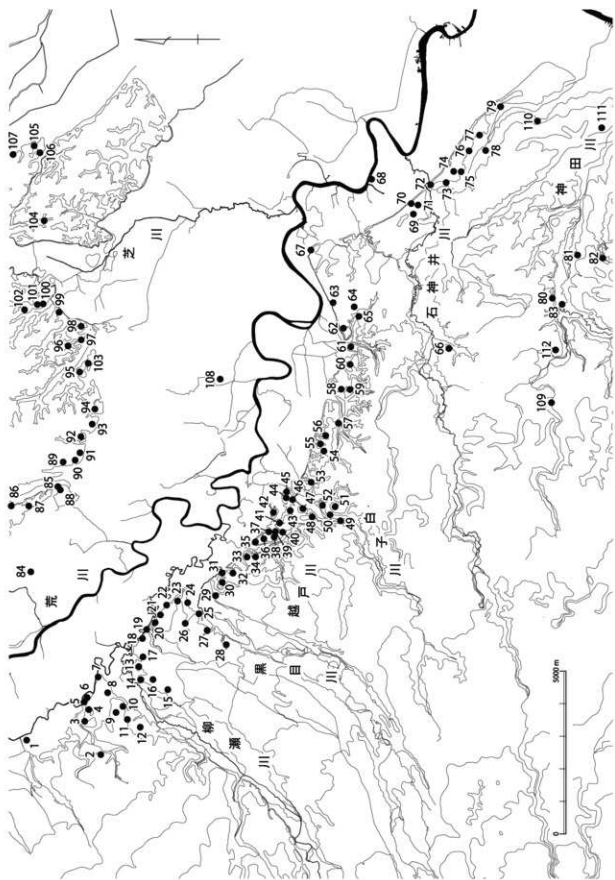
環濠が確認されている遺跡は、武蔵野台地では富士見市観音前遺跡(No.7)、北通遺跡(No.11)、南通遺跡、朝霞市中道・岡台遺跡(No.19)、稲荷山・郷戸遺跡(No.34)、和光市花ノ木遺跡、半三池遺跡(No.37)、午王山遺跡、吹上遺跡(No.45)、板橋区赤塚氷川神社北方遺跡、沖山遺跡、四葉地区遺跡、中台三丁目東丘陵・中台島中遺跡、根ノ上遺跡(No.66)、北区赤羽台遺跡、御殿前遺跡、新宿区下戸塚遺跡等で確認されている。大宮台地ではさいたま市大谷場小池下遺跡(No.95)、明花向遺跡、井沼方遺跡(No.101)、川口市小谷場貝塚遺跡(No.103)、上台遺跡(No.107)等で確認されている。南通遺跡、御殿前遺跡では300軒を超える住居跡が検出されている。また、向山遺跡では住居跡と土坑から、午王山遺跡は環濠から銅鐸形土

製品と銅鏝が出土している。高田馬場三丁目遺跡 (No. 83) では住居跡から小銅鏝が出土している。

方形周溝墓は武蔵野台地、大宮台地、荒川低地内の自然堤防上から検出されており、北通遺跡、向山遺跡、田端西台通遺跡 (No. 77)、下戸塚遺跡、井沼方遺跡では主体部から鉄剣・ガラス玉などの副葬品が出土している。吹上原遺跡 (No. 46) は吹上遺跡との、田端西台通遺跡は田端不動坂遺跡との関連性が指摘されており、それぞれ集落と墓域という関係である可能性が考えられている。

【引用・参考文献】

- 板橋区史編さん調査会 1995『板橋区史 - 資料編 1 考古』板橋区
- 江原 順 2016『第 31 回企画展 小さな銅鏝を追って - 銅鏝形土製品と小銅鏝 -』朝霞市博物館
- 柿沼幹夫 2012『荒川下流域弥生時代後期土器に関する覚書』『埼玉考古』第 48 号 埼玉考古学会
- 菊地有希子 2007『住居と集落』『埼玉の弥生時代』埼玉弥生土器観会編 六一書房
- 鶴持和夫 1990『荒川流域における中期後半の弥生集落』『埼玉考古』第 27 号 埼玉考古学会
- 小出輝雄 2007『環濠の性格についての再考察 - 埼玉県内の例を中心として -』『埼玉の弥生時代』埼玉弥生土器観会編 六一書房
- 佐々木藤雄ほか 1988『新井三丁目遺跡』東京都中野区新井三丁目遺跡発掘調査報告書 新井三丁目遺跡調査会
- 佐々木藤雄ほか 1993『西原遺跡』東京都板橋区西原遺跡発掘調査報告書 西原遺跡調査会
- 西井幸雄・新屋雅明 1994『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 野沢 均 1999『弥生時代中期後半の集落分布について』『あらかわ』第 2 号 あらかわ考古談話会
- 野沢 均 2001『朝霞市近傍の弥生時代研究の現状』『研究紀要』第 4 号 朝霞市博物館
- 松本 完ほか 1996『下戸塚遺跡の調査』第 2 部 早稲田大学校地埋蔵文化財調査室編 早稲田大学
- 山田尚友 1998『荒川下流域の弥生時代中期宮ノ台期の集落』『あらかわ』創刊号 あらかわ考古談話会
- 山田尚友ほか 2015『南鴻沼遺跡 (第 1 分冊)』さいたま市遺跡調査会報告書第 165 集 さいたま市遺跡調査会



第6図 牛王山遺跡周辺弥生時代遺跡分布図

第3表 周辺の弥生時代遺跡一覧表

(○中期・●後期)

№	遺跡名	所在地	立地	時期		遺構		備考
				中期	後期	環壕	方形周溝墓	
1	大谷	富士見市	自然堤防上		●			
2	本目	富士見市	武蔵野台地		●			
3	打越	富士見市	武蔵野台地		●			
4	松山	富士見市	武蔵野台地		●			
5	水川前	富士見市	武蔵野台地		●			
6	水子貝塚	富士見市	武蔵野台地		●			
7	観音前	富士見市	武蔵野台地		●	●		
8	東台	富士見市	武蔵野台地		●		●	
9	栗谷ツ	富士見市	武蔵野台地		●			
10	別所	富士見市	武蔵野台地		●			
11	北通	富士見市	武蔵野台地		●	●	●	
12	南通	富士見市	武蔵野台地	○	●	●		
13	中野	志木市	武蔵野台地		●			
14	城山	志木市	武蔵野台地		●			
15	西原大塚	志木市	武蔵野台地		●		●	
16	中道	志木市	武蔵野台地		●		●	
17	市場裏	志木市	武蔵野台地		●		●	
18	田子山	志木市	武蔵野台地		●		●	
19	大山第一	朝霞市	武蔵野台地		●		●	旧薬師堂山
20	大瀬戸	朝霞市	武蔵野台地		●			
21	ハケタ・中通	朝霞市	武蔵野台地	○			○	旧宮戸ハケタ
22	長塚	朝霞市	武蔵野台地		●			
23	入部・狭	朝霞市	武蔵野台地		●			
24	中道・中道下	朝霞市	武蔵野台地		●			
25	西久保・宮山	朝霞市	武蔵野台地		●			
26	北原・谷津	朝霞市	武蔵野台地		●			
27	南割・西久保	朝霞市	武蔵野台地		●			
28	泉水山・富士谷	朝霞市	武蔵野台地		●			
29	中道・岡台	朝霞市	武蔵野台地		●	●		
30	向山	朝霞市	武蔵野台地	○	●		○●	
31	宮台	朝霞市	武蔵野台地		●			
32	宮台・宮原	朝霞市	武蔵野台地		●			
33	新屋敷	朝霞市	武蔵野台地	○	●			旧台の城山
34	稲荷山・郷戸	朝霞市	武蔵野台地		●	●		旧稲荷山東
35	上之郷	和光市	武蔵野台地		●			
36	花ノ木	和光市	武蔵野台地	○	●	●	●	
37	半三池	和光市	武蔵野台地		●	●		
38	峯	和光市	武蔵野台地		●			
39	峯前	和光市	武蔵野台地		●		●	
40	漆台	和光市	武蔵野台地		●			
41	四ツ木	和光市	武蔵野台地		●		●	
42	午王山	和光市	武蔵野台地	○	●	●	●	

(○中期・●後期)

№.	遺跡名	所在地	立地	時期		遺構		備考
				中期	後期	竪溝	方形周溝墓	
43	妙典寺	和光市	武蔵野台地		●			
44	下里	和光市	武蔵野台地		●		●	
45	吹上	和光市	武蔵野台地		●	●	●	
46	吹上原	和光市	武蔵野台地		●		●	
47	市場狭・市場上	和光市	武蔵野台地		●			
48	城山	和光市	武蔵野台地		●			
49	成増一丁目	板橋区	武蔵野台地		●			
50	成増百向・成増新田原	板橋区	武蔵野台地		●			
51	成増との山	板橋区	武蔵野台地	○	●			
52	菅原神社台地上	板橋区	武蔵野台地		●			
53	赤塚氷川神社北方	板橋区	武蔵野台地	○	●	●	○●	
54	松月院境内・大門・赤塚下寺家番匠免	板橋区	武蔵野台地	○	●		●	
55	神山	板橋区	武蔵野台地	○	●	○●		
56	四葉地区	板橋区	武蔵野台地	○	●	●	●	
57	徳丸東・徳丸北野神社	板橋区	武蔵野台地		●		●	
58	西台	板橋区	武蔵野台地		●			
59	西台後藤田	板橋区	武蔵野台地		●		●	
60	中台馬場崎貝塚	板橋区	武蔵野台地		●			
61	中台三丁目東丘陵・中台畠中	板橋区	武蔵野台地	○	●	●	●	
62	志村城山	板橋区	武蔵野台地	○	●	○	○	
63	小豆沢貝塚	板橋区	武蔵野台地	○	●		●	
64	志村・志村坂上・四枚畑	板橋区	武蔵野台地		●		●	
65	前野熊野北	板橋区	武蔵野台地		●			
66	根ノ上	板橋区	武蔵野台地		●	●		
67	赤羽台	北区	武蔵野台地	○	●	●	○●	
68	豊島馬場	北区	自然堤防上		●			
69	十条台一丁目	北区	武蔵野台地		●			
70	亀山	北区	武蔵野台地	○	●	○		
71	北区役所	北区	武蔵野台地		●			
72	飛鳥山	北区	武蔵野台地	○	●	○	●	
73	七社神社前	北区	武蔵野台地		●		●	
74	御殿前	北区	武蔵野台地	○	●	●	○●	
75	西ヶ原貝塚	北区	武蔵野台地		●			
76	中里狭上	北区	武蔵野台地		●			
77	田端西台通	北区	武蔵野台地		●		●	
78	田端町	北区	武蔵野台地		●			
79	道灌山	荒川区	武蔵野台地	○		○		
80	下落合二丁目	新宿区	武蔵野台地	○	●		○●	
81	下戸塚	新宿区	武蔵野台地	○	●	●	●	
82	戸山	新宿区	武蔵野台地		●			
83	高田馬場三丁目	新宿区	武蔵野台地		●			
84	本村	さいたま市	自然堤防上	○	●			

(○中期・●後期)

No.	遺跡名	所在地	立地	時期		遺構		備考
				中期	後期	竪塚	方形周溝墓	
85	札之辻1号	さいたま市	大宮台地		●		●	
86	札之辻3号	さいたま市	大宮台地		●			
87	日向北	さいたま市	大宮台地		●			
88	西堀上ノ宮	さいたま市	大宮台地		●		●	
89	別所子野上	さいたま市	大宮台地		●		●	
90	別所西野台	さいたま市	大宮台地		●			
91	別所	さいたま市	大宮台地		●			
92	白幡本宿	さいたま市	大宮台地		●			
93	白幡上ノ台	さいたま市	大宮台地		●			
94	根岸	さいたま市	大宮台地		●			
95	大谷場小池下	さいたま市	大宮台地		●	●		
96	善前南	さいたま市	大宮台地		●			
97	太田窪貝塚	さいたま市	大宮台地	○				
98	円正寺	さいたま市	大宮台地	○	●			
99	明花向	さいたま市	大宮台地	○	●	●	○	
100	井沼方南	さいたま市	大宮台地		●			
101	井沼方	さいたま市	大宮台地		●	●	●	
102	大北	さいたま市	大宮台地	○				
103	小谷場貝塚	川口市	大宮台地		●	●	●	
104	本曾呂	川口市	大宮台地		●			
105	戸塚5丁目	川口市	大宮台地		●			
106	戸塚立山	川口市	大宮台地		●			
107	上台	川口市	大宮台地		●	●	●	旧精進場・戸塚上台・七郷神社裏
108	鍛冶谷・新田口	戸田市	自然堤防上		●		●	
109	平和の森公園北・新井三丁目	中野区	武蔵野台地		●		●	
110	千駄木三丁目南	文京区	武蔵野台地	○		○		
111	本郷元町	文京区	武蔵野台地	○		○		
112	落合	新宿区	武蔵野台地		●			

第三章 午王山遺跡の調査経過

第1節 本調査以前

午王山を考古学的な手法によって正式に発掘調査をしたのは、1979（昭和54）年に行われた和光市午王山遺跡調査会による第1次調査からである。しかし、発掘調査以前から午王山には歴史的な関心が寄せられていた。ここでは発掘調査以前、午王山に向けられていた視点と遺跡として認知される過程を紹介する。

文献資料からみる午王山 奈良時代に確立した天皇を中心とした律令国家体制では、今の埼玉県・東京都周辺は「武蔵国」と呼ばれており、さらにいくつかの「郡」や「里」に分割されていた。『続日本紀』によれば、758（天平宝字2）年8月「帰化新羅僧32人、尼2人、男19人、女21人、移武蔵国閑地、於是始置新羅郡」（宇治谷沢1992）と記載されている。これは、もともとは新羅という国出身だった僧侶や尼、男性、女性が武蔵国に移され、それをきっかけに「新羅郡」という郡ができたということの意味しており、「新羅郡」は、現在の和光市・朝霞市・志木市・新座市とその周辺であろうと言われている。その後、10世紀中頃に完成したとされる『和名類聚抄』に各地の国や郡が記載される中で、武蔵国から「新羅郡」は見当たらなくなり、代わりに「新座郡」が姿を見せる。この「新座郡」の読み方に「爾比久良」と当てられており、当時「にいくら」と呼ばれていたことがわかる。午王山が位置している新倉の地名は、この「新座郡」に由来すると考えられる。

午王山に歴史的な視点が向けられた記録でおそらく最古のものと考えられるのは、江戸時代に幕府が編纂した地誌『新編武蔵風土記稿』である。『新編武蔵風土記稿』巻之百三十三・新座郡之五の上新倉村の項には「古蹟 新羅王居跡」と見出しが設けられ、以下のように記載されている。

古蹟

新羅王居跡 牛房山ノ上ニワズカノ平地アリ、昔シ新羅ノ王子京ヨリ下向ノ頃、コハニ居住セシト云、和名鈔ニ載スル当郡ノ郷名志木ト云ヘルハ此辺ノ事ニテ志楽木ノ中略ナルベシト、此村ニスメル好事ノ者イヘリ、当村ニ山田、上原、大熊ナド氏トセル農民アリ、是ハ旧キ家ナルヨシ、彼等ガ祖先ハ京都ヨリ新羅王ニ從ヒ来リシナリト云伝フ、サレバ此山ノ名モ元此王子居跡ヨリ起リタル事ナレバ、御房山ナドカクベキヲ、イツノ頃ヨリカ牛房ノ字ニカヘシナラント、是モ村老ノ説ナリ、統紀持續紀元年四月甲午朔癸卯、筑紫太宰、献投化新羅僧尼、及百姓男女二十三人、居于武蔵国、賦田受粟使安生業ト云ヒ、又同ジ紀ニ、韓奈末許満等十二人ヲ、コノ国ニヲカレシコトアレバ、コノ居蹟ト云ハモシクハコレヲノ人ヲリシニヤ、サレド外ニ拠モナケレバ、詳ナルヲシラズ（間宮・白井解説2000）。

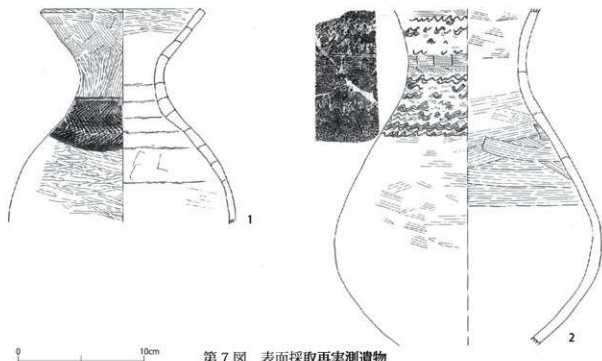
ここでは、午王山を「牛房山」と記し、かつては「御房山」と書くべきだったものがいつの頃か「牛房」の字が当てられたと伝えている。漢字の表記は異なるが、この「牛房山」は「午王山」のことであり、「ゴボウヤマ」という音で呼ばれていたことはこの時点で明らかであるが、いつから「午王山」の字を当てているのか定かではない。また、これまでの発掘調

査では、『新編武蔵風土記稿』に記載されている新羅王居跡の伝承を裏付けるような遺構や遺物はまだ確認されていない。しかし、民俗学者柳田國男が牛房山の新羅王居跡の伝承について注目されていた（柳田 1920）。午王山が特別の山であると認識されていたことは確かである。

遺跡としての午王山 午王山が遺跡として位置づけられるより以前、午王山遺跡周辺地域に住む人々によって、壺形土器（第7図1）と珠文鏡が採取されていた。壺形土器は、埼玉県和光市新倉午王山遺跡（第1次）の報告書内で午王山周辺の地権者宅で検出したことがわかっているが、出土した明確な年月や位置はわかっていない。なお、本遺物は埼玉県立「歴史と民俗の博物館」より返却された遺物が入っているコンテナの中に保管されているが、なぜ博物館で保管されていたのか定かではない。また、地権者が所有する珠文鏡は、1979（昭和54）年和光市午王山遺跡調査会による午王山遺跡第1次調査を担当した鈴木敏弘が調査地周辺の地権者らに挨拶へ訪れた際、はじめて認識した。この珠文鏡は現所有者の祖父が午王山の畑で土器片とともに珠文鏡を掘り出し、父の代では鉄瓶の蓋と思われ納屋の片隅にしまわれたと聞き取り調査でわかっている。なお、珠文鏡は蛍光X線分析による測定と詳細な観察を行い、古墳時代半ばのものと推定されている（鈴木・大屋 2013）。

午王山の遺物について考古学的に注目し、公に発表したのは谷井 彪である。谷井は、『埼玉考古』第4号・第6号で午王山で表面採取した遺物を紹介している（第7図2、第8図）。1966（昭和41）年1月に刊行された『埼玉考古』第4号「大和町新倉午王山出土の弥生式土器」では、櫛描簾状文壺（第7図2）が紹介されている。この土器は、台風の際、午王山遺跡の北斜面が崩れた時に出土したものとされており、弥生時代の櫛描簾状文の壺形土器で半分が欠損し、底部・口縁部も欠損している。しかし、この遺物を採取した明確な年月や出土位置、伴出した土器の記載がなく詳細は明らかではない。また、1968（昭和43）年2月に刊行された『埼玉考古』第6号の中の「大和町の遺跡と出土土器（弥生・古墳時代）」では、壺形土器7点、甕形土器3点、長甕形土器1点、土器拓本4点の計15点（第8図）が紹介されている。1～8、12～15は弥生時代の遺物、10～11は古墳時代の遺物とみられる。これらは農家が行った畑の天地返しの際に出土したものと記録されているが、表面採取した明確な年月や出土位置は、先の櫛描簾状文の壺同様わかっていない。また、遺物の所在も不明である。

以上のように、午王山は遺跡として発掘調査を行う以前から遺物が確認される場であった。遺跡としての位置づけが明確にされるのは文化財保護法に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地として位置づけられてからである。埼玉県は、遺跡台帳の整備に努めるため、県内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査を昭和46・47年度に行っている。午王山は1972（昭和47）年8月24日に調査が行われ、その後、正式に遺跡として埼玉県埋蔵文化財包蔵地台帳に登録された。このことより、周知の埋蔵文化財包蔵地で開発行為を行う際には法的手続きが必要となり、その後の発掘調査が行われる前提が整うこととなった。



第7図 表面採取再実測遺物

【引用・参考文献】

宇治谷孟訳 1992『続日本紀（中）』講談社

鈴木一郎・大屋道則 201「伝午王山遺跡出土の珠文鏡について」『市内遺跡発掘調査報告書 16 埼玉県和光市埋蔵文化財調査報告書第 52 集』和光市教育委員会

谷井 彪 1966「大和町新倉牛王山出土の弥生式土器」『埼玉考古』第 4 号 埼玉考古学会

谷井 彪・高山清司 1968 年「大和町の遺跡と出土土器（弥生時代・古墳時代）」『埼玉考古』第 6 号 埼玉考古学会

中岡貴裕 2015「埼玉県和光市新倉牛王山の新羅王居跡伝承と発掘調査」『あらかわ』第 16 号 あらかわ考古談話会

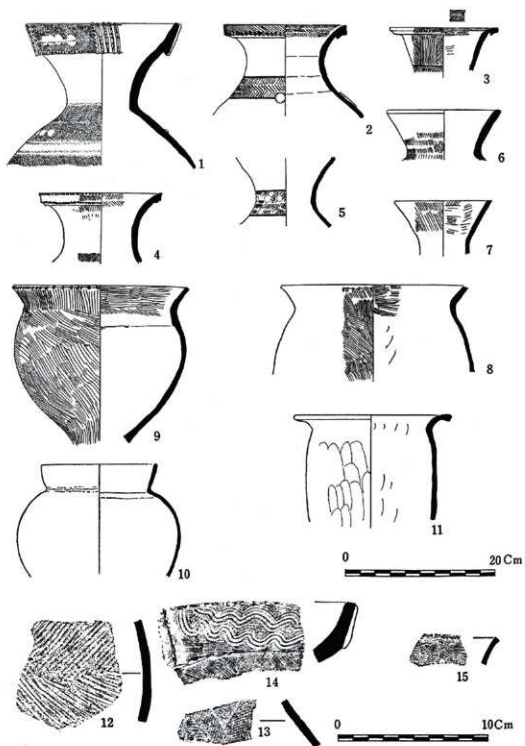
間宮士信・白井哲哉解説等編 2000『新編武蔵国風土記稿新座部二巻』文献出版

柳田國男 1920「流され王」『史林』5 卷 3 号

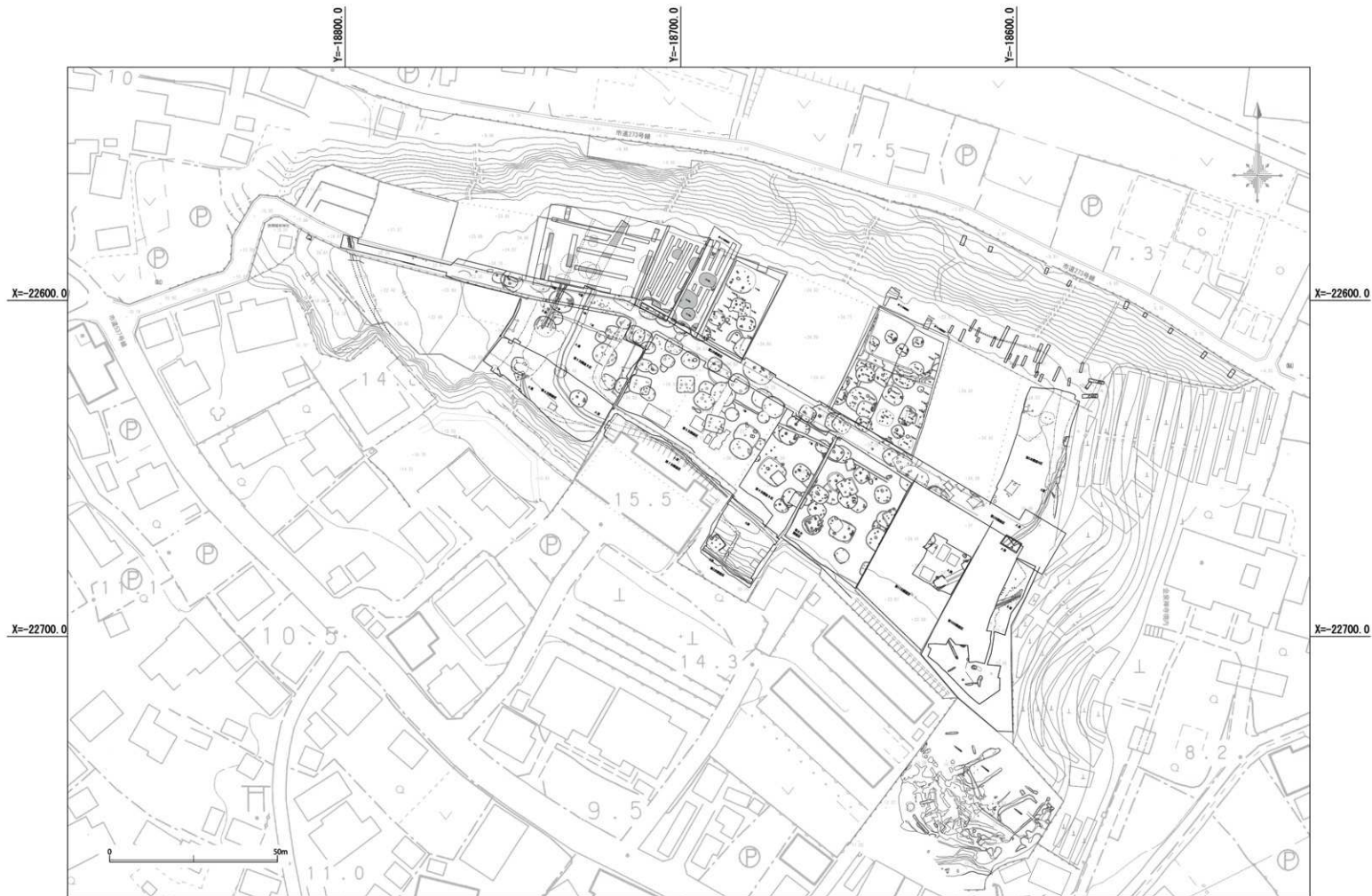
和光市 1987『和光市史』通史編上巻 和光市

第4表 表面採取再実測遺物観察表

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	単口縁。口唇部面取り後、横位ハケ目、頭部横・斜位ハケ目後横位ヘラミガキ、肩部横位ハケ目沈線区画されたハケ刺突文を3段、胴部斜位ハケ目後横・斜位ヘラミガキ。口径 12.8cm	A・B・D	良	橙色 7.5YR6/6	埼玉県立博物館より返却されたコンテナ 注記：5・表 山田跡下 埼玉県和光市新倉牛王山遺跡（1981）p. 57 に掲載
2	壺	外面横・斜位ハケ目後、頭部は櫛描波状文・簾状文、肩部は櫛描波状文、胴部は斜位ヘラミガキ。内面横・斜位ハケ目。胴部最大径 21.0cm（推定）	A・D・H	良	橙色 7.5YR6/8	『埼玉考古』第 4 号 p. 25、 和光市史 p. 85 掲載



第8図 表面採取遺物（谷井 彪・高山清司 1968 より引用）



第9圖 午王山遺跡全休圖

第2節 第1次・第2次調査

(1) 第1次調査(第10図)

調査の経緯 1979(昭和54)年3月に遺跡の東南支丘が、民間業者の宅地計画で開発されることになり、和光市午玉山遺跡調査会が、谷井 彪・鈴木敏弘の調査担当で、6月までの79日間で発掘を実施した。調査は支丘上部の平坦面から斜面にかけて弥生時代の方形周溝墓3基、平安時代の土坑・住居跡、古代から中世前後の時期・性格不明の地下道、斜面下部で中世の火葬墓と板群、上限不明から近世以降の「室」6基を発掘した⁽¹⁾。

以上の主要な各時代の遺構と遺物を以下で概述する。

方形周溝墓の発掘 調査区の最も北西側で推定環壕に近い第1号墓と、支丘の主軸を中心として斜面上の第2号墓から、斜面途中の第3号墓の配置である。第1号墓は南・北・東溝が残るが耕作の攪乱を受け溝底の一部の残存である。第2号墓は北・西溝だけ確認でき東・南溝は斜面のため消失しており、第3号墓は斜面上部の北溝と短い東・西溝の「コ」の字状である。3基の築造時期は、出土した土器から弥生時代後期と考えられる。

地下道の発掘 発掘で予想できない事態に直面することがあり、調査区の南半分の平坦面の標高23～19mの範囲で、地下道が検出された。地下道の出入口は6か所を発掘したが、規則的な配置ではなく、第2号方形周溝墓西隅周辺で縦坑状の入口が集散的に検出されている。地下道の断面は、不整形な二等辺三角形が基本で、底辺幅が80cm前後、高さが約1mで、成人男性が中腰での移動が可能であろう。地下道内部では、焼土と炭化材が残っていたが、時期決定できる遺物は皆無であった。遺構の特徴からは、宗教的な修行の性格を持つと考えている。

火葬墓と板群の発掘 火葬墓は、板群の西端に接する平坦部に4基と、西北6mの斜面上段に1基がやや離れて検出された。各規模は長径は1～1.5m前後、短径が0.5～0.7mで1～3号墓は楕円形、第4号墓は長方形で、いずれも焼土と炭化材が含まれている。第3・4号墓には炭化材が残る火葬の痕跡が顕著であるが、人骨の残存が明確ではなく、改葬した可能性もある。

板群は、標高17mの斜面を背に13mの範囲で東・西群に集中し、板群の各年号で樹立の推移を復元できる。東群は西から東への傾向と新しく西群へ続き、最古の応永8年(1375)から明応5年(1496)までの120年間で、移動したものも含め45点で、全体の推移を知ることができる貴重な資料である。現在、和光市指定文化財に選ばれている。

第1次調査のまとめ 弥生時代の成果は、発掘した方形周溝墓3基が台地中央を囲む環壕集落の東溝外側で、墓域形成を確認したことである。古代から中世と推定した地下道の実態が把握できたことで、板群と火葬墓に先行する宗教的修業の遺構と想定した。板群の応永から明応年間と火葬墓の併存は、隣接する金泉寺の創建時以降と重なり、寺史の史料と考古資料の分析で、中世地方史の復元に貢献できよう。

(2) 第2次調査(第11図)

調査の経緯 1981(昭和56)年7月に市道計画の事前調査担当の依頼が筆者にあり、その説明を受け、和光市史の関係で榎堂遺跡の発掘に参加した埼玉大学・國學院大学生と、新たに明治大学生に地元市民の調査体制で8～11月に第2次調査を実施した。発掘対象は、市

道計画の幅6m、長さ200mと一部拡張部を含め全体が約1500㎡である⁽²⁾。

環濠の調査 発掘は東側から表土の掘削をはじめ、ほぼ東西方向の第1号溝（東環濠）⁽³⁾を最初に確認し、西側第2号溝（内環濠）まで145m、その西側7mの第6号溝は上部に第30号住居跡が構築され、さらに西側60mで第5号溝（西環濠）が掘削されている。

東側の第1号溝から西側の第5号溝まで内側で220mで、西側の第2・6号溝は集落を4:1に分ける機能があり、各溝の上限と下限の消長が問題である。集落の終焉時にその機能が衰退し、土器等の投棄が第1号溝上層で弥生時代後期の多くの土器が発掘された。第2号溝は、下層から中層まで自然堆積で上層は埋め戻され、第6号溝と第3・4号溝が上部や併行して掘られ、時期が不確定だが東・西居住区の区画の機能を果たしている。

住居跡の調査 住居跡の発掘は、調査区内の49軒を検出し、47軒の発掘を実施し第2号溝の東の33軒と西の14軒に分かれた。東居住区で大型の第1・3・20号住居跡は、東西に並び、時期的にも推移する。第3号住居跡（第51図）は、四壁が直線的で四隅が丸い小判形で、長径9.75m、短径8.4m前後で面積は約80㎡の最大規模である。その位置は東の第1号溝から90m、内側の2号溝まで約50m、西の第5号溝まで120mで、集落の南・北から40mの中央で、特別の存在であることは明白である。炉跡は調査範囲内だけで4か所あり、通常の炉に相当する位置に、径約60cmの不整形の火皿式炉であり、住居跡の中央には、長さ1.5m、幅50cmの長楕円形の地床炉がある。東壁中央には凸堤を持つ貯蔵穴があり、小砂利を含む砂礫が散乱する。遺物は復元可能な壺形土器1点と壺と甕の破片が出土した（第27図）。

大型の第20号住居跡（第68図）は、第3号住居跡の東側で復元長径8.4m、短径6.95mで火皿式炉である。東側の大型第1号住居跡（第49図）は、第1号溝から25mで、約2/3を発掘し長径8.9m、短径6.4mで、炉跡は西側主柱穴の中間で地床炉である。柱穴は、長方形に掘られた北側2本が主柱穴である。出土した櫛目文の壺形土器は、中期と報告し、上記の大型住居では最古としたが、それ自体の位置づけは再検討すべきか⁽⁴⁾。

中・小型住居跡は、平面形態・炉・貯蔵穴の種類と時期は報告書に整理し、弥生土器の編年は明確に中期末を示さず、古式土師器の不在を指摘し、主に後期の変遷を示した。

第2次調査のまとめ 環濠の発掘では、東・西220mの規模と、二重内環濠で東・西居住区の2分を確認した。集落構成では、大型住居3棟と中・小住居跡40棟の特徴と、北関東系・東海系土器の出土で、遠隔地との交流を確認した。

【註】

- 1) 第1次調査は、『にくらごぼうやま 和光市新倉午王山遺跡発掘調査概報』1979年 和光市午王山遺跡調査会、『埼玉県和光市新倉午王山遺跡』1981年 和光市午王山遺跡調査会による。
- 2) 第2次調査は、『にくらごぼうやま-午王山遺跡第2次発掘調査概要-』1982年 和光市教育委員会、『埼玉県和光市午王山遺跡』1993年 和光市教育委員会による。
- 3) 第2次調査時点での遺構番号とした。後述では、1号溝=A溝、2号溝=B溝、6号溝=B溝、5号溝=C溝と振り替えを行った。
- 4) 本総括報告書第IV章では後期前半としている。

第3節 第3次～第7次調査

(1) 第3次調査(第12図)

第3次調査は、1993(平成5)年3月1日から同年3月26日まで和光市教育委員会が発掘調査を行った。調査場所は、新倉3丁目2861-1で、遺跡の南向きの緩斜面の畑であり、南側の土留め工事及び個人農地改良に伴う発掘調査である。実質の調査面積は約272㎡である。

検出された遺構は、A溝・B溝の2条の溝のほか古墳時代の住居跡1軒が検出された。A溝(内環濠)は、遺跡の平坦部と緩斜面を区分けするように、調査区北側を東西方向に検出された。最大幅は2.24m、深さ1.12mを測る。出土遺物は、中層から菊川系の擬似縄文を持つ弥生時代後期の壺のほか銅鐔形土製品1点などが出土した。B溝(外環濠)は、調査区の南側で、A溝より標高が1.6m下がった緩斜面上に、A溝と同じく東西方向に検出された。最大幅は1.44m、深さ0.88mを測る。出土遺物は少なく、頸部に文様帯を持つ広口壺破片が出土し、A溝の破片と接合し(第198図10)、復元実測の個体となった。

(2) 第4次調査(第14図)

第4次調査は、1993(平成5)年8月30日から同年9月22日まで和光市教育委員会が発掘調査を行った。調査場所は、新倉3丁目2844-1で、遺跡の南西側の平坦面の畑であり、個人農地改良に伴う発掘調査である。調査面積は約510㎡である。

遺構は、A溝(内環濠)・B溝(外環濠)の2条の溝のほか、弥生時代とみられる住居跡が7軒検出された。A溝は、調査区中央から東端へカーブして検出され、東側の調査区外では、過去の土取工事によりローム層が大きく削り取られ消滅している。最大幅は3.2m、深さ1.4mを測る。B溝は、A溝の外側を同じくカーブを描くように検出されている。北端は攪乱で消滅し、南端は土取り工事によって崖となり消滅している。最大幅は1.8m、深さ0.9mを測る。この調査区では、A溝の上に重複した住居跡が2軒(第50号住居跡・第51号住居跡)検出されており、A溝が埋まった時期の推察資料となっている。

A溝の中層からは、壺の肩部に段を持つ東海地方の菊川式の特徴がある大型壺(第199図29)、銅釧1点が出土している。

(3) 第5次(A区・B区)調査(第13・14図)

第5次調査は、1994(平成6)年6月30日から同年9月2日まで和光市教育委員会が発掘調査を行った。調査場所は、畑地2枚分であり、東側の新倉3丁目2836-1をA地区とし、西側で第4次調査北側の新倉3丁目2842-1、2843-1をB地区とした。ともに個人農地改良に伴う発掘調査である。調査面積はA地区は約800㎡で、B地区は約594㎡である。調査区が隔たって位置しているため、道路(市道283号線)の直線を軸とし一辺100m四方の大グリッド(区画)を任意に設定した。大グリッド内には一辺4mの小グリッドを設け、東から西へA～Y、南から北へ1～25と表示し調査を進めた。

A地区では、第2次調査で検出されたA溝東側の延長部分が検出され、弥生時代とみられる柱穴と炉跡のみの住居跡が2軒検出された。他には古墳時代と平安時代の住居跡などが検出された。

B地区では、第2次・4次調査で検出されたA溝西側とB溝のそれぞれの延長部分が検出

された。B溝上部は、弥生時代後期の第30号住居跡、第62号住居跡、第63号住居跡に壊されていた。弥生時代の住居跡は、既調査と接合した遺構を含め計13軒が検出された。出土遺物は、A溝からは弥生時代後期で東海地方の菊川式の特徴である擬似縄文が施された壺のほか、B地区A溝では、銅鐸形土製品1点、土鈴1点などが出土した。住居跡からも東海系の壺、甕が出土している。

(4) 第6次調査(第15図)

第6次調査は、1996(平成8)年2月13日から同年8月30日まで和光市教育委員会が発掘調査を行った。調査場所は、新倉3丁目2841-1、2842-2で、遺跡の平坦部分の畑で、第5次調査区の東側に接する場所で、個人農地改良に伴う発掘調査である。調査面積は約1,119㎡である。調査においては第5次調査のグリッドラインを用い測量等を進めた。

A溝の内側であるため、検出された遺構は、全て住居跡であり、弥生時代中期の住居跡1軒のほか、中部高地系の楡描簾状土器が出土する長方形の住居跡3軒、弥生時代後期の住居跡21軒、合計25軒が検出された。そのほか、旧石器時代の雑群、石器集中が検出されている。出土遺物は、弥生時代中期の甕、後期の楡描簾状文を持つ岩鼻式の甕、岩鼻式の住居跡からは久ヶ原式の壺、甕が共伴して出土している。そのほかには、東海地方の菊川式の特徴である擬似縄文が施された壺などが住居跡から出土している。

(5) 第7次調査(第15図)

第7次調査は、1998(平成10)年3月17日から同年3月25日まで和光市遺跡調査会が発掘調査を行った。調査場所は、新倉3丁目2847-1、2861-2であり、遺跡の南向きの平坦部から緩斜面に地形が変化する地点であり、第3次調査区、第4次調査区、第6次調査区に囲まれた場所である。共同住宅建設に伴う発掘調査であるが、大部分が過去の土取り工事により大きく削られており、調査面積は約105.6㎡である。調査においては第5次調査のグリッドラインを用い測量等を進めた。

検出された遺構は、一部が土取り工事により壊されているが、A溝1条が検出された。A溝は、東側は直線的であるが、西側の第4次調査区に向かうに従い緩やかにカーブしている。主な出土遺物は、弥生時代後期の東海系擬似縄文の土器多数のほか、銅鐸形土製品1点などがA溝中層より出土している。

第4節 第8次～第14次調査

(1) 第8次調査(第16図)

農地改良に伴い、2000(平成12)年4月3日から同年7月18日に和光市教育委員会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉3丁目2839-1で、遺跡のほぼ中央南東寄りにあたり、北側に第2次調査区、南西側に第3次調査区が隣接する。調査面積は約787㎡である。発掘調査は、重機による表土除去後、人力により遺構確認・精査を行い、測量については第5次調査のグリッドラインを用いて調査を進めた。その結果、第2次調査との重複を含め弥生時代の住居跡24軒のほか、旧石器時代の石器集中ブロック、古墳時代後期の住居跡等が検出された。遺物は遺構同様弥生時代が主体を成し、主に後期の壺形土器・甕形土器等が住居内を中心に出土した。

(2) 第9次 (A区・B区) 調査 (第16・17図)

農地改良に伴い、2001 (平成13) 年2月13日から6月29日に和光市教育委員会が発掘調査を実施した。調査区は、第2次調査区を挟んで南北2地点で設定され、和光市新倉3丁目2832-1に所在する北側の畑地をA区、同市新倉3丁目2840-1に所在する南側の畑地をB区とした。調査面積はA区が約368㎡、B区が約479㎡である。発掘調査は、両地区とも重機による表土掘削後、人力により遺構確認・精査を行った。その結果、第2・8次調査との重複を含めA区で弥生時代の住居跡9軒のほか、近世土坑等、B区で弥生時代の住居跡16軒のほか、旧石器時代の石器集中ブロック、奈良・平安時代の住居跡等が検出された。遺物は従前の調査同様弥生時代が主体を成し、主に後期の壺形土器・甕形土器等が住居内を中心に出土した。

(3) 第10次調査 (第18図)

宅地造成工事に伴い、2004 (平成16) 年11月1日から同年11月26日に和光市遺跡調査会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉3丁目2837-1で、遺跡の最も南東側台地平坦部にあたり、南側に第1次調査区、北側に第2次調査区が隣接する。発掘調査は道路予定地及び宅地造成で削平されるおそれがある範囲で行い、調査面積は約567㎡である。

検出された遺構は、弥生時代のA溝 (内環濠)・B溝 (外環濠) のほか、B溝 (外環濠) 外側から住居跡1軒、方形周溝墓2基⁽¹⁾等が検出された。A溝は内環濠の一部で、上面最大幅約2.3m、確認面からの最大深度約1.1mを測る。遺物は少なく覆土中から弥生時代後期とみられる甕形土器・壺形土器等が少量出土した。B溝は延伸方向から外環濠の一部と推定されA溝から南側約14mに位置する。検出した範囲では長さ6.1m、上面最大幅約1.8m、確認面からの最大深度約95cmを測る。遺物はA溝同様、弥生時代後期とみられる壺形土器、甕形土器等が極少量出土した。方形周溝墓2基は、B溝 (外環濠) 外側、台地肩部寄りの平坦地に近接して分布する。2基とも遺存状態が悪く平面形態等は定かでないが、第1次調査の調査成果および周辺に分布する遺構の時期から弥生時代と推定した。

(4) 第11次調査 (第18図)

農地改良に伴い、2004 (平成16) 年11月16日から同年12月24日に和光市教育委員会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉3丁目2838-1の一部で、台地東側縁辺から約20m西側に奥まった台地上に位置し、東側に第10次調査区が隣接する。調査面積は約178㎡である。発掘調査は、重機による表土掘削後、人力により遺構確認・精査を行った。その結果、弥生時代の住居跡1軒、溝1条、奈良時代の住居跡2軒等が検出された。弥生時代の溝は、延伸方向及び断面形状から既調査の第2次・第5次A区・第10次調査で検出されたA溝 (内環濠) と推定される。検出した範囲では上面最大幅2.4m、確認面からの最大深度1.1mを測る。遺物は覆土中から弥生時代後期を主とした壺形土器、甕形土器等が大量に出土した。弥生時代の住居跡は、このA溝 (内環濠) から内側へ約10m離れた位置に構築されている。

(5) 第12次調査 (第19図)

農地改良に伴い、2005 (平成17) 年1月28日から同年5月9日に和光市教育委員会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉3丁目2834-1で、第2次調査区の北側に隣接す

る南北に伸びる平坦な畑地が調査地で、南側に第2次調査区を挟んで第8次調査区、南西側に第9次調査B区が位置する。調査範囲は、当初畑地1枚全域を調査対象としたが、遺構・遺物が広範に分布することから調査期間が長期におよぶことが予想されたため、調査区を東西に2分割して西半分を第12次調査として実施した。調査面積は約400㎡である。

検出された遺構は、第2次調査との重複を含め弥生時代の住居跡11軒、近世以降の土坑等で、遺物は主に弥生時代後期の壺形土器、甕形土器等が住居内を中心に出土した。

また今回の調査では、調査区北側台地縁辺部で環濠確認に伴うトレンチ調査を実施した。午山遺跡の環濠は、先の調査から南側では集落を囲う二つの環濠（A溝・B溝）の存在が明らかになっており、それらが北側でも展開して全周するかなどの確認を行うため、北側の台地縁辺部の一段下がった比較的平坦な2地点でトレンチを掘削した。しかしながら、トレンチ範囲においてはAトレンチで近・現代の根切溝1条が検出されたのみで、環濠は確認されなかった。

（6）第13次調査（第20回）

遺跡の中央を東西に走る市道の拡幅工事に伴い、2006（平成18）年8月16日から同年8月24日に和光市遺跡調査会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉3丁目2825-3で、第2次調査区の南側に隣接し、第5次B区の西約50mにあたる。発掘調査は道路を拡張する範囲で行い、調査面積は約5㎡である。

検出された遺構は、弥生時代の溝1条のほか、近世以降の溝である。弥生時代の溝は、延伸方向及び断面形状から第2次調査で検出されたC溝（条濠）の南側延伸部分と推定される。検出した範囲では上面最大幅約1.8m、最大深度約1.2mを測る。遺物は乏しく、埋没土に混在して二次的に流れ込んだとみられる弥生時代後期の土器片が極少量出土した。

（7）第14次調査（第19回）

農地改良に伴い、2007（平成19）年3月5日から同年5月11日に和光市教育委員会が発掘調査を実施した。調査地点は和光市新倉3丁目2834-1で、平成17年に調査が行われた第12次調査区の東側未調査部分に当たる。調査面積は約684㎡である。発掘調査は、重機による表土除去後、人力により遺構確認・精査を行った。その結果、第2・12次調査との重複を含め弥生時代の住居跡16軒のほか、平安時代の住居跡、縄文時代の土坑等が検出された。遺物は遺構同様弥生時代が主体を成し、主に後期の壺形土器・甕形土器等が住居内を中心に出土した。

【註】

- 1) 第5号方形周溝墓は、既報告（鈴木2014）では個別遺構（第13・14号溝状遺構）として報告したが、本報告では2条の溝は1基の方形周溝墓の一部であると判断した。

第5節 保存目的（第15次）調査と調査全体の概要

（1）保存目的（第15次）調査（第17回）

第15次調査は、2011（平成23）年4月26日から同年4月28日まで和光市教育委員会が発掘調査を行った。調査場所は、新倉3丁目2831-1であり、遺跡の平坦部であるが、北側

の隣地は急峻な崖地となっている。今回の調査地点の土地は、将来的に史跡として保存・整備する予定として、2010（平成22）年11月29日付で土地売買契約を取り交わし、和光市の市有地とした場所である。調査面積は約306㎡である。

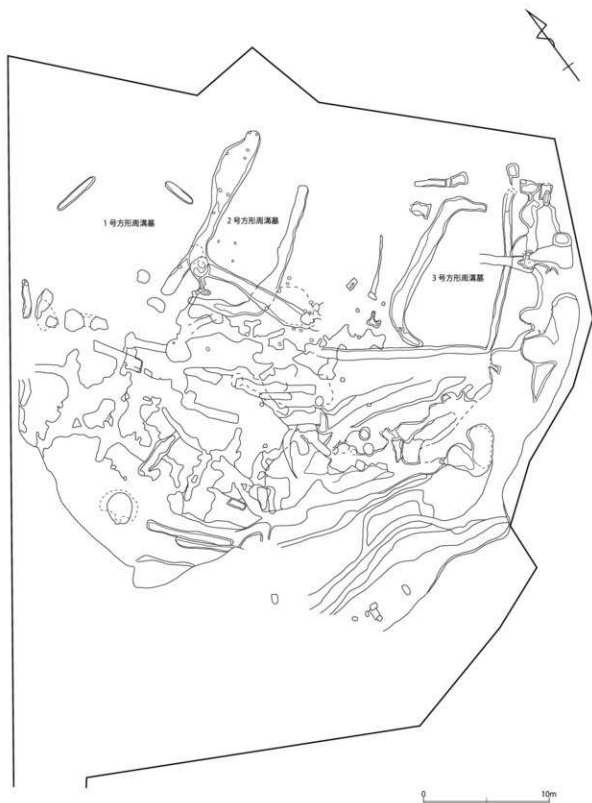
第15次調査は、将来的な保存を目的とするため、遺構確認を主目的としたため、ローム層上面での遺構の範囲確認にとどめた調査である。縦長の対象地にあわせ、重機によりトレンチ（試掘坑）を掘削しローム層上面にて遺構の有無確認を行った。遺構が確認された部分では、遺構の全容を把握するため掘削範囲を拡張し、遺構上面の精査をし平面形状を平板測量により記録を行った。遺跡の保存のための調査であるため、遺構の掘り下げは行わなかった。

検出された遺構は、住居跡6軒、土坑2基である。市道283号線に面した南側の3軒の住居跡は、第2次調査で検出されている第13号住居跡、第15号住居跡、第16号住居跡と接続する位置で確認されたため、第2次調査の番号を付した。新たに確認された3軒の住居跡は、平面形が楕円形と円形に近い楕円形の平面形状をしている。確認面での覆土の色調、平面形態、周囲の住居跡の検出状況から見て、弥生時代の住居跡と判断し、これまでの調査から継承している通し番号として第150号住居跡、第151号住居跡、第152号住居跡と付した。

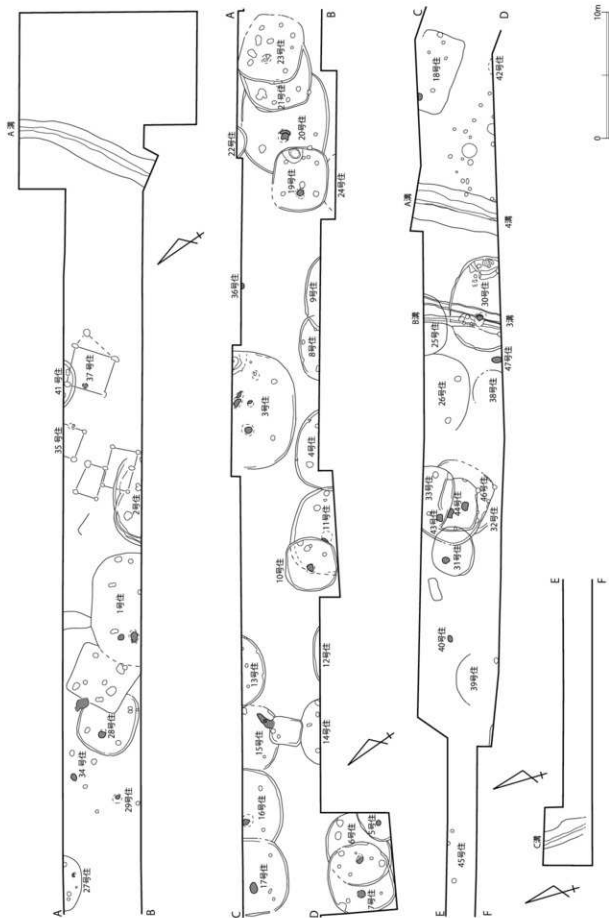
出土遺物は、遺構確認が主目的で遺構掘削を行っていないため検出されていない。

（2）調査全体の概要

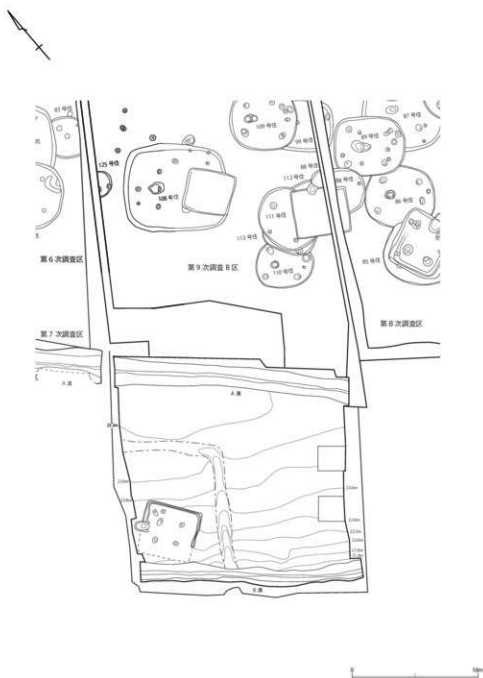
第1次～第14次までの発掘調査は、遺跡の記録保存を目的とした発掘調査が行われている。第15次調査は、上記のとおり保存目的の遺構確認だけの調査である。午王山遺跡の埋蔵文化財包蔵地は、午王山頂部の平坦面から緩斜面にかけての部分が、遺構・遺物が存在する遺跡範囲である。その遺跡範囲の全面積は約19,781㎡であり、第1次から第14次調査までの総発掘調査面積は約10,569㎡を測り、午王山遺跡範囲の約53.4%が発掘されている。主に弥生時代の住居跡149軒、方形周溝墓5基、A・B・CとしたV字状の3条の溝等の遺構と遺物が発掘調査され、遺跡の状況や特徴が判明している。



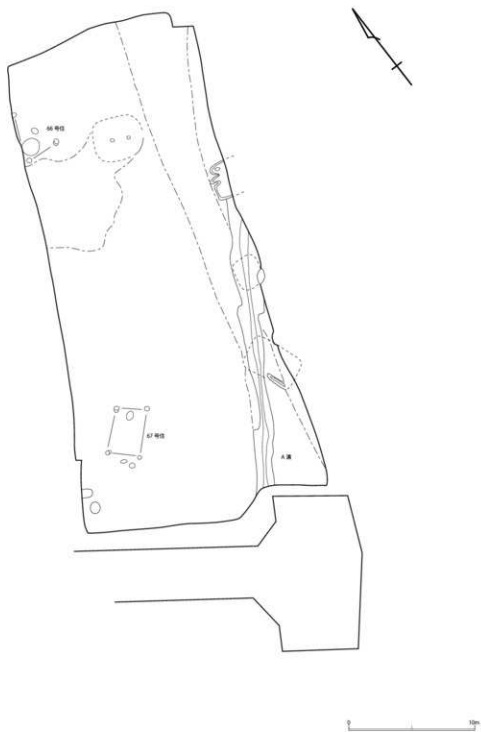
第10図 第1次調査区全体図



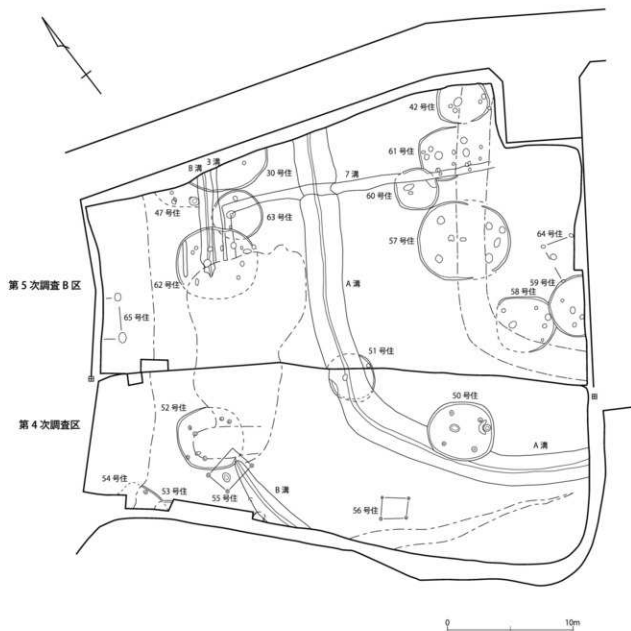
第11図 第2次調査区全体図



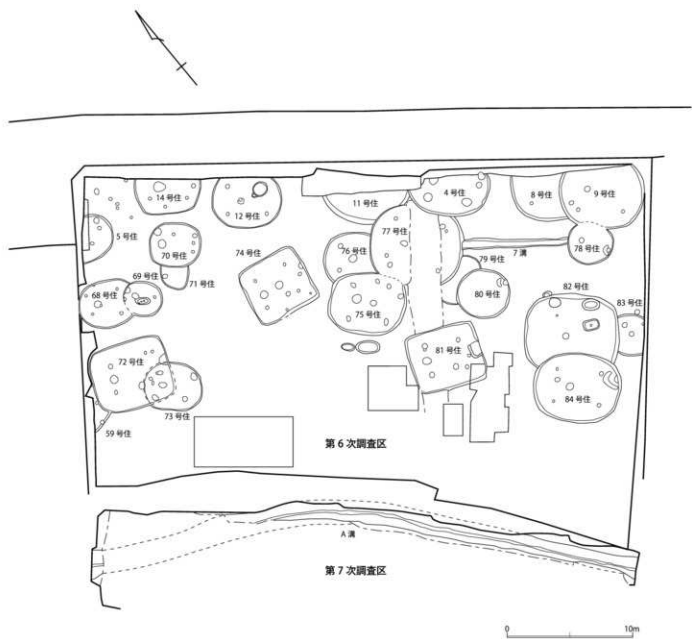
第12図 第3次調査区全体図



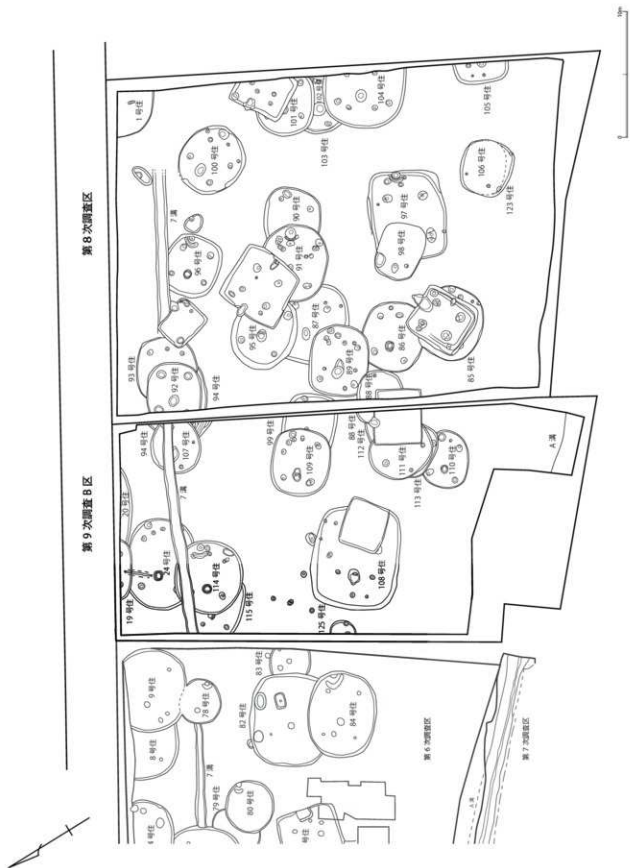
第13図 第5次調査A区全体図



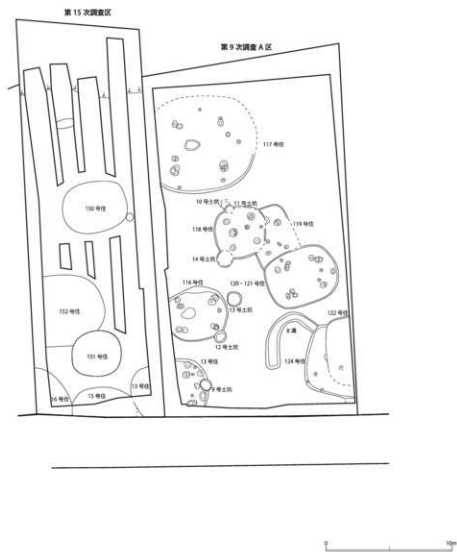
第 14 図 第 4・5 次調査 B 区全体図



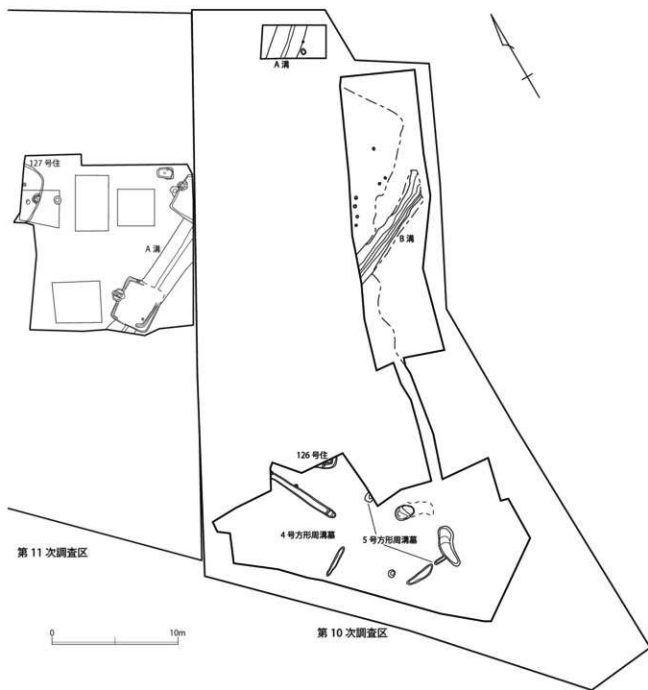
第15図 第6・7次調査区全体図



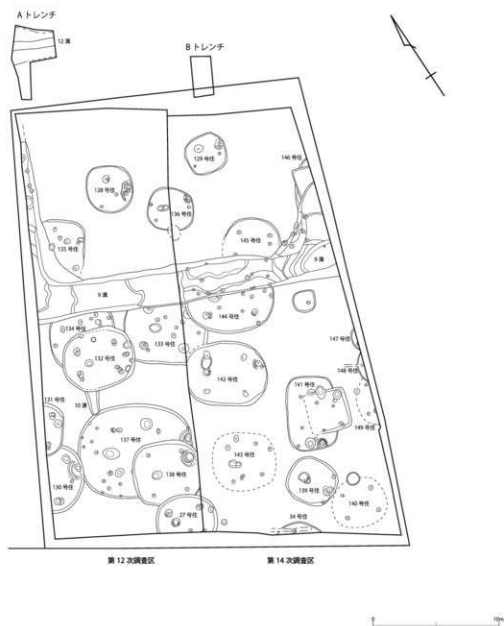
第16图 第8・9次調査B区全体图



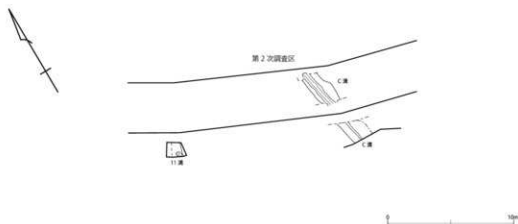
第17図 第9次調査A区・15次調査区全体図



第 18 図 第 10・11 次調査区全体図



第19図 第12・14次調査区全体図



第20図 第13次調査区全体図

第6節 確認調査報告

確認調査は、埋蔵文化財の有無、範囲、性格等を把握することを目的として実施される。ここでは、盛土保存として遺構が保護されている地点、また埋蔵文化財包蔵地外ではあるが、埋蔵文化財の所在が見込まれた地点の確認調査結果を報告する。

(1) 新倉3丁目2837-1(第10次調査)地点(第21図)

事業主体者より1999(平成11)年4月16日付で和光市教育委員会に対し、宅地造成に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年4月28日に確認調査を実施した。調査地点は、新倉3丁目2837-1で面積は1,119㎡である。重機及び人力によりトレンチ1～8を入れる。その結果、現地表面60～90cmの深さで遺構を確認した。確認された遺構は、溝1条と複数の掘り込みみである。

次いで、2004(平成16)年10月12日付で和光市教育委員会に対し、再び宅地造成に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年10月22日に確認調査を実施した。重機及び人力によりトレンチ9～16を入れる。その結果、現地表面70～105cmの深さで遺構を確認した。確認した遺構は、溝3条と土坑2基である。

以上2回の確認調査からトレンチ1・2・9は第2次調査、トレンチ3・4・11は第3次調査で検出された弥生時代の環濠の続きと推定される。なお、保護層30cm以上が保たれず現状保存が困難な道路拡張・新設部及び宅地造成を行う箇所については、第10次調査として発掘調査を行い、記録保存の措置をとることとなった。保護層が保たれる箇所は盛土保存とした。

(2) 新倉3丁目2829-1地点(第22図)

事業主体者より2002(平成14)年3月4日付で和光市教育委員会に対し、宅地造成に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年3月12・13・14日に確認調査を実施した。調査地点は、新倉3丁目2829-1で面積は約922㎡である。重機及び人力によりトレンチ1～10を入れる。その結果、現地表面45～159cmの深さで遺構を確認した。確認された遺構は、住居跡9軒と溝3条である。トレンチ1・3・5・6・7の溝は、第2次調査及び第5次調査で検出された弥生時代の環濠の続きと推定される。トレンチ9・10の溝

は近・現代の根切溝である。なお、申請書の宅地造成計画図によると保護層が保たれるため盛土保存とした。

(3) 新倉3丁目2811-1地点(特別緑地保全地区)の斜面上部(第23・24図)

事業主体者より2002(平成14)年4月10日付で和光市教育委員会に対し、分譲住宅建設に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年4月18・19・22・23日に確認調査を実施した。調査地点は、新倉3丁目2811-1で、面積は2,380㎡の一部、斜面上部である。重機及び人力によりトレンチ1～13を入れる。その結果、トレンチ1・11・12・13の現地表面65cm～86cmの深さで2条の溝を確認した。トレンチ1の溝は、東側へ延びると考えられる。トレンチ11・12・13は、1条の溝となる。なお、遺構が確認されたため分譲住宅建設は中止され、盛土保存となった。

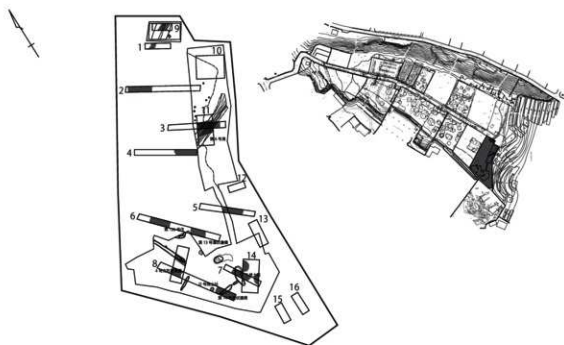
次いで、再び新倉3丁目2811-1地点で和光市環境課より2008(平成20)年5月1日付で和光市教育委員会に対し、緑地整備に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年5月16日に計画予定地を中心に確認調査を行った。重機及び人力によりトレンチ14～22を入れる。その結果、トレンチ14・15・20の現地表面70～140cmの深さで遺構を確認した。トレンチ14では溝2条を確認し、そのうち1条の溝はトレンチ15の溝と接続する。トレンチ20は、以前の調査トレンチ11・12・13と接続し1条の溝となる。以上2回の調査から確認された遺構は溝4条である。なお、植樹・抜根及び天水桶等の仮設について、工事立会とした。

(4) 新倉3丁目2830-1地点(第25図)

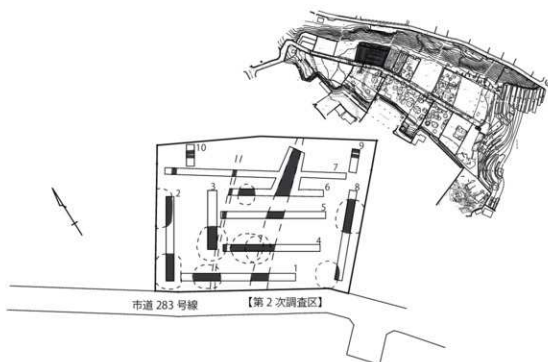
事業主体者より2018(平成30)年4月13日付で和光市教育委員会に対し、個人農地改良に伴い埋蔵文化財の確認調査について依頼書が提出され、同年5月16・17日に確認調査を行った。調査地点は、新倉3丁目2830-1で、面積は326㎡である。重機及び人力によりトレンチ1～9を入れる。その結果、現地表面50cm～80cmの深さで遺構・遺物を確認した。確認された遺構は弥生時代とみられる住居跡5軒である。検出された住居跡は、第2次調査の第16・17号住居跡の続き、第15次調査の152号住居跡の続きと推定される。また、遺物は弥生時代土器を出土した(第26図・第5表)。なお、遺構・遺物が出土したため個人農地改良を中止し、盛土保存とした。

(5) 新倉3丁目2811-1地点(特別緑地保全地区)の斜面下部(第23・24図)

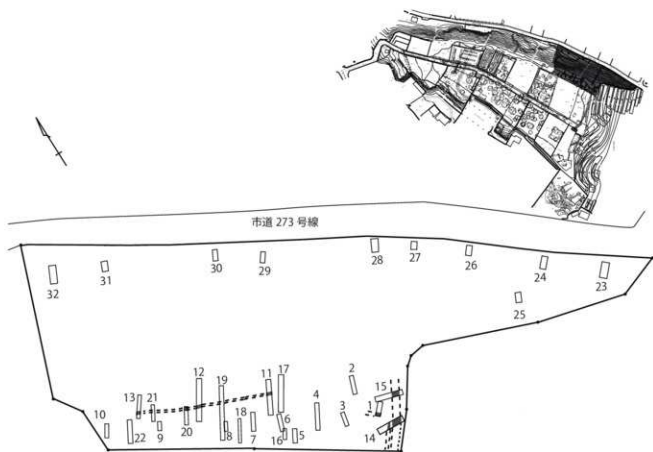
午玉山遺跡隣接地として将来的保存・活用のため、遺構の広がりの確認調査を2019(平成31)年2月8日から3月19日まで行った。調査地点は、新倉3丁目2811-1の斜面下部である。人力によりトレンチ23～32を入れる。その結果、東京層上部を検出し弥生時代の遺構・遺物は確認されなかった。しかし、近・現代の室の跡あるいは第1次調査で検出された地下道のような掘り込みを確認した。また、トレンチ30では上部から崩れてきた地層から中・近世の陶器を検出した。上記から、今回調査をしていない中腹には平場があり、今後確認調査が必要な箇所となる。



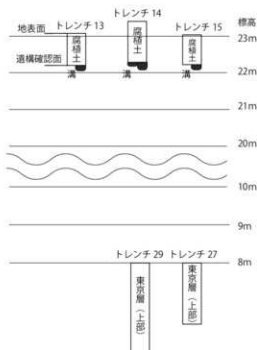
第 21 図 新倉 3 丁目 2837-1 地点トレンチ配置図 (S=1/600)



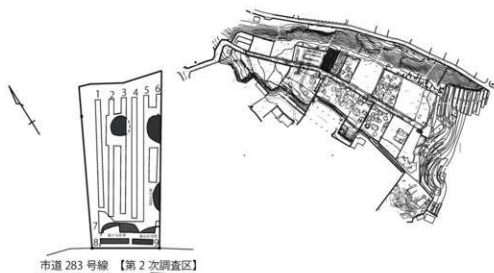
第 22 図 新倉 3 丁目 2829-1 地点トレンチ配置図 (S=1/600)



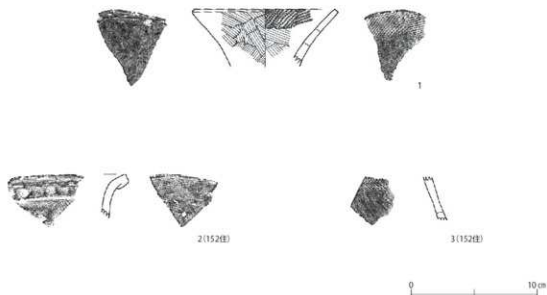
第 23 図 新倉 3 丁目 2811-1 地点トレンチ配置図 (S=1/600)



第 24 図 新倉 3 丁目 2811-1 地点トレンチ柱状図 (S=1/100)



第25図 新倉3丁目2830-1地点トレンチ配置図 (S=1/600)



第26図 新倉3丁目2830-1地点出土遺物

第5表 新倉3丁目2830-1地点出土遺物観察表

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	口唇部面取り後横位ハケ目、口縁部外面斜位ハケ目、内面LR縄文、結節文、横斜位ハケ目	A	良	褐色 10YR4/4	口径(11.6)
2	壺	折り返し口縁。口唇部面取り後横位ハケ目、口縁部指押圧痕、頸部斜位ハケ目	A・D・H	普	橙色 7.5YR7/6	第152号住居跡出土
3	壺	肩部ハケ刺突羽状文、斜位ヘラミガキ	A・H	良	にぶい褐色 7.5YR5/4	第152号住居跡出土

第7節 第2次調査出土遺物補遺

午王山遺跡第2次調査の整理と報告書刊行については、1981（昭和56）年に発掘調査が行われた後、整理担当者、整理場所の確保などの諸事情により、一時中断していたが、1992（平成4）年度に報告書刊行のための印刷製本費の予算化が決定し、報告書を刊行することとなった。しかし、報告書刊行に際しては、本文内容のページ数に限りがあること、実質的に整理期間が短期間であること等により、発掘調査担当者であった鈴木敏弘と教育委員会が協議を行い、調査区全体の遺構は掲載するが、遺物については遺構に伴い復元実測にて器形、時期区分などがわかるものを主として掲載することを確認した上で報告書作成を進め、1993（平成5）年3月に和光市埋蔵文化財調査報告書第9集『午王山遺跡発掘調査報告書』（第2次調査）として刊行した。その際に掲載を見送った破片資料については『和光市デジタルミュージアム紀要』に掲載することを念頭に少しずつ整理作業を進めた。

今回、本書を作成するに当たり、既刊報告の遺構出土遺物に加え、新たに未掲載となっていた破片資料（丸数字）を同縮尺にて追加し報告することとした（以下「補遺資料」という）。観察表（第6～27表）を提示しているため、各遺構出土の遺物で主だったものを説明する。

第3号住居跡出土遺物（第27図・第6表）

第27図1は既報告の壺で、②～⑦は補遺資料である。②～④は壺であり、④には山形文がみられる。⑤は頸部に輪積痕を残す典型的な久ヶ原式の甕である。⑥・⑦は高坏であり、口縁直下に縄文が施されている。⑧は双角有孔土製品で、角あるいは耳の様な2か所の突起と焼成前穿孔が4か所あり動物の顔にもみえる土製品である。午王山遺跡で出土した土製品としては4点目である。

第6号住居跡出土遺物（第28図・第7表）

第28図①～③は補遺資料で、①・②は壺、③は甕ある。全てハケ目により器面が調整され、②にはハケ刺突羽状文が施されている。

第7号住居跡出土遺物（第29図・第8表）

第29図1は既報告の壺で、②～⑧は補遺資料である。②～⑤は壺で、⑥はハケ目の甕で、⑦・⑧はヘラナデの甕である。

第9号住居跡出土遺物（第30図・第9表）

第30図1～5は既報告の遺物である。⑥は補遺資料で、折返し様の口縁を持つ鉢で体部には羽状縄文が施されている。

第10号住居跡出土遺物（第31図・第10表）

第31図1～5は既報告の遺物で、⑥・⑦は補遺資料で壺である。⑥はハケ刺突羽状文が口唇部、口縁部に施されている。⑦は折返し口縁を持つ壺で、口縁内面には櫛描波状文が施されている。

第16号住居跡出土遺物（第32図・第11表）

第32図1・2は既報告の遺物である。③～⑤は補遺資料で、④は壺でハケ刺突羽状文が頸部に施されている。

第17号住居跡出土遺物（第33図・第12表）

第33図①・②は補遺資料で、①は折返し様の口縁を持つ壺、②は頸部に沈線と縄文が施

される壺である。

第 18 号住居跡出土遺物 (第 34 図・第 13 表)

第 34 図 1～6 は既報告の遺物である。⑦～⑨は補遺資料で、⑨は輪積痕が顕著にみられ、3 と同様の久ヶ原式の甕である。

第 19 号住居跡出土遺物 (第 35 図・第 14 表)

第 35 図 1～8 は既報告の遺物である。⑨は補遺資料で、ハケ刺突羽状文が施された壺の肩部である。

第 21 号住居跡出土遺物 (第 36 図・第 15 表)

第 36 図①・②は補遺資料で、①は折返し口縁を持つ壺、②は肩部に羽状縄文が施されている。

第 22 号住居跡出土遺物 (第 37 図・第 16 表)

第 37 図①は補遺資料で、折返し様の口縁を持つ壺で内外面にハケ目が施されている。

第 23 号住居跡出土遺物 (第 38 図・第 17 表)

第 38 図 1 は既報告の台付甕である。第 2 次調査報告では第 32 号住居跡出土とされていたが、遺物の再観察などを行ったところ、第 23 号住居跡の出土遺物であることが確認された。②・③は補遺資料で、②は壺でハケ刺突文が頸部に施されている。③は頸部に輪積痕がみられる甕である。

第 25 号住居跡出土遺物 (第 39 図・第 18 表)

第 39 図①は補遺資料で、ハケ目が施される甕である。

第 30 号住居跡出土遺物 (第 40 図・第 19 表)

第 40 図 1～10 は既報告の遺物である。⑪・⑫は補遺資料で、⑪の肩部には縄文帯が施され、5・6 と同様の壺である。

第 31 号住居跡出土遺物 (第 41 図・第 20 表)

第 41 図①～③は補遺資料で、ともに壺である。②は縄文の文様帯下端を櫛描波状文で区画している。③は S 字状結節文がみられる。ともに牛王山遺跡の遺物の中では非常に珍しい土器である。

第 32 号住居跡出土遺物 (第 42 図・第 21 表)

第 42 図①は補遺資料で、折返し様の口縁を持つ壺で内外面にハケ目が施されている。

第 33 号住居跡出土遺物 (第 43 図・第 22 表)

第 43 図①・②は補遺資料で、ともに壺である。②はハケ刺突羽状文と円形浮文が肩部に施されている。

第 36 号住居跡出土遺物 (第 44 図・第 23 表)

第 44 図①～③は補遺資料で、①と③は同一個体である。①・②はともに口唇部面取り後キザミが施されるハケ目甕である。

第 43 号住居跡出土遺物 (第 45 図・第 24 表)

第 45 図 1 は既報告の高坏である。②は補遺資料でハケ目甕である。

第 44 号住居跡出土遺物 (第 46 図・第 25 表)

第 46 図 1・2 は既報告の甕である。ともに口唇部面取り後キザミが施されるハケ目甕で

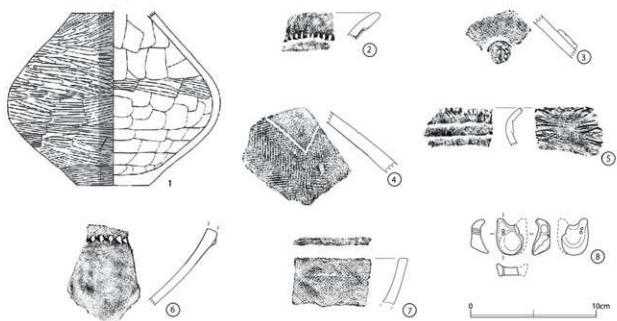
ある。③は補遺資料で、複合口縁に棒状浮文、ハケ目が施される壺である。

A溝（第2次調査第2号溝）出土遺物（第47図・第26表）

A溝（第2次調査第2号溝）とは既報告の第2次調査区の第2号溝（旧番号）である。第47図1・2は既報告の壺である。③～⑦は補遺資料で、③・④は壺で頭部と肩部を画する様に段差を持った羽状の擬似縄文が施されている。⑤は沈線区画と羽状縄文、⑥はハケ刺突羽状文による擬似縄文、⑦は口唇部が面取りされキザミが施されている甕である。

第2次調査区出土遺物（第48図・第27表）

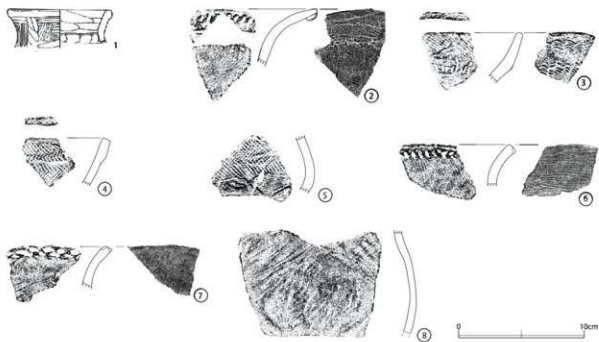
第48図①は補遺資料である。壺破片で、沈線区域内に羽状縄文 RL-RL が充填されハケ目調整後ヘラミガキが施されている。文様帯部分に種子圧痕がみられる。出土位置は2次調査区Q区一括である。



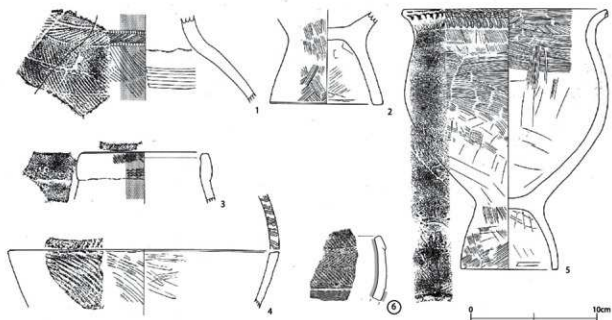
第 27 図 第 3 号住居跡出土遺物



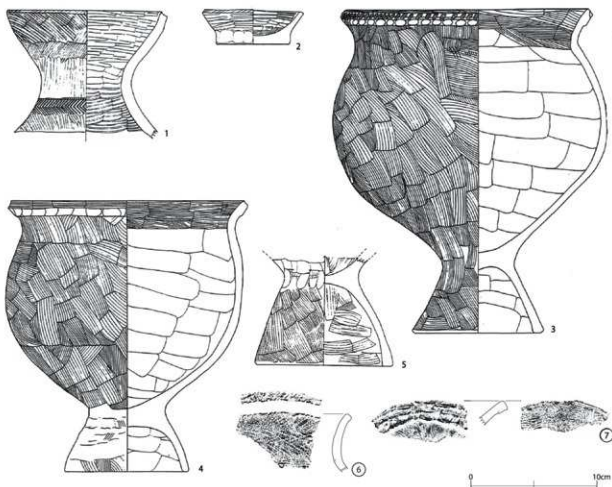
第 28 図 第 6 号住居跡出土遺物



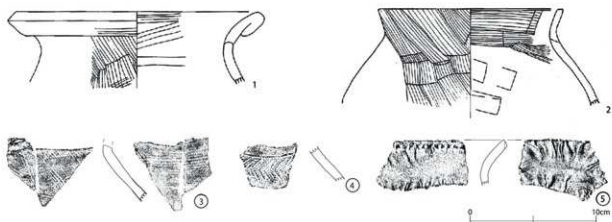
第 29 図 第 7 号住居跡出土遺物



第30図 第9号住居跡出土遺物



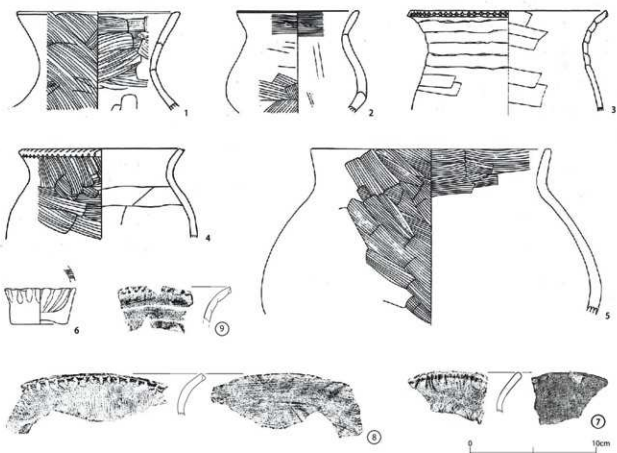
第31図 第10号住居跡出土遺物



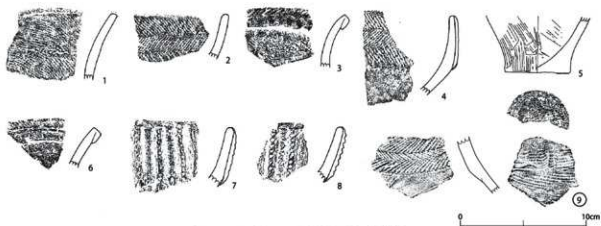
第 32 図 第 16 号住居跡出土遺物



第 33 図 第 17 号住居跡出土遺物



第 34 図 第 18 号住居跡出土遺物



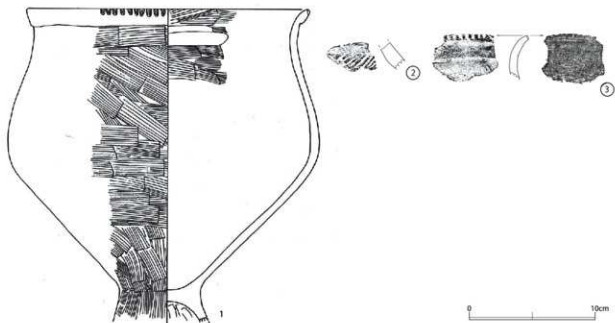
第35図 第19号住居跡出土遺物



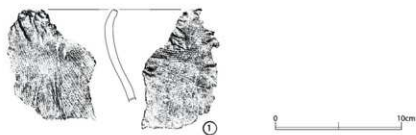
第36図 第21号住居跡出土遺物



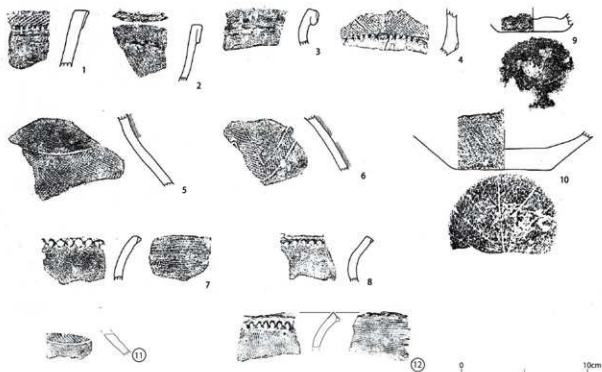
第37図 第22号住居跡出土遺物



第38図 第23号住居跡出土遺物



第39図 第25号住居跡出土遺物



第40図 第30号住居跡出土遺物



第41図 第31号住居跡出土遺物



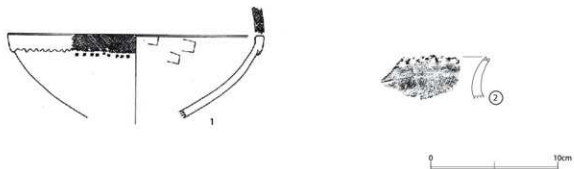
第42図 第32号住居跡出土遺物



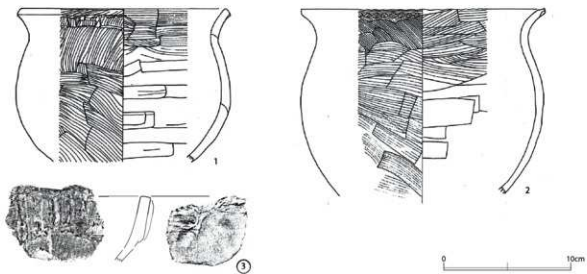
第43図 第33号住居跡出土遺物



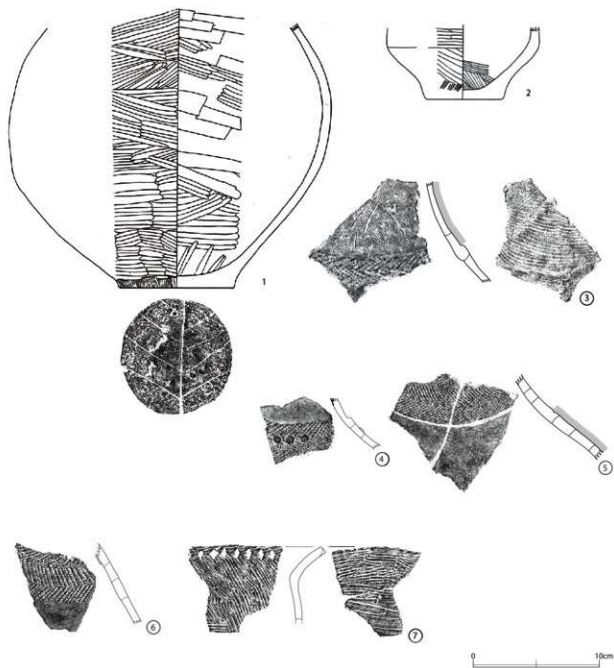
第44図 第36号住居跡出土遺物



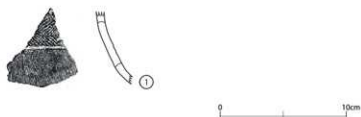
第45図 第43号住居跡出土遺物



第46図 第44号住居跡出土遺物



第47図 A溝（第2次調査第2号溝）出土遺物



第48図 第2次調査区出土遺物

第6表 第3号住居跡出土遺物観察表

No.②～⑧補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	横・斜位ハケ目後横・斜位ヘラミガキ、内面横位ハケ目後横位ヘラナデ、胴部外面赤色塗彩	A	普	明褐色 7.5YR5/6	2次9集報告済No.2 底径5.7
②	壺	折り返し口縁。LR・RL羽状縄文、下端にキザミ、頸部赤色塗彩	A	良	黄褐色 10YR5/6	
③	壺	RL・LR羽状縄文、刺突を施した凹形浮文貼付け	A	良	橙色 7.5YR6/6	
④	壺	沈線区画による山形文、LR・RL・LR羽状縄文	A・I	良	黄褐色 10YR7/6	
⑤	甕	口唇部キザミ、指押圧痕、輪積痕顕著、内面横位ハケ目	A・B	良	にぶい黄褐色 10YR7/3	
⑥	高坏	口縁部LR縄文、下端に縄文原体を挿捺、体部縦位ハケ目後縦位ヘラミガキ	A	良	褐色 10YR4/1	
⑦	高坏	口唇部面取り後LR縄文、口縁部RL・LR羽状縄文を2段、縄文帯下端に結節文	A	良	明黄褐色 10YR7/6	

No.	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	孔径 (cm)	重さ(g)	備考
⑧	双角有孔土製品	2.9	(2.4)	0.2	6.0	焼成前穿孔

第7表 第6号住居跡出土遺物観察表

No.①～③補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	口唇部ハケ刺突文、口縁部斜位ハケ目、下端にキザミ、頸部縦位ハケ目	A	普	にぶい褐色 7.5YR5/4	
②	壺	ハケ刺突羽状文、斜位ハケ目	A	普	橙色 7.5YR6/8	
③	甕	外面斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良	灰黄褐色 10YR4/2	

第8表 第7号住居跡出土遺物観察表

No.②～⑧補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	折り返し口縁。外面縦位ハケ目後縦・横位ヘラミガキ。内面横位ハケ目後縦・斜位ヘラナデ	A	良	黄褐色 10YR6/6	2次9集報告済No.5 口径(8.3)
②	壺	折り返し口縁。口唇部横位ハケ目、下端にキザミ、口縁部指押圧痕、頸部斜位ハケ目後斜位ヘラミガキ、内面横位ハケ目後櫛描波状文、斜位ヘラミガキ	A・D	良	褐色 7.5YR4/6	
③	壺	口唇部LR縄文、口縁部RL縄文、下端にキザミ、頸部縦位ハケ目、内面櫛描波状文	A	普	橙色 7.5YR6/8	
④	壺	折り返し口縁。口唇部RL縄文、口縁部RL・LR・RL羽状縄文、頸部RL・LR羽状縄文	A	普	にぶい黄褐色 10YR7/3	No.5と同一個体か

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
⑤	壺	横位ハケ目、RL・LR羽状縄文	A	普	にぶい黄橙色 10YR7/4	No4と同一個体か
⑥	甕	口唇部面取り後キザミ、頸部縦位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良	にぶい褐色 7.5YR5/4	
⑦	甕	口唇部内外からキザミ、口頸部内外面横位ヘラナデ	A・I	良	橙色 7.5YR6/6	No8と同一個体か
⑧	甕	横・斜位ヘラナデ(一部にLR縄文あり)	A・I	良	橙色 7.5YR6/6	No7と同一個体か

第9表 第9号住居跡出土遺物観察表

No.⑥補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	横位ハケ目沈線区画、ハケ刺突文、肩部斜位ハケ目、赤色塗彩。内面横位ヘラナデ	A・C	良	橙色 7.5YR6/8	6次23集報告済No1
2	台付甕	外面縦・斜位ハケ目、内面斜位ハケ目	A・B・C	普	にぶい黄褐色 10YR5/4	6次23集報告済No2 底径(9.0)
3	壺	折り返し口縁。口唇部RL縄文、口縁部RL縄文、結節文、赤色塗彩、内面横位ヘラナデ	A・C・D	良	にぶい黄褐色 10YR7/4	6次23集報告済No3 口径(10.3)
4	鉢	口唇部面取り後ハケ刺突文、体部粗い斜位ハケ目、内面横・斜位ハケ目後斜位ヘラミガキ	A・B・C	良	橙色 5YR6/6	6次23集報告済No4 口径(21.5)
5	台付甕	口唇部面取り後キザミ、頸部外面縦位ハケ目、胴部外面横位ハケ目、内面横・斜位ハケ目、脚部縦・斜位ハケ目内面ヘラナデ	A・B・C	良	褐色 10YR4/6	6次23集報告済No5 口径(16.4) 器高20.3 底径(7.8)
⑥	鉢	折り返し口縁。口縁部RL縄文、体部LR・RL羽状縄文、縄文帯下端に結節文、横位沈線区画以下横位ヘラミガキ、外面一部および内面赤色塗彩	A	普	にぶい黄褐色 10YR6/4	

第10表 第10号住居跡出土遺物観察表

No.⑥・⑦補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	口唇部面取り後斜位ハケ目。口縁部斜位ハケ目、頸部縦位ヘラミガキ、肩部横位ハケ目沈線区画、ハケ刺突羽状文、縦位ヘラミガキ、内面横位ヘラミガキ	A	良	橙色 7.5YR6/6	2次9集報告済No7 口径12.6
2	鉢	口唇部面取り後斜位ハケ目、内外面横位ハケ目後横位ヘラミガキ	A	良	明褐色 7.5YR5/6	2次9集報告済No8 内面黒 口径8.0 器高2.7 底径5.8

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
3	台付甕	口唇部面取り後キザミ、下端に指押圧痕、外面縦・斜位ハケ目、口縁部内面横・斜位ハケ目、胴部内面横位ヘラナデ	A・D・F	普	明黄褐色 10YR6/6	2次9集報告済№9 口径19.8 器高25.6 底径10.3
4	台付甕	口唇部面取り後横位ハケ目、下端に指押圧痕、外面縦・斜位ハケ目、口縁部内面横位ハケ目、胴部内面横位ヘラナデ	A・D・F	良	明黄褐色 10YR7/6	2次9集報告済№10 口径18.8 器高21.3 底径9.7
5	台付甕	脚台部内外面縦位ハケ目、脚部外面縦・斜位ハケ目、内面縦・横位ハケ目	A・G	良	にぶい黄褐色 10YR6/4	2次9集報告済№11 底径10.8
⑥	壺	単口縁。口唇部ハケ刺突文、口縁部ハケ刺突羽状文、横位ハケ目	A・D・F	良	明褐色 7.5YR5/6	
⑦	壺	折り返し口縁。口縁部指押圧痕、頸部縦・斜位ハケ目、内面櫛歯波状文、横位ハケ目	A	良	明黄褐色 10YR7/6	

第11表 第16号住居跡出土遺物観察表

№③～⑤補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	鉢	折り返し口縁。口縁部横位ハケ目、頸部縦・斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良		2次9集報告済№13 口径(20.2)
2	甕	口唇部面取り。外面斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A・B・C	良	にぶい黄褐色 10YR7/4	2次9集報告済№14 口径(14.6)
③	壺	外面横・斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良	橙色7.5YR6/6	
④	壺	横位ハケ目沈線区画、ハケ刺突羽状文	A	良	黄褐色 7.5YR7/8	
⑤	甕	口唇部面取り後キザミ、外面縦位ハケ目、内面横位ハケ目後横位ヘラミガキ	A	良	にぶい黄褐色 10YR7/4	

第12表 第17号住居跡出土遺物観察表

№①・②補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	折り返し口縁。口唇部斜位ハケ目、頸部縦・斜位ハケ目	A	良	橙色7.5YR6/8	
②	壺	横位ヘラミガキ、横位沈線区画、RL網文	A	良	明褐色 7.5YR5/6	

第13表 第18号住居跡出土遺物観察表

№⑦～⑨補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	単口縁。斜位ハケ目後やぎ粗い斜位ヘラミガキ、内面横位ハケ目	A・B・C	良	黄褐色10YR6/6	2次9集報告済№15 口径(13.0)
2	鉢	外面横・斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A・B・C	良	黄褐色10YR5/6	2次9集報告済№16 口径(9.6)
3	甕	口唇部面取り後キザミ、輪積痕顕著、内外面横位ハケ目	A・B・D	良	明褐色 7.5YR5/6	2次9集報告済№17 口径(15.8)

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
4	甕	口唇部面取り後キザミ、外面横・斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A・B・D	良	黄褐色 10YR6/6	2次9集報告済No.18 口径(13.0)
5	甕	外面斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A・B・C・D	良	明黄褐色 10YR7/6	2次9集報告済No.19 口径(19.0)
6	手捏形土器	指頭によるナデと押さえによる整形。口唇部に細かいキザミ、口縁下端に内側より焼成前穿孔	A・C	良	明黄褐色 10YR6/6	2次9集報告済No.20 口径5.6 器高2.8 底径4.4
⑦	壺	単口縁。横・斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良	灰黄褐色 10YR4/2	
⑧	甕	口唇部面取り後キザミ、外面縦・斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A・D	普	にぶい黄褐色 10YR5/4	
⑨	甕	口唇部面取り後キザミ、輪積痕顕著	A・I	普	にぶい黄褐色 10YR4/3	

第14表 第19号住居跡出土遺物観察表

No.⑩補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	単口縁。口唇部にRL縄文。外面S字状結節文に区画されたRL・LR縄文	A・B・C	良	にぶい黄橙色 10YR6/3	9次35集報告済No.1
2	壺	単口縁。外面RL・LR・RL羽状縄文	A・C・D・I	良	橙色5YR6/8	9次35集報告済No.2
3	壺	折り返し口縁。口唇部にLR縄文。頸部外面ハケ目後斜位ヘラナデ	A・C・D	良	橙色5YR6/8	9次35集報告済No.3
4	壺	複合口縁。複合部にRL・LR・RL羽状縄文、下端にキザミ、頸部外面横・縦位ヘラミガキ	A・C・D	良	橙色5YR6/6	9次35集報告済No.4
5	甕	平底。外面縦・斜位ハケ目、内面斜位ヘラナデ	A・C・I	良	黒褐色 10YR2/3	9次35集報告済No.5 底径(5.2)
6	壺	折り返し口縁。口唇部にRL縄文。口縁部外面横位ヘラナデ、頸部外面斜位ヘラナデ	A・C・D	良	橙色5YR6/6	9次35集報告済No.6
7	壺	複合口縁。複合部にキザミを有する棒状浮文、下端にキザミ	A・C	良	橙色5YR6/8	9次35集報告済No.7
8	壺	複合口縁。複合部にキザミを有する棒状浮文	A・C・D	良	明赤褐色 5YR5/6	9次35集報告済No.8
⑨	壺	ハケ刺突羽状文・横位ハケ目沈線区画、肩部斜位ハケ目後横位ヘラミガキ、内面横位ハケ目	A・H	良	明赤褐色 5YR5/6	

第15表 第21号住居跡出土遺物観察表

No.⑪・⑫補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
⑪	壺	折り返し口縁。RL・LR羽状縄文、下端にキザミ、頸部斜位ハケ目	A	普	橙色5YR6/8	

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
②	壺	頸部 RL 縄文後斜位ヘラミガキ、横位沈線区画、肩部 RL・LR 羽状縄文、内面斜位ハケ目	A	良	明褐色 7.5YR5/6	

第16表 第22号住居跡出土遺物観察表

No①補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	折り返し口縁、頸部斜位ハケ目、内面横・斜位ハケ目後斜位ヘラミガキ	A	良	橙色 7.5YR6/6	

第17表 第23号住居跡出土遺物観察表

No②・③補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	台付甕	口縁部折り返し口縁、口唇部キザミ、外面縦・横・斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A・C	良	黒褐色 10YR2/2	2次9集報告済No1
②	壺	頸部縦位ヘラミガキ、横位ハケ目沈線区画、ハケ刺突文	A	良	褐色 10YR4/1	
③	甕	口唇部キザミ、頸部輪積痕、横位ハケ目、内面横位ハケ目	A・D	良	橙色 7.5YR6/6	

第18表 第25号住居跡出土遺物観察表

No①補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	甕	口唇部キザミ、頸部斜位ハケ目後横位ヘラナデ、胴部縦・斜位ハケ目、内面横位ハケ目後横・斜位ヘラナデ	A・D・I	良	明黄褐色 10YR6/6	

第19表 第30号住居跡出土遺物観察表

No①②補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	口唇部 LR 縄文、口縁部下端にキザミ、頸部横位ハケ目後横位ヘラミガキ	A・D	良	橙色 7.5YR7/6	5次18集報告済No1
2	壺	折り返し口縁、口唇部 LR 縄文、口縁部 RL 縄文、頸部斜位ハケ目	A・C・D	良	にぶい黄褐色 10YR7/4	5次18集報告済No2
3	壺	折り返し口縁、口唇部横位ハケ目、下端にキザミ、頸部縦・斜位ハケ目	A	良	明黄褐色 10YR6/6	5次18集報告済No3
4	壺	複合口縁、口縁部 LR・RL 羽状縄文、下端にキザミ	A・C	良	明黄褐色 10YR6/6	5次18集報告済No4
5	壺	肩部横位ヘラミガキ、横位沈線区画、LR・RL・LR 羽状縄文、一部赤色塗彩	A	良	明黄褐色 10YR6/6	5次18集報告済No5
6	壺	肩部縦・斜位ヘラミガキ、沈線区画による山形文、区画内 RL 縄文を充填、赤色塗彩	A	良	明黄褐色 10YR6/6	5次18集報告済No6
7	甕	口唇部面取り後棒状工具によるキザミ、外面斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A・C・D	良	黒褐色 10YR3/2	5次18集報告済No7
8	甕	口唇部面取り後キザミ、外面斜位ハケ目	A・C・D	良	灰黄褐色 10YR4/2	5次18集報告済No8

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
9	壺	風化が著しい	A・C	良	灰黄褐色 10YR5/2	5次18集報告済No9 底径5.0
10	壺	斜位ハケ目後斜位ヘラミガキ、底部木葉痕	A・C	良	明褐色 7.5YR5/6	5次18集報告済No10 底径7.5
⑩	壺	RL 縄文、横位沈線区画、肩部横位ヘラミガキ	A	良	明黄褐色 10YR6/6	
⑪	甕	口唇部面取り後キザミ、外面縦位ハケ目、内面横 斜位ハケ目	A	良	にぶい黄褐色 10YR5/4	

第20表 第31号住居跡出土遺物観察表

No①～③補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	折り返し口縁。口縁部斜位ハケ目、下端にキザミ、指押圧痕。頸部縦 斜位ハケ目、内面横位ハケ目後横位ヘラミガキ、外面および内面一部赤色塗彩	A	良	橙色7.5YR6/6	
②	壺	LR 縄文、櫛描波状文、斜位ハケ目後横位ヘラナデ	A	良	にぶい黄橙色 10YR6/4	
③	壺	LR 縄文、2段の結節文、RL・LR 羽状縄文、赤色塗彩	A	良	にぶい褐色 7.5YR5/4	

第21表 第32号住居跡出土遺物観察表

No①補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	折り返し口縁。外面斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A・H	普	黄褐色 7.5YR7/8	

第22表 第33号住居跡出土遺物観察表

No①・②補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	折り返し口縁。RL 縄文、下端にキザミ、頸部縦位ハケ目、内面横位ハケ目後横位ヘラミガキ	A・D	普	にぶい黄橙色 10YR7/3	
②	壺	ハケ刺突羽状文、円形浮文貼付け	A	良	明褐色 7.5YR5/6	

第23表 第36号住居跡出土遺物観察表

No①～③補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	甕	口唇部面取り後キザミ、外面横 斜位ハケ目、内面横位ハケ目、胴部横位ヘラナデ	A	良	明褐色 7.5YR5/6	No.3 と同一個体
②	甕	口唇部面取り後キザミ、外面縦 横 斜位ハケ目、内面横 斜位ハケ目	A	良	橙色7.5YR6/6	
③	甕	外面横 斜位ハケ目	A	良	明褐色 7.5YR5/6	No.1 と同一個体

第24表 第43号住居跡出土遺物観察表

No.②補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	高坏	折り返し口縁、口唇部面取り後LR縄文、口縁部RL縄文・LR縄文、下端に縄文原体を挿、体部横・斜位ハケ目後斜位ヘラミガキ	A・C・D	良	にぶい黄褐色 10YR7/4	2次9集報告済No.23
②	甕	口唇部キザミ、頸部横位ヘラナデ、胴部縦位ハケ目	A	普	にぶい黄褐色 10YR5/4	

第25表 第44号住居跡出土遺物観察表

No.③補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	甕	口唇部面取り後キザミ、外面縦・斜位ハケ目、口縁部内面横位ハケ目、胴部横位ヘラナデ	A・B・C	良	橙色 7.5YR6/6	2次9集報告済No.24 口径(16.2)
2	甕	口唇部面取り後キザミ、外面横・斜位ハケ目、口縁部内面横位ハケ目、胴部横位ヘラナデ	A・B	良	明褐色 7.5YR5/6	2次9集報告済No.25 口径(19.2)
③	壺	複合口縁。口唇部RL縄文、口縁部横位ハケ目、5本一組(推定・単位不明)の棒状浮文貼付け、頸部横位ハケ目、内面横位ヘラミガキ	A	良	明黄褐色 10YR6/6	

第26表 A溝出土遺物観察表

No.③～⑦補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	壺	外面縦・斜位ハケ目後横・斜位ヘラミガキ、内面横位ハケ目後横位ヘラミガキ、底部木葉痕	A・C・D	良	明褐色 7.5YR5/8	2次9集報告済k-21
2	壺	外面縦・斜位ハケ目後横・斜位ヘラミガキ、内面横・斜位ハケ目後横位ヘラナデ	A・B・C・D	普	明黄褐色 10YR6/6	2次9集報告済k-22
③	壺	頸部縦位ヘラミガキ、肩部有稜、ハケ刺突羽状文、内面横・斜位ハケ目、外面一部赤色塗彩	A・I	普	橙色 7.5YR6/6	旧2号溝出土
④	壺	頸部横位ハケ目後横位ヘラミガキ、肩部有稜、ハケ刺突羽状文、3個一組(推定・単位不明)の円形浮文貼付け	A・I	良	橙色 7.5YR6/6	旧2号溝出土
⑤	壺	LR・RL・LR羽状縄文、横位沈線区画、横位ヘラミガキ、一部赤色塗彩	A	普	橙色 7.5YR6/6	旧2号溝出土
⑥	壺	ハケ刺突羽状文、横位ヘラミガキ	A	良	橙色 7.5YR6/6	旧2号溝出土
⑦	甕	口唇部面取り後キザミ、外面横・斜位ハケ目、内面横位ハケ目	A	良	褐色 7.5YR4/3	旧2号溝出土

第27表 第2次調査区出土遺物観察表

No.①補遺資料

No.	器種	文様構成・形態・技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
①	壺	頸部 RL・LR RL 羽状縄文、横位沈線区画、 肩部縦位ハケ目後縦・横位ヘラミガキ	A・D・H	良	明褐色 7.5YR5/8	種子圧痕 GBY19-0031 久ヶ原 I 式壺 2次ゴ-Q 区一括

第IV章 検出された遺構と遺物

第1節 弥生時代住居跡と遺物

弥生時代の住居跡は、第2次調査から通し番号を付し、第1号住居跡から、第14次調査までの第149号住居跡となった。第15次調査では住居番号は付しているが、遺構の分布状況の確認のみで遺構精査を行っていないため、本報告書において集成し掲載しているものは、発掘調査が終了している合計149軒分の住居跡である。集成した第49～189図の各住居跡の挿図は、第1号住居跡から住居番号順となっている。しかし、今回の総括報告書においては、遺跡全体を見通し、弥生時代集落の状況と環濠を含めた集落変遷の把握に務めるため、住居形態や出土遺物等により時期区分が推測できる住居跡を主として区分ごとに遺構説明の記載を行った。そのため、攪乱や重複で住居形態が不明なものや出土遺物が少ない住居跡などは、遺構説明の記載はなく集成図のみの掲載である。

時期区分	住居番号
中期後半	第82号、第87号、第133号
後期前半	第1号、第3号、第18号、第72号、第74号、第81号、第97号、第105号、第108号、第119号、第124号、第137号、第141号
後期中葉の前半	第4号、第8号、第9号、第11号、第20号、第24号、第27号、第57号、第59号、第68号、第73号、第75号、第84号、第86号、第90号、第91号、第93号、第100号、第107号、第110号、第113号、第118号、第121号、第128号、第129号、第138号、第144号
後期中葉の後半	第5号、第10号、第12号、第14号、第16号、第30号、第42号、第44号、第50号、第51号、第52号、第58号、第63号、第69号、第77号、第78号、第88号、第92号、第95号、第130号、第132号、第142号、第146号、
後期後半	第13号、第19号、第23号、第62号、第96号、第101号、第109号、第104号、第114号

弥生時代中期後半 弥生時代中期の住居跡は、3軒検出されいずれも中期後半の宮ノ台式期である。

第82号住居跡(第125図)は第6次調査区で検出された。第83・84号住居跡に壊されている。平面形は胴が張る隅丸長方形を呈し、長軸は7.6mを測る。主軸方向はN-53°-Wを指す。出土遺物は、第125図10、11、12は口唇部を押押し波状にする甕や台付甕のほか算盤玉状のチャート製磨石などが覆土中より出土し、中期の様相を呈している。

第87号住居跡(第130図)は、第8次調査区で検出された。第89・91・95号住居跡に壊されている。平面形は、胴が張る隅丸長方形を呈し、長軸は6.2mを測る。主軸方向はN-50°-Wを指す。出土遺物は、第130図1、2は頭部が細くくびれる壺で、1は櫛描波

状文が施されており、中期の様相を呈している。

第133号住居跡(第175図)は、第12・14次調査区で検出された。第132・142・144号住居跡に壊されている。平面形は、胴が張る隅丸長方形を呈し、長軸は6.7mを測る。主軸方向はN-50°-Wを指す。出土遺物は、第175図1・2は頸部が細く括れる壺で、ともに頸部に凸帯が施されており、中期の様相を呈している。

弥生時代後期前半 櫛描籬状文が特徴的な岩鼻式土器を伴う隅丸長方形の住居形態を呈する住居跡群である。第1、3、18、72、74、81、97、105、108、119、124、137、141号住居跡が対象で合計13軒が検出されている。

第1号住居跡(第49図)は、焼失住居であり、第1・8次調査区で検出され、H2号住居跡に壊されている。平面形は角が緩やかな隅丸長方形を呈し、長軸は8.7m、短軸6.4mを測る。主軸方向はN-56°-Wを指す。炉跡は、支柱穴2本の短軸線より少し外側に位置する地床炉である。柱穴の平面形は楕円形である。出土遺物は、第49図1の壺1点であり、頸部に1段の籬状文が巡り、上下に櫛描波状文が施されている。

第3号住居跡(第51図)は、第2次調査区で検出され、北側は未調査区に延びている。平面形は四隅が大きな丸を持つ小判形を呈し、長軸は9.75mを測り、短軸は8.4m前後と推定される。主軸方向はN-53°-Wを指す。炉跡は4基検出され、主軸に沿った支柱穴の少し内側に大型の火皿式炉が1基位置し、その他、中央部に長楕円形と円形、入り口部とみられる斜行ピット近くに地床炉が検出されている。主軸線の東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第51図1～8であり、既報告の1の壺のほか、4は山形の縄文帯、5は口縁下に接合痕を残す作りでともに久ヶ原式の特徴を示している。8は多角有孔土製品であり、弥生時代の遺構から散在的に出土している。

第18号住居跡(第66図)は、第2次調査区で検出され、北側の一部は調査区外に延びている。平面形は角が強めの隅丸長方形を呈し、長軸は6.25mを測る。主軸方向はN-52°-Wを指す。炉跡は、支柱穴の短軸線より外側に位置する地床炉である。出土遺物は、第66図1～9であり、3・9などは、口縁から頸部にかけて器面に接合痕を残す、久ヶ原式の特徴を示す壺が出土している。

第72号住居跡(第115図)は、焼失住居であり、第6次調査区で検出され、第59号、第73号住居跡に壊されている。平面形は角が緩やかな隅丸長方形を呈し、長軸は6.4m、短軸は5.4mを測る。主軸方向はN-68°-Wを指す。炉跡は地床炉が2基検出され、支柱穴の短軸線上に1基、柱穴長軸線上に1基位置している。支柱穴の平面形は、楕円形である。出土遺物は、第115図1～20であり、11～14、16～20は中部高地系の特徴を持つ土器である。4・5は輪積痕を残すナゲ甕、15は縄文区画帯があり共に久ヶ原系土器で、共伴して出土している。

第74号住居跡(第117図)は第6次調査区で検出され、平面形は角が強めの隅丸長方形を呈し、長軸は5.4m、短軸は5.0mを測る。主軸方向はN-81°-Wを指す。炉跡は地床炉が3基検出され、支柱穴の短軸線上に1基、柱穴長軸線上に1基、住居中央に1基位置している。支柱穴の平面形は、不整形である。出土遺物は、第117図1～13であり、1～8は岩鼻式の特徴を持つ土器で、1・3・6には櫛描籬状文が施されている。9は輪積痕を

残すナデ甕、13は山形区画文の壺であり共に久ヶ原系土器である。2系統の土器群が相伴して出土している。

第81号住居跡(第124図)は、第6次調査区で検出された。平面形は角が強めな隅丸長方形を呈し、長軸は5.7m、短軸は5.0mを測る。主軸方向はN-71°-Wを指す。炉跡は地床炉が2基検出され、支柱穴の短軸線上に1基、柱穴長軸線上に1基位置している。支柱穴の平面形は、楕円形である。出土遺物は、第124図1~16であり、2・3・5・6・15は岩鼻式の特徴を持つ土器である。13は折返し口縁部に羽状縄文を持つ久ヶ原系の鉢である。2系統の土器群が相伴して出土している。

第97号住居跡(第140図)は、第8次調査区で検出され、第98号住居跡に上部が壊されている。平面形は角が強めな隅丸長方形を呈し、長軸は6.9m、短軸は5.9mを測る。主軸方向はN-64°-Wを指す。炉跡は地床炉が2基検出され、支柱穴の短軸線より少し外側に1基、柱穴短軸線より少し内側に1基位置している。柱穴の平面形は、不整形である。出土遺物は、第140図1~12であり、1~4は岩鼻式の特徴を持つ土器で、特に1・2は櫛描簾状文と櫛描波状文が施されている。

第105号住居跡(第148図)は、第8次調査区で検出され、東側は未調査区に延びている。平面形は角が緩めな隅丸長方形を呈すると思われる。長軸は不明、短軸は4.2mを測る。主軸方向はN-53°-Wを指すと推定される。炉跡は地床炉が1基検出され、支柱穴の短軸線上に位置している。柱穴の平面形は、楕円形である。出土遺物は、第148図1・2であり、1は岩鼻式の特徴を持つ、櫛描簾状文が施されている。

第108号住居跡(第151図)は、焼失住居であり、第9次調査B区で検出された。H14号住居跡に上部が壊されている。平面形は角が強めな隅丸長方形を呈し、長軸は7.8m、短軸は6.5mを測る。主軸方向はN-48°-Wを指す。炉跡は地床炉が2基検出され、主軸方向で支柱穴の短軸線より少し外側にある炉は、内部に楕円形の粘土の塊があり当初は火皿式炉と報告されているが、粘土板状のものは検出されていないので粘土にて枕石を模した地床炉とした。その他の炉は柱穴長軸線上に位置している。柱穴の平面形は、楕円形である。出土遺物は、第151図1~17であり、1・8~10は岩鼻式の特徴を持つ土器で、特に1・9は櫛描簾状文と櫛描波状文が施されている。

第119号住居跡(第162図)は、焼失住居であり、第9次調査A区で検出され、第118・121号住居跡に壊されている。平面形は角が強めな隅丸長方形と推定される。長軸は不明、短軸は3.55mを測る。主軸方向はN-11°-Eを指す。炉跡は地床炉で、支柱穴の短軸線より外側に位置している。柱穴の平面形は、2本が楕円形、2本が不整形である。住居形態と炉の検出位置などからみて、出土遺物が少なく不確定であるが岩鼻式期の住居跡と考えられる。

第124号住居跡(第166図)は、焼失住居であり、第9次調査A区で検出され、東側は調査区外へ延び、上部は第122号住居跡に壊されている。平面形は角が強めな隅丸長方形と推定され、長軸は不明、短軸は5.7mを測る。主軸方向はN-47°-Wを指す。炉跡は地床炉が1基検出され、柱穴2本の短軸線上に位置している。支柱穴の平面形は、不整形である。出土遺物は、第166図1~5であり、1は岩鼻式の特徴を持つ土器で櫛描簾状文と櫛描波状

文が施されている。

第137号住居跡(第179図)は、焼失住居であり、第12次調査区で検出され、第130・138号住居跡に壊されている。平面形は隅が緩やかな隅丸長方形を呈し、長軸は9.15m、短軸は7.4mを測る。主軸方向はN-60°-Wを指す。炉跡は地床炉が3基検出され、主柱穴2本の短軸線上に1基、長軸線上に2基位置している。柱穴の平面形は楕円形と不整形である。出土遺物は、第179図1～17であり、6・12・13は岩鼻式の特徴を持つ土器で櫛描簾状文と櫛描波状文が施されている。また、2・3の口縁から頸部にかけて器面に接合痕を残す久ヶ原式の特徴を示す甕も出土し、共存していることを示している。

第141号住居跡(第183図)は、焼失住居であり、第14次調査区で検出され、平安時代のH17号住居跡に壊されている。平面形は角が強めな隅丸長方形を呈し、長軸は5.8m、短軸は3.8mを測る。主軸方向はN-33°-Eを指す。炉跡は地床炉が1基検出され、主軸方向で柱穴短軸線上に位置し、内部に楕円形の粘土の塊があり当初は火皿式炉と報告されているが、粘土板状のものは検出されていないので粘土にて枕石を模した地床炉とした。主柱穴の平面形は、不整形である。出土遺物は、第183図1～29であり、1～5・7・8・25・28・29は岩鼻式の特徴を持つ土器で櫛描簾状文と櫛描波状文などが施され、6は器形が岩鼻式であるが文様的には吉ヶ谷式の様相である。また、12は、頸部器面に接合痕を残す甕で、20・21は羽状縄文帯が見られ久ヶ原式の特徴を表し、共存していることを示している。

弥生時代後期中葉の前半 下戸塚式の土器と共に久ヶ原Ⅱ式古段階の遺物が確認される住居跡群である。第4、8、9、11、20、24、27、57、59、68、73、75、84、86、90、91、93、100、107、110、113、118、121、128、129、138、144号住居跡が対象で合計27軒が検出されている。

第4号住居跡(第52図)は、第2・6次調査区で検出され、第11・77号住居跡と重複しており、第2次調査区では第11号住居跡の東壁を壊して構築されている。第77号住居跡との新旧関係は不明である。平面形は小判形を呈し、長軸は6.6mを測り、短軸は5.1mを測る。主軸方向はN-47°-Wを指す。炉跡は主柱穴の短軸線の内側に火皿式炉が1基検出されたが、火皿の下には地床炉が存在し、地床炉から火皿式炉への作り替えが確認された。主軸に沿った南東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴と入り口とみられる斜行ピットが検出されている。出土遺物は、第52図1～12であり、3・4・5・10の壺は久ヶ原式の特徴を示している。

第8号住居跡(第56図)は、第2・6次調査区で検出され、第9号住居跡と重複しており、第9号住居跡に床面が壊されている。平面形は小判形を呈し、長軸は6.2m、短軸は5.3mを測る。主軸方向はN-56°-Wを指す。炉跡は主柱穴の短軸線の内側に火皿式炉が1基検出されたが、火皿の下には地床炉が存在し、地床炉から火皿式炉への作り替えが確認された。出土遺物は、第56図1～7であり、2・3の壺は久ヶ原式の特徴を示している。

第9号住居跡(第57図)は、第2・6次調査区で検出され、第8・78号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第8号住居跡の床面を壊し、本住居跡の上に第78号住居跡が構築されている。平面形は小判形を呈し、長軸は6.8m、短軸は5.6mを測る。主軸方向はN-48°-Wを指す。炉跡は主柱穴の短軸線の内側に地床炉が1基検出された。主軸に沿

た南東壁際には、貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第57図1～6であり、1の壺はハケ目沈線区画とハケ刺突文が施されている。

第11号住居跡(第59図)は、第2・6次調査区で検出され、第4・10・77号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第4・10・77号住居跡に壊されている。平面形は小判形を呈し、短軸は6.1mを測る。主軸方向はN-44°-Wを指す。炉跡は主軸上の住居中央からやや北西よりに火皿式炉が1基検出された。出土遺物は、第59図1～7であり、7の小壺は貯蔵穴から出土している。

第20号住居跡(第68図)は、第2次調査・第9次調査B区で検出され、第19・21号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第19・21号住居跡に壊されている。平面形は小判形と推定され、推定長軸は8.0m、短軸は6.7mを測る。主軸方向はN-59°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に火皿式炉が1基検出された。出土遺物は、第68図1・2の壺形土器片が覆土中から検出されている。

第24号住居跡(第71図)は、第2次調査・第9次調査B区で検出され、第19・114号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第19・114号住居跡に壊されている。平面形は小判形を呈し、長軸は6.8m、短軸は5.3mを測る。主軸方向はN-53°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に火皿式炉が1基検出された。主軸に沿った南東壁際には、入り口部とみられるピットが検出されている。出土遺物は、第71図1～15であり、3の台付甕は炉跡近くの床面で検出された。6・8の羽状縄文帯が施される土器のほか、10のハケ目沈線区画とハケ刺突文が施されている土器も出土している。

第27号住居跡(第74図)は、第2・12・14次調査区で検出され、第138号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第138号住居跡を壊している。平面形は胴が張る小判形を呈し、長軸は4.9m、短軸は4.3mを測る。主軸方向はN-61°-Wを指す。支柱穴の位置に柱穴が複数検出されていることから、住居跡の建替えが推定される。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に火皿式炉が1基検出された。主軸の南東壁際には、貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第74図1～8であり、2の鉢は炉跡で検出された。5・6の壺には沈線区画と羽状縄文帯が施されている。

第57号住居跡(第101図)は、第5次調査B区で検出された。焼失住居のため、覆土には炭化材、焼土が混在していた。平面形は小判形を呈し、長軸は7.22m、短軸は6.4mを測る。主軸方向はN-53°-Wを指す。炉跡は2基検出され、1基は火皿式炉であり支柱穴の短軸線の内側存在し、凸帯部分には、第101図12の甕の大型破片が埋め込まれていた。火皿の下には地床炉が存在し、地床炉から火皿式炉への作り替えが確認された。もう1基は、住居中央部に地床炉が存在していた。主軸に沿った南東壁際には、貯蔵穴と入り口部とみられる楕円形のピットが検出されている。出土遺物は、第101図1～27であり、1・2は床面直上で形を残した状態で検出された。4は刺突により沈線区画を表し縄文帯が施されている。1・2の壺は器形などから東海地方の登呂式の特徴を示している。

第59号住居跡(第103図)は、第5次調査B区・6次調査区で検出され、第58・72号住居跡と重複している。新旧関係は土層観察から本住居跡が第72号住居跡を壊し、第58号住居跡に壊されている。平面形は小判形と思われる。主軸方向はN-83°-Wを指す。炉跡は

地床炉1基が検出された。出土遺物は、第103図1～7が覆土中からの出土であり、1・2は口唇部に縄文が施される壺である。

第68号住居跡(第111図)は、第6次調査区で検出され、第69号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第69号住居跡に壊されている。平面形は小判形を呈し、短軸は3.8mを測る。主軸方向はN-64°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に火皿式炉が1基検出されたが、火皿の下には地床炉が存在し、地床炉から火皿式炉への作り替えが確認された。主軸の南東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴と入り口部とみられる斜行ピットが検出されている。出土遺物は、第111図1～11であり、1・2は沈線区画と羽状縄文帯が施される壺が出土している。

第73号住居跡(第116図)は、第6次調査区で検出され、第72号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第72号住居跡を壊して構築されている。焼失住居のため、覆土には炭化材、焼土が混在していた。平面形は小判形を呈し、長軸は4.7m、短軸は3.9mを測る。主軸方向はN-49°-Wを指す。炉跡は地床炉が1基検出された。主軸に沿った南東壁際には、貯蔵穴とみられる楕円形のピットが検出されている。出土遺物は、第116図1～9であり、3の壺肩部破片はハケ刺突羽状文が施されている。5の輪積痕を残す甕片と7の沈線区画と羽状縄文の鉢は伴に久ヶ原式の特徴を示している。

第75号住居跡(第118図)は、第6次調査区で検出され、第76・77号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡を第76号住居跡が壊し、さらに第77号住居跡が2軒を壊している。平面形は胴が張る隅丸長方形を呈し、長軸は6.3m、短軸は5.0mを測る。主軸方向はN-50°-Wを指す。炉跡は2基検出され、支柱穴の短軸線の内側に火皿式炉が1基、住居中央付近に地床炉が1基検出された。主軸の南東壁際には、貯蔵穴とピットが検出されている。出土遺物は、第118図1～12であり、1・5の胴下半部が強く屈曲する器形の壺、11・12の口唇部が面取りされている台付甕などは東海系の特徴がみられる。

第84号住居跡(第127図)は、第6次調査区で検出され、第82号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第82号住居跡の壁を壊して構築している。平面形は小判形を呈し、長軸は7.0m、短軸は5.5mを測る。主軸方向はN-48°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に火皿式炉が1基検出されたが、火皿の下には地床炉が存在し、地床炉から火皿式炉への作り替えが確認された。主軸に沿った南東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第127図1～18であり、7の壺破片は貯蔵穴から多く出土し、胴下半部が強く屈曲する器形で東海系の特徴が見られる。

第86号住居跡(第129図)は、第8次調査区で検出され、第85・89号住居跡、H9号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第85・89号住居跡に壁を壊されている。平面形は胴が張る隅丸長方形を呈し、長軸は5.3m、短軸は4.7mを測る。主軸方向はN-28°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に火皿式炉が1基検出された。主軸に沿った南東壁際には、入り口部とみられるピットと貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第129図1～7であり、1の壺破片は刺突により沈線区画を表し区画内には同様の工具でハケ刺突羽状文が施され、東海系の特徴がみられる。2～4は複合口縁の壺で棒状浮文が施されている。

第90号住居跡(第133図)は、第8次調査区で検出され、第91号住居跡と重複している。

新旧関係は本住居跡が第91号住居跡に壁、床、炉跡が壊されている。平面形は胴が張る隅丸方形を呈し、長軸は推定5m、短軸は4.4mを測る。主軸方向はN-37°-Wを指す。主軸に沿った南東壁際には、貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第133図1～14であり、3・4の甕の口唇部は面取り後刻みが施され、東海系の特徴がみられる。

第91号住居跡（第134図）は、第8次調査区で検出され、第87・90号住居跡、H11号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第87・90号住居跡を壊して構築され、H11号住居跡に壊されている。平面形は小判形を呈し、長軸は6m、短軸は推定5mを測る。主軸方向はN-39°-Wを指す。炉跡は主柱穴の短軸線の内側に地床炉が2基接して検出された。柱穴が複数検出されたことと炉の重複から、この住居跡は建て替えに伴い炉の作り替えが行われたことが判明した。主軸に沿った南東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第134図1～9であり、5の壺破片は沈線区画内の羽状縄文と羽状の接点部分に結節文が入り午玉山遺跡では出土が少ない文様である。6は山形の沈線区画内に羽状縄文が施されている。

第93号住居跡（第136図）は、第8次調査区で検出され、第92号住居跡、H12号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第92号住居跡に壁、床、炉跡が壊され、H12号住居跡にも壊されている。平面形は胴が張る隅丸方形を呈し、長軸は推定5.1m、短軸は4.8mを測る。主軸方向はN-51°-Wを指す。主柱穴4本と主軸に沿った入り口部とみられるピットが検出されている。出土遺物は、第136図1～5であり、1・2の甕の口唇部は面取りが施されている。

第100号住居跡（第143図）は、第8次調査区で検出された。平面形は長軸短軸の差が少ない小判形を呈し、長軸は5.3m、短軸は4.8mを測る。主軸方向はN-19°-Wを指す。炉跡は主柱穴の短軸線の上に炉が1基検出された。炉跡は白色粘土塊と焼土ブロックが散在し火皿式炉が壊れた後も使用された様な地床炉である。主軸に沿った南東壁際には、入り口部とみられるピットと貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第143図1～15であり、1の壺は波状条線が施されている。3～5は沈線区画と羽状縄文が見られる。15の土製勾玉は床直上からの出土である。

第107号住居跡（第150図）は、第9次調査B区で検出された。第94号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第94号住居跡を壊して構築されている。平面形は不整形円形を呈し、推定長軸は4.2m、短軸は3.78mを測る。主軸方向はN-62°-Wを指す。炉跡は主事軸中央よりやや北西に地床炉が1基検出された。主軸に沿った南東壁際には、入り口部とみられるピットと貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第150図1～4であり、2は口縁部から頸部にかけて輪積痕を残す甕である。

第110号住居跡（第153図）は、第9次調査B区で検出された。第113号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡の床面が第113号住居跡に壊されている。平面形は小判形を呈し、長軸は4.3m、短軸推定は3.6mを測る。主軸方向はN-46°-Wを指す。炉跡は主柱穴の短軸線の内側に火皿式炉が1基検出され、火床面は被熱硬化が顕著であった。主軸に沿った南東壁際には、貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第153図1～4であり、1の甕の口唇部は面取りが施されている。

第113号住居跡(第156図)は、第9次調査B区で検出された。第110・111号、H10号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第110号住居跡を壊し、第111号住居跡に壊されている。平面形は隅丸方形を呈し、長軸4.1m、短軸推定3.8mを測る。主軸方向はN-37°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に火皿式炉が1基検出され、火床面は被熱硬化が顕著であった。主軸に沿った南東壁際には、貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第156図1～7であり、2の壺の口縁内面には櫛描の波状文が施されている。

第118号住居跡(第161図)は、第9次調査A区で検出された。第119号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第119号住居跡を壊して構築されている。平面形は隅丸方形を呈し、長軸4.14m、短軸4.08mを測る。主軸方向はN-70°-Wを指す。炉跡は2基検出され、支柱穴の短軸線の上のやや内側に火皿式炉があり火床面は被熱硬化が顕著であった。火皿から主軸線の70cm程南東に小型の地床炉があり焼土の堆積は少量であった。出土遺物は、第161図1～4であり、1の壺は床面で検出され文様は沈線区画内に羽状縄文、S字状結節文が施されている。

第121号住居跡(第163図)は、第9次調査A区で検出された。第119号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡が第119号住居跡を壊している。住居跡の掘り方のみの検出のため床面、炉跡が消滅している。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸は5.7m、短軸は4.45mを測る。主軸方向はN-78°-Wを指す。出土遺物は、第163図1～10が掘り方覆土中からであり、1・4・5の甕の口唇部には面取りが施されている。

第128号住居跡(第170図)は、第12次調査区で単独で検出されている。平面形は不整形円形を呈し、長軸は4.0m、短軸は3.8mを測る。主軸方向は不明である。炉跡は中心より北側に火皿式炉が1基検出された。火皿の下には地床炉が存在し、地床炉から火皿式炉への作り替えが確認された。南東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴が2基検出されている。出土遺物は、第170図1～7であり、1・6の甕の口唇部に面取りが施されている。

第129号住居跡(第171図)は、第14調査区で単独で検出されている。平面形は不整形隅丸方形を呈し、長軸は3.3m、短軸は3.0mを測る。主軸方向はN-80°-Wを指す。炉跡は中心より北側に地床炉が1基検出された。炉跡内には第171図1の壺の大型破片が埋め込まれていた。東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第171図1～7であり、1の壺は口縁内面に櫛描波状文が3列施されている。

第138号住居跡(第180図)は、第12次調査区で検出され、第27・137号住居跡と重複している。新旧関係は、本住居跡が第27号住居跡に壁が壊され、第137号住居跡を壊して構築されている。平面形は胴が張る隅丸方形を呈し、長軸は5.4m、短軸は4.9mを測る。主軸方向はN-68°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に地床炉が1基検出された。主軸に沿った南東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第180図1～28であり、6・7の羽状縄文を持つ壺破片のほか、13のハケ目沈線区画とハケ刺突文を表した壺破片、21～23・25の甕の口唇部に面取りが施されている東海系の特徴が見られる遺物も混在している。

第144号住居跡(第186図)は、第14次調査区で検出された。第133号住居跡、第9号溝と重複している。新旧関係は本住居跡が第133号住居跡を壊し、第9号溝に壊されてい

る。平面形は小判形を呈し、長軸は7.1mを測る。主軸方向はN-59°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に火皿式炉と地床炉が重複して検出され、切り合い関係から地床炉から火皿式炉に作り替えたことが窺える、火皿の火床面は被熱硬化が顕著であった。出土遺物は、第186図1～15であり、1は肩部に無節の縄文帯が施される壺で床面からの出土である。11は鋸歯文が描かれている壺である。14・15は土製垂飾品である。

弥生時代後期中葉の後半 下戸塚式と共に久ヶ原Ⅱ式新段階の遺物が確認される住居跡群である。第5、10、12、14、16、30、42、44、50、51、52、58、63、69、77、78、88、92、95、130、132、142、146号住居跡が対象で合計23軒が検出されている。

第5号住居跡(第53図)は、第2・6次調査区で検出され、第6号住居跡と重複している。新旧関係は第2次調査の遺構確認では本住居跡が新しい。平面形は小型の小判形を呈し、長軸は4.1m、短軸は3.5mを測る。主軸方向はN-87°-Wを指す。炉跡中央より北側に位置し地床炉が1基検出された。主軸に沿った南東壁際には、入り口部とみられる斜行ピットが検出されている。出土遺物は、第53図1～11であり、6は輪積痕を残すナデ甕、10・11もナデ甕である。

第10号住居跡(第58図)は、第2次調査区で検出され、第11号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第11号住居跡を壊して構築されている。平面形は胴が張った隅丸方形を呈し、長軸は4.15m、短軸は4.0mを測る。主軸方向はN-60°-Wを指す。炉跡は中央よりやや北西に位置し火皿式炉が1基検出された。東壁に沿って貯蔵穴が検出された。出土遺物は、第58図1～7であり、1の壺、4・5の甕は炉跡からの出土で、3の脚台部は炉跡から体部は西壁際から出土し接合した。1はハケ目沈線区画とハケ刺突文が施されている。3・4の台付甕は口唇部に面取りが施されている。これらの土器は東海系の特徴がみられる。

第12号住居跡(第60図)は、第2・6次調査区で検出された。後世の第8号土坑と重複している。新旧関係は本住居跡が、第8号土坑に壊されている。平面形は小判形を呈し、長軸は5.7m、短軸は4.6mを測る。主軸方向はN-55°-Wを指す。炉跡は中央よりやや北西側に火皿式炉、中央より南東側に地床炉の計2基が検出された。火皿の火床面は被熱硬化が顕著であった。主軸に沿った南東壁際には、貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第60図1～6であり、5の甕は口唇部に面取りが施され、東海系の特徴がみられる。

第14号住居跡(第62図)は、第2・6次調査区で検出され、後世のH1号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡がH1号住居跡に壁を壊されている。平面形は不整小判形を呈し、長軸は5.3m、短軸は4.3mを測る。主軸方向はN-55°-Wを指す。炉跡は中央よりやや北西側に火皿式炉が検出されたが、火皿の下には地床炉が存在し、地床炉から火皿式炉への作り替えが確認された。主軸に沿った南東壁際には、貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第62図1～9であり、6の甕は床面直上から破片がまとまって出土し、口唇部には面取りが施されている。3のハケ刺突文の壺破片も含め東海系の特徴がみられる。

第16号住居跡(第64図)は、第2次調査区で検出され北側約半分は調査区外に延びている。第15・17号住居跡と重複し、新旧関係は本住居跡が第15号住居跡を切って、第17号住居跡に壁を壊されている。平面形は小判形を呈し、長軸推定は6.5m、短軸推定は5.6mを測

る。主軸方向はN-57°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線やや内側に火皿式炉が検出され、火皿の火床面は被熱硬化が顕著であった。出土遺物は、第64図1~5であり、2・5の甕は口唇部に面取りが施されている。4のハケ刺突文の壺破片も含め東海系の特徴がみられる。

第30号住居跡(第77図)は、第2調査・第5次調査B区で検出された。第47号住居跡、B溝、後世の第3号溝と重複している。新旧関係は本住居跡が、第47号住居跡を壊し、B溝の上に床面を張り住居が構築されている。平面形は小判形を呈し、長軸は7.46m、短軸は6.42mを測る。主軸方向はN58°-Wを指す。炉跡は3基検出され、そのうち一番大きなものは支柱穴の短軸線のやや内側に火皿式炉が検出されている。他の2基の地床炉は小さく焼土も少量であった。主軸に沿った南東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴と入り口施設の斜向ビットが検出されている。出土遺物は、第77図1~12であり、5・6は沈線区画内に縄文が施される壺である。

第42号住居跡(第89図)は、第2調査・第5次調査B区で検出された。第2次調査では住居の痕跡が確認されたのみであった。平面形は小判形を呈し、長軸は4.1mを測る。主軸方向はN-60°-Wを指す。炉跡は中央よりやや北西に位置し地床炉1基が検出された。主軸に沿った南東壁際には、貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第89図1~9である。1は山形の縄文帯が施される壺であり、4・5は沈線区画内に縄文が施される壺である。6はハケ目沈線とハケ刺突文が施されている。

第44号住居跡(第90図)は、第2次調査区で検出され、第46・33号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第46号住居跡を壊し、第33号住居跡に北東側約1/3が床まで壊されている。平面形は隅丸方形を呈し、長軸は4.1m、短軸推定は3.8mを測る。主軸方向はN-65°-Wを指す。炉跡は住居中心よりやや北西に位置し楕円形の地床炉が1基検出された。出土遺物は、第90図1~3であり、1・2の甕は口唇部に面取りが施されている。

第50号住居跡(第95図)は、第4次調査区で検出され、A溝と重複している。新旧関係は土層断面の観察からも明らかで本住居跡がA溝の上部に構築されている。平面形は小判形を呈し、長軸は5.28m、短軸は4.6mを測る。主軸方向はN-34°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線やや内側に位置し地床炉が1基検出され、炉内には第95図3の壺大型破片が埋め込まれていた。主軸に沿った南東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴が検出されている。本住居跡の覆土は、炭化物片と焼土の堆積が住居の北西域に広く分布しているため被火災住居の可能性がある。出土遺物は、第95図1~20である。3は炉跡、4の小型壺は貯蔵穴からの出土である。そのほかは、焼土中や覆土中層からの出土遺物が多くを占めている。10・16・20などは久ヶ原式の特徴を示している。9は口唇部の面取り、17はハケ刺突文の施文により、9・17の2点は東海系の特徴が見られる。

第51号住居跡(第96図)は、第4次調査・第5次調査B区で検出された。A溝と重複し、新旧関係は土層断面の観察から本住居跡がA溝の上部に構築されている。平面形は円形に近い隅丸方形を呈し、長軸は3.6m、短軸推定は3.6mを測る。主軸方向はN-62°-Wを指す。炉跡は中央よりやや北西に位置し火皿式炉が1基検出され、炉跡周辺に第96図1・2の壺が出土している。主軸に沿った南東壁際には、貯蔵穴が検出されている。本住居跡の床面は、ロームブロックで貼床としているがA溝覆土の上にあるため地盤沈下し窪んで検出さ

れた。出土遺物は、第96図1～15である。6は口唇部の面取り、7・9はハケ刺突文の施文により東海系の特徴がみられる。

第52号住居跡(第97図)は、第4次調査区で検出された。住居跡の大半が耕作に伴い攪乱され、重複するB溝も消滅しているため新旧関係は不明である。平面形は胴が張る隅丸長方形を呈し、短軸は5.0mを測る。主軸方向はN-67°-Wを指す。出土遺物は、第97図1～14である。6の甕は口唇部の面取りが施されている。

第58号住居跡(第102図)は、第5次調査B区で検出された。本住居跡は耕作に伴う攪乱により壁、床の一部が消失しており、第59号住居跡と重複している。新旧関係は土層断面の観察から本住居跡が第59号住居跡を壊して構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸推定は4.5m、短軸推定は4.3mを測る。主軸方向はN-58°-Wを指す。炉跡は主柱穴の短軸線やや内側に位置し地床炉が1基検出された。主軸に沿った南東壁際には、入り口部のビットの他貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第102図1～7である。4・5はハケ刺突文が施される壺であり東海系の特徴がみられる。

第63号住居跡(第106図)は、第5次調査B区で検出され、第62号住居跡、B溝と重複している。新旧関係は土層断面の観察から本住居跡が第62号住居跡に壁を壊され、B溝上部に構築されている。平面形は円形を呈し、径4.0mを測る。主軸方向はN-44°-Wを指す。炉跡は中心よりやや北西に位置し地床炉が1基検出された。出土遺物は、第106図1～7である。1・7は炉跡内から出土した。1の壺はハケ目沈線とハケ刺突文が施され、東海系の特徴がみられる。

第69号住居跡(第112図)は、第6次調査区で検出され、第68号住居跡と重複している。新旧関係は土層断面の観察から本住居跡が第68号住居跡を壊して構築されている。平面形は小判形を呈し、長軸は3.2m、短軸は2.8mを測る。主軸方向はN-50°-Wを指す。炉跡は中心よりやや北側に位置し楕円形の地床炉が1基検出された。出土遺物は、第112図1～7である。1・2・4・5は羽状縄文が施される壺である。7は双角有孔土製品である。

第77号住居跡(第120図)は、第6次調査区で検出された。第4・11・75・76・79号住居跡と重複している。新旧関係は土層断面の観察から本住居跡が第11・75・76・79号住居跡を壊して構築されている。第4号住居跡との新旧は土層観察では不明である。平面形は胴が張る隅丸長方形を呈し、長軸は7.4mを測る。主軸方向はN-46°-Wを指す。炉跡は主柱穴の短軸線やや内側に位置し火皿式炉が1基検出された。出土遺物は、第120図1～17である。5の壺はハケ目沈線区画とハケ刺突文が施され、15の広口壺は胴部下半が強く屈曲する器形であることから東海系の特徴がみられる。

第78号住居跡(第121図)は、第6次調査区で検出された。第9号住居跡と重複している。新旧関係は土層断面の観察から本住居跡が第9号住居跡を壊して構築されている。平面形は不整形円形を呈し、長軸は3.6mを測る。主軸方向はN-44°-Wを指す。炉跡は中央よりやや北側に位置し地床炉が1基検出された。主軸に沿った南壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第121図1～8である。4の壺は胴部下半が強く屈曲する器形である。

第88号住居跡(第131図)は、第8・9次調査区で検出された。H10号住居跡と第89・

112号住居跡と重複している。新旧関係は土層断面の観察から本住居跡の上部をH10号住居跡に壊され、第89・112号住居跡を壊して構築されている。平面形は長軸がやや短い小判形を呈し、長軸は4.1m、短軸は3.5mを測る。主軸方向はN-56°-Wを指す。炉跡は中央よりやや北西に位置し火皿式炉が1基検出され、火皿の下の地山面も被熱で硬化していた。住居内の南東壁際には礫が集中して出土する場所が確認された。その礫と共に第131図8の小型壺が出土している。出土遺物は、第131図1～9である。2はミガキが施されている高坏である。3～5は口唇部の面取りが施されている甕である。

第92号住居跡(第135図)は、第8次調査区で検出された。第93・94号住居跡と重複している。新旧関係は土層断面の観察から本住居跡が第93・94号住居跡を壊して構築されている。平面形は胴が張る隅丸方形を呈し、短軸は4.2mを測る。主軸方向はN-50°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線やや内側に位置し楕円形の地床炉が1基検出された。出土遺物は、第135図1～4である。2の壺は胴部下半が屈曲する器形である。

第95号住居跡(第138図)は、第8次調査区で検出された。第87号、H11号住居跡と重複している。新旧関係は土層断面の観察から本住居跡が第87号住居跡を壊し、H11号住居跡に壊されている。平面形は小判形を呈し、長軸は5.9m、短軸は4.9mを測る。主軸方向はN-35°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線やや内側に位置し円形の火皿式炉が1基検出されたが、火皿の下は火皿の径より一回り大きな掘り込みが存在し、掘り込み底面には被熱痕が認められ、地床炉から火皿式炉への作り替えが想定される。主軸に沿った南東壁際には、入り口部のピットの他貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第138図1～13である。1は棒状浮文を持つ複合口縁の壺である。2は匙状の土製品である。

第130号住居跡(第172図)は、第12次調査区で検出されたが、遺構の半分近くが西側の調査区外へ延びており、第131・137号住居跡と重複している。新旧関係は土層断面の観察から本住居跡が第137号住居跡を壊し、第131号住居跡に壊されている。平面形は小判形とみられ、短軸推定は5.5mを測る。主軸方向はN-47°-Wを指す。主軸に沿った南東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第172図1～10である。5・6の壺はハケ目沈線とハケ刺突文が施されている。1の甕は口唇部の面取り後キザミが施され、ともに東海系の特徴がみられる。

第132号住居跡(第174図)は、第12次調査区で検出された。第133・134号住居跡と第10号溝と重複している。新旧関係は土層断面の観察から本住居跡が第133・134号住居跡と第10号溝を壊して構築されている。平面形は小判形を呈し、長軸は5.8m、短軸は4.7mを測る。主軸方向はN-70°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線より内側に位置し楕円形の地床炉が1基検出された。主軸に沿った東壁際には、貯蔵穴が検出された。出土遺物は、第174図1～20である。1・2・6の壺はハケ目が施されている。14～16の甕は口唇部に面取りが施されている。

第142号住居跡(第184図)は、第14次調査区で検出された。第133号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第133号住居跡を壊して構築されている。平面形は小判形を呈し、長軸は6.7m、短軸は5.2mを測る。主軸方向はN-56°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線上に位置し円形の火皿式炉が1基検出された。主軸に沿った南東壁際には、凸帯を持つ貯蔵

穴が検出された。出土遺物は、第184図1～20である。1の壺は刺突により沈線区画がなされ沈線より下から縄文が施されている。6はヘラナデの甕である。

第146号住居跡(第188図)は、第14次調査区で検出されたが、遺構の半分以上が東側の調査区外へ延びている。後世の第9号溝と重複している。新旧関係は土層断面の観察から本住居跡が第9号溝により壊されている。平面形、規模、主軸等は不明である。本住居跡の壁際には、焼土が厚く堆積しているため火災住居の可能性がある。出土遺物は、第188図1～13である。3の壺はハケ刺突文が施されている。7・8の甕は口唇部の面取り後キザミが施されている。

弥生時代後期後半 下戸塚式の新段階であり端末結節文の遺物が確認される住居跡群である。第13・19・23・62・96・101・109・104・114号住居跡が対象で合計9軒が検出されている。

第13号住居跡(第61図)は、第2次調査区、第9次調査A区で検出され図上で接合したが、遺構の北東部分は調査区外へ延びている。第15号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第15号住居跡の壁を壊している。平面形は小判形とみられ、長軸推定は5.9m、短軸推定は5.2mを測る。主軸方向はN-66°-Wを指す。主軸に沿った南東壁際には、入り口施設の斜行ピットが検出されている。その南の壁際には貯蔵穴が検出され、第61図1・4・7は貯蔵穴とその周辺から出土している。出土遺物は、第61図1～7である。1の複合口縁壺や5のハケ刺突羽状文が施されている壺などが出土している。

第19号住居跡(第67図)は、第2次調査区、第9次調査B区で検出され、第20・24号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第20・24号住居跡を壊して構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸は5.0m、短軸は4.3mを測る。主軸方向はN-54°-Wを指す。炉跡は主柱穴の短軸線上の中心に位置した火皿式炉が1基、その火皿式炉と接するように中心軸線南東側に地床炉が1基検出された。主軸に沿った東壁近くには、入り口施設の斜行ピットが検出されている。同じく東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第67図1～9であり、4・7・8は複合口縁の壺である。

第23号住居跡(第69図)は、第2次調査区で検出され、第20・21号住居跡と重複している。新旧関係は本住居跡が第20・21号住居跡を壊して構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸は5.2m、短軸は4.7mを測る。主軸方向はN-14°-Wを指す。炉跡は主柱穴の短軸線よりやや内側に位置した地床炉が1基検出された。住居中央より南東側のピットが貯蔵穴とみられ、その上部には第69図1の台付甕一個体が出土している。出土遺物は、第69図1～3であり、1の台付甕の他、2の壺はハケ刺突文が施されている。

第62号住居跡(第105図)は、第5次調査B区で検出されたが、約1/3が耕作により床面まで攪乱されている。第63号住居跡、B溝、後世の第3号溝、第7号溝と重複している。新旧関係は土層観察から本住居跡が第63号住居跡の壁を壊し、B溝上部に構築されており、B溝→第63号住居跡→第62号住居跡(旧→新)となっている。平面形は小判形を呈し、長軸推定は6.4mを測る。主軸方向はN-55°-Wを指す。炉跡は中央より北東側に位置し不整形の地床炉が1基検出された。出土遺物は、第105図1～6である。1は口縁の下に稜を持つ器形の壺である。3の壺はハケ刺突羽状文が施されている。

第101号住居跡(第144図)は、第8次調査区で検出され、第102号住居跡、H13号住

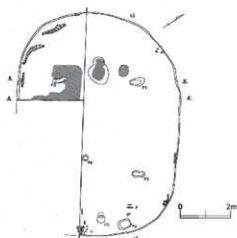
居跡と重複している。新旧関係は土層観察から本住居跡が第102号住居跡を壊し、H13号住居跡に半分程壊されている。平面形は隅丸長方形を呈し、短軸は4.5mを測る。主軸方向はN-57°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に位置し、半分がH13号住居跡に壊された火皿式炉が1基検出された。出土遺物は、第144図1～10であり、3の壺破片は沈線区画内に羽状縄文が施されている。

第96号住居跡(第139図)は、第8次調査区で検出され、本住居跡の北東側上部に後世の第7号溝が走っている。平面形は胴が張る隅丸長方形を呈し、長軸は4.8m、短軸は4.3mを測る。主軸方向はN-34°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線上の内側に位置する火皿式炉が検出されたが、火皿の下には地床炉が存在し、地床炉から火皿式炉への作り替えが確認された。主軸に沿った東壁際には、凸帯を持つ貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第139図1～10であり、1の壺は貯蔵穴及び床面から出土した、ハケ目後ヘラミガキされ、胴部下半で強く屈曲し底部となるため屈曲部に稜線がみられる。3は口縁部から頸部に輪積痕を残す甕である。

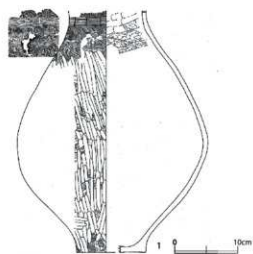
第109号住居跡(第152図)は、第9次調査B区で検出され、第99号住居跡と重複している。新旧関係は土層観察から本住居跡が第99号住居跡を壊して構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸は5.0m、短軸は4.4mを測る。主軸方向はN-50°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に位置する火皿式炉が検出されたが、火皿の下には楕円形の地床炉が重複して存在し、地床炉から火皿式炉への作り替えが確認された。主軸に沿った東壁際には、入り口部のピットの他、貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第152図1～18であり、1・2の壺には羽状縄文の他S字状結節文が施されている。3の壺は全体にハケ目後一部にヘラミガキが施されている。

第104号住居跡(第147図)は、第8次調査区で検出されたが、約1/3が東側の調査区外に延びている。第102号住居跡と重複している。新旧関係は土層観察から本住居跡が第102号住居跡を壊して構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、短軸は6.3mを測る。主軸方向はN48°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に位置する火皿式炉が検出されたが、火皿の下には楕円形の地床炉が重複して存在し、地床炉から火皿式炉への作り替えが確認された。出土遺物は、第147図1～7であり、1は複合口縁の壺である。4は炉跡と床面から出土したナデが施される甕である。

第114号住居跡(第157図)は、第9次調査B区で検出され、第24号、第115号住居跡と重複している。新旧関係は土層観察から本住居跡が第24号、第115号住居跡を壊して構築されている。平面形は円に近い隅丸方形を呈し、長軸は5.5m、短軸は5.1mを測る。主軸方向はN-53°-Wを指す。炉跡は支柱穴の短軸線の内側に位置する火皿式炉が検出された。主軸に沿った東壁際には、入り口部のピットの他、凸帯を持つ貯蔵穴が検出されている。出土遺物は、第157図1～6であり、3の壺には羽状縄文の他S字状結節文が施されている。



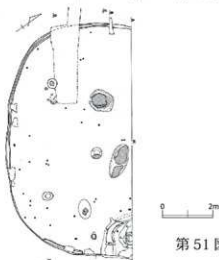
第49図 第1号住居跡



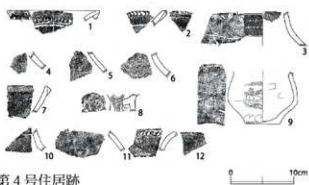
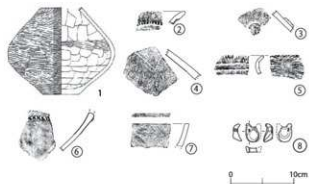
第50図 第2号住居跡

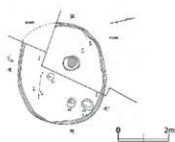


第51図 第3号住居跡

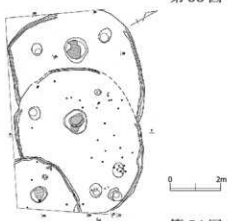
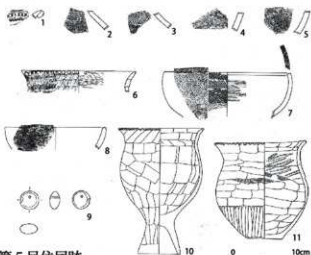


第52図 第4号住居跡

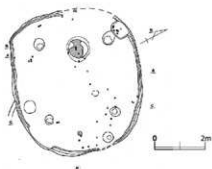




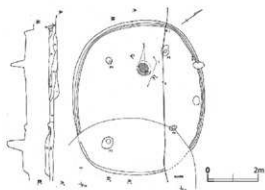
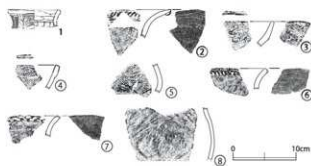
第53図 第5号住居跡



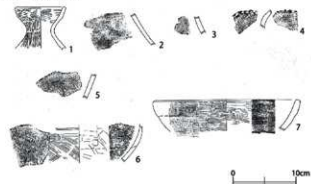
第54図 第6号住居跡

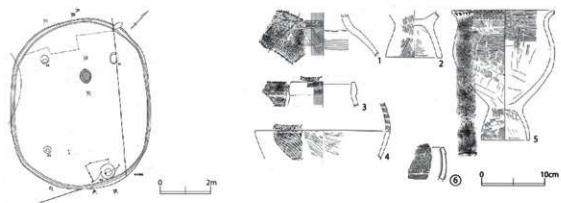


第55図 第7号住居跡

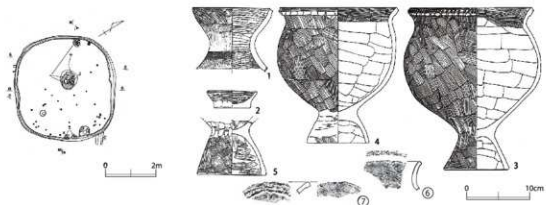


第56図 第8号住居跡

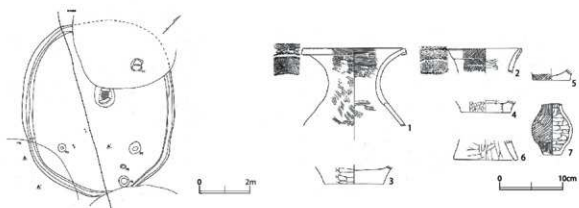




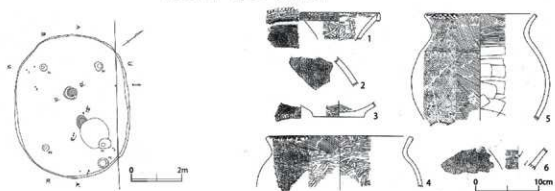
第57図 第9号住居跡



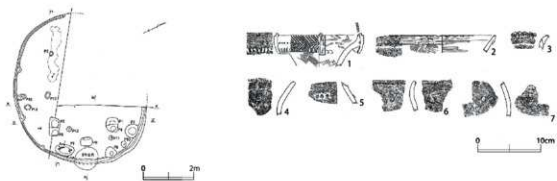
第58図 第10号住居跡



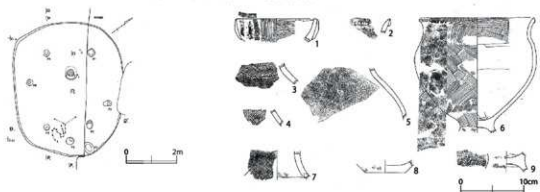
第59図 第11号住居跡



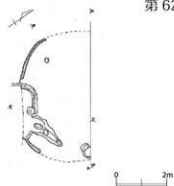
第60図 第12号住居跡



第61図 第13号住居跡



第62図 第14号住居跡



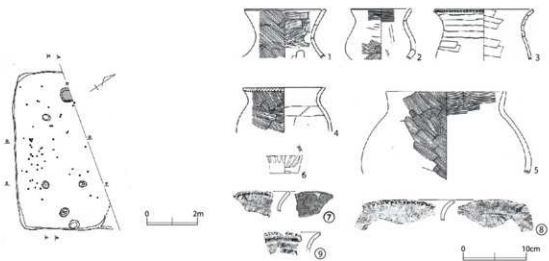
第63図 第15号住居跡



第64図 第16号住居跡



第65図 第17号住居跡



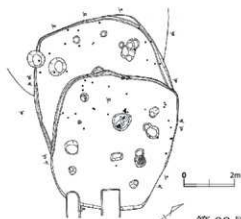
第66図 第18号住居跡



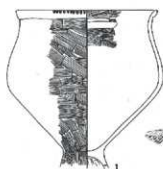
第67図 第19号住居跡



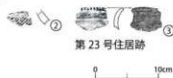
第68図 第20号住居跡



第69図 第21・23号住居跡



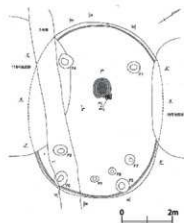
第21号住居跡



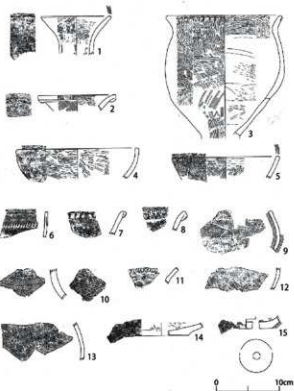
第23号住居跡



第70図 第22号住居跡

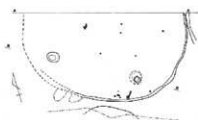


第71図 第24号住居跡

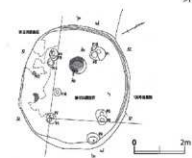


第72図 第25号住居跡

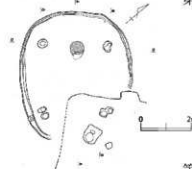
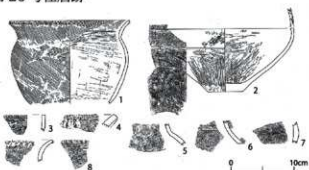




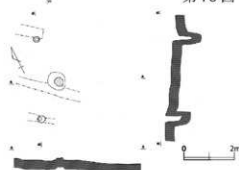
第73图 第26号住居跡



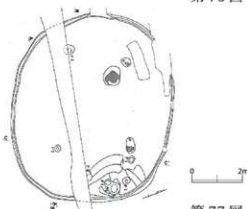
第74图 第27号住居跡



第75图 第28号住居跡

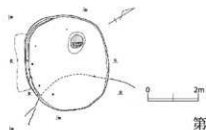


第76图 第29号住居跡

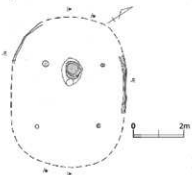


第77图 第30号住居跡

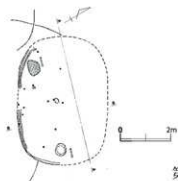
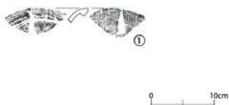




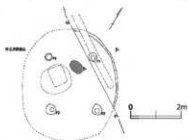
第78図 第31号住居跡



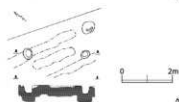
第79図 第32号住居跡



第80図 第33・43号住居跡



第81図 第34号住居跡

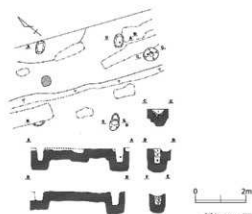


第82図 第35号住居跡

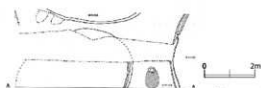


第83図 第36号住居跡





第84図 第37号住居跡



第85図 第38号住居跡



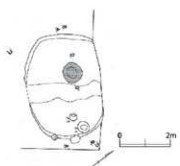
第86図 第39号住居跡



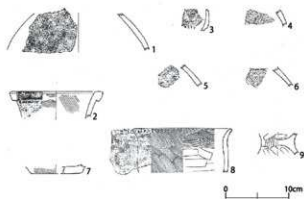
第87図 第40号住居跡

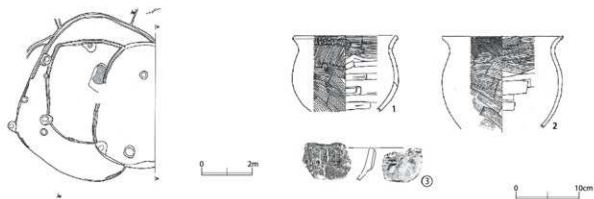


第88図 第41号住居跡

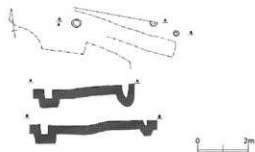


第89図 第42号住居跡

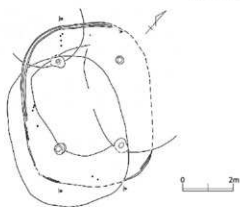




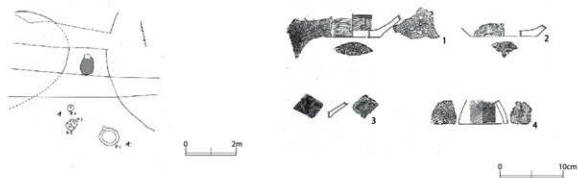
第90図 第44・46号住居跡



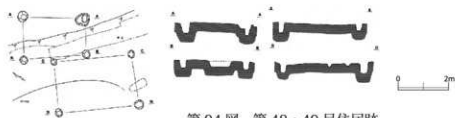
第91図 第45号住居跡



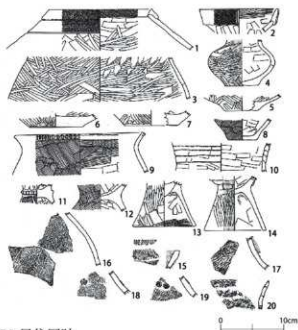
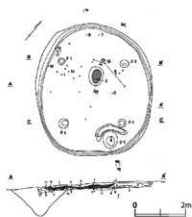
第92図 第46号住居跡



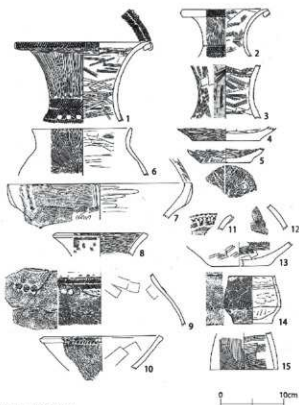
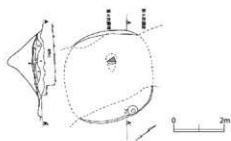
第93図 第47号住居跡



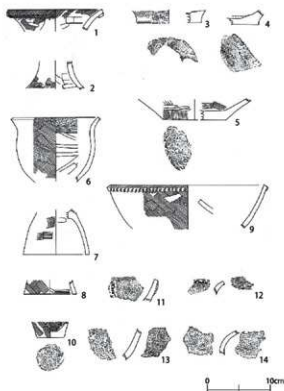
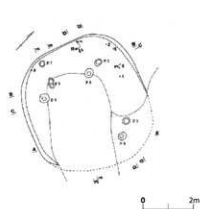
第94図 第48・49号住居跡



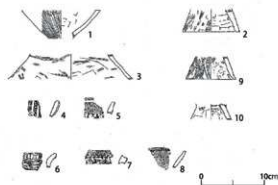
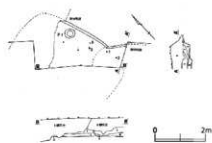
第95図 第50号住居跡



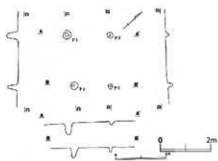
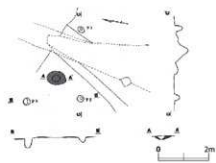
第96図 第51号住居跡



第97図 第52号住居跡

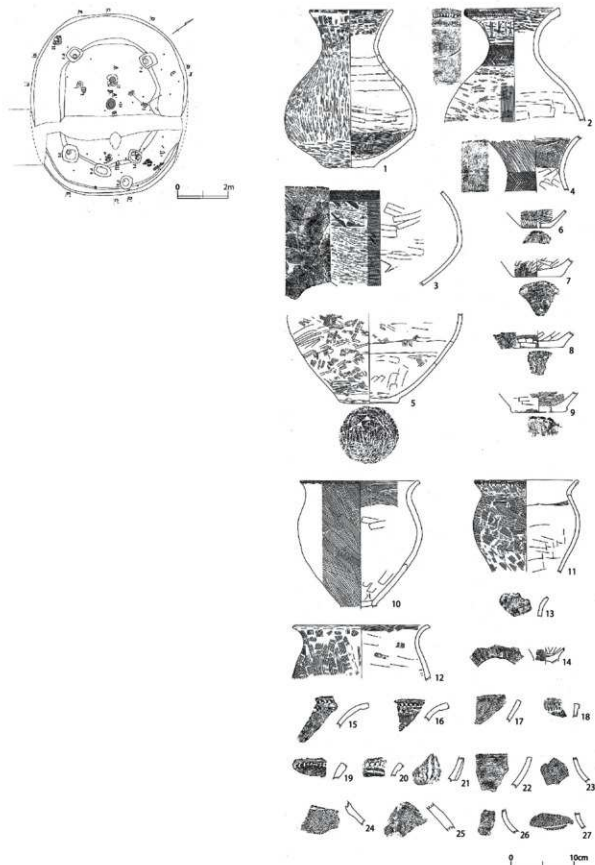


第98図 第53・54号住居跡 (1~3:第53号、4~10:第54号)

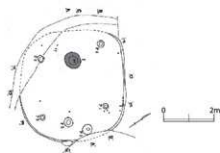


第99図 第55号住居跡

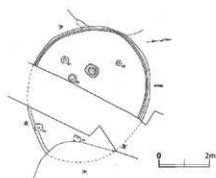
第100図 第56号住居跡



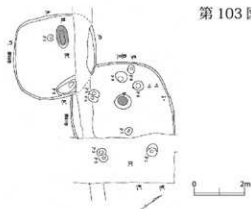
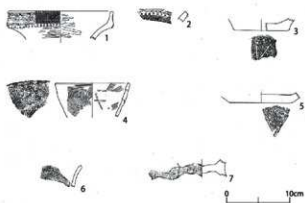
第101図 第57号住居跡



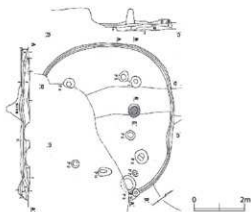
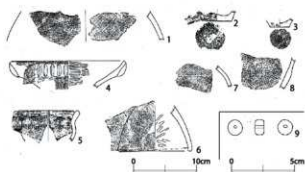
第102図 第58号住居跡



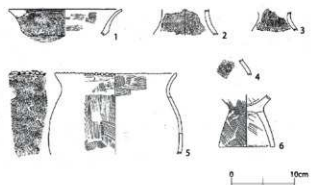
第103図 第59号住居跡

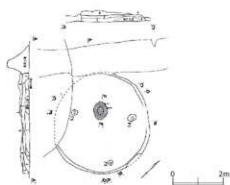


第104図 第60・61号住居跡 (1～3:第60号、4～9:第61号)

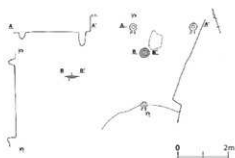
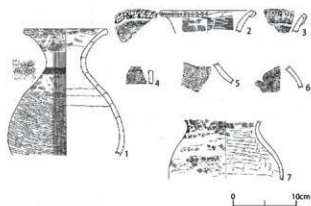


第105図 第62号住居跡

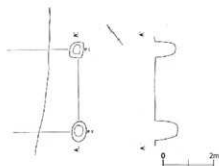




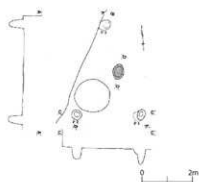
第106図 第63号住居跡



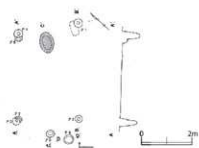
第107図 第64号住居跡



第108図 第65号住居跡

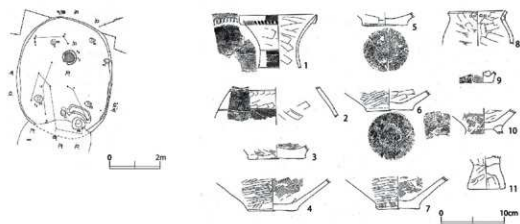


第109図 第66号住居跡

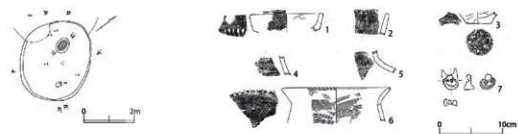


第110図 第67号住居跡

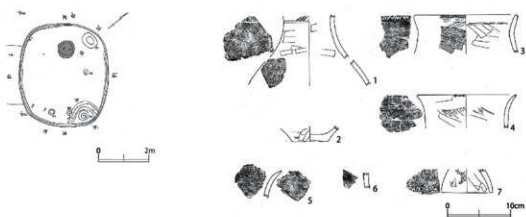




第 111 図 第 68 号住居跡



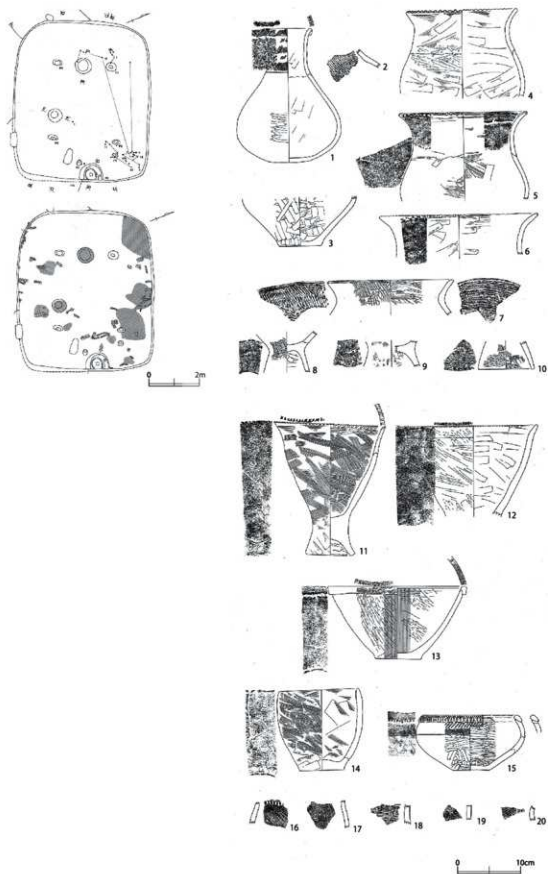
第 112 図 第 69 号住居跡



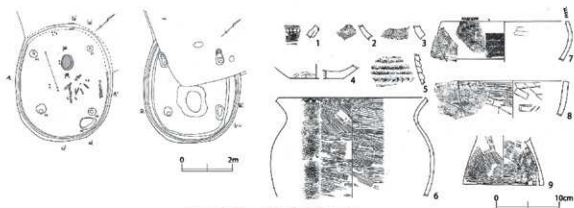
第 113 図 第 70 号住居跡



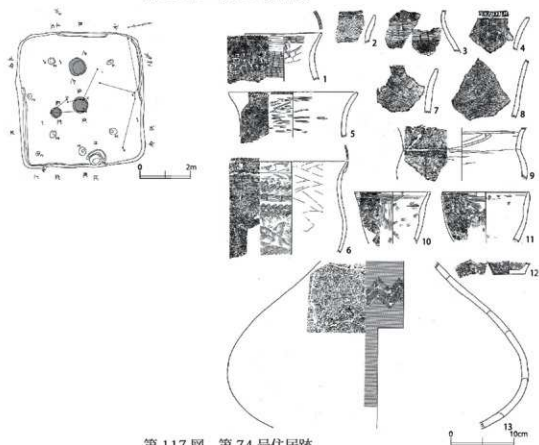
第 114 図 第 71 号住居跡



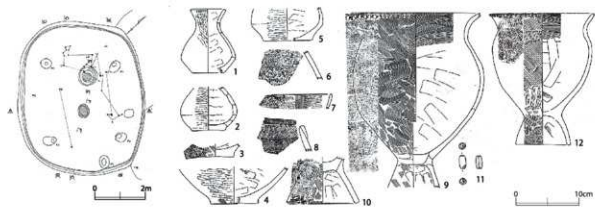
第115図 第72号住居跡



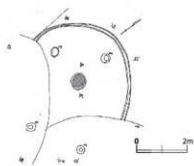
第116図 第73号住居跡



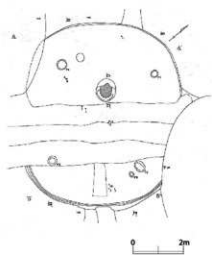
第117図 第74号住居跡



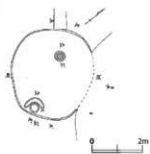
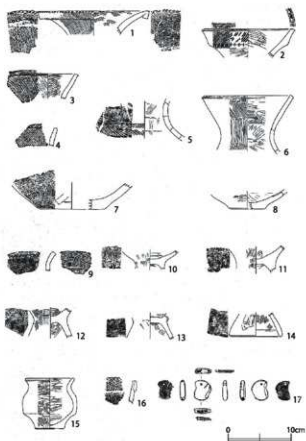
第118図 第75号住居跡



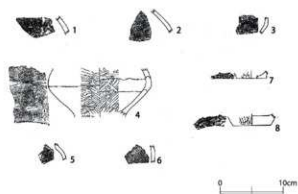
第119图 第76号住居跡

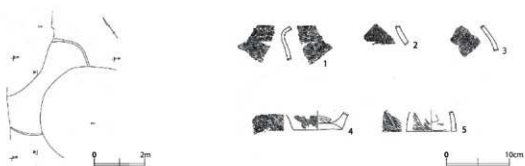


第120图 第77号住居跡



第121图 第78号住居跡

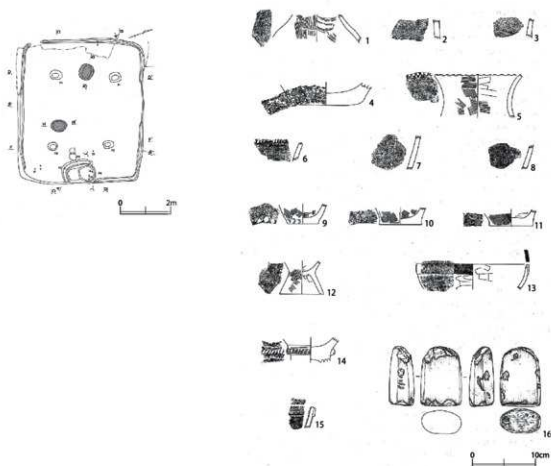




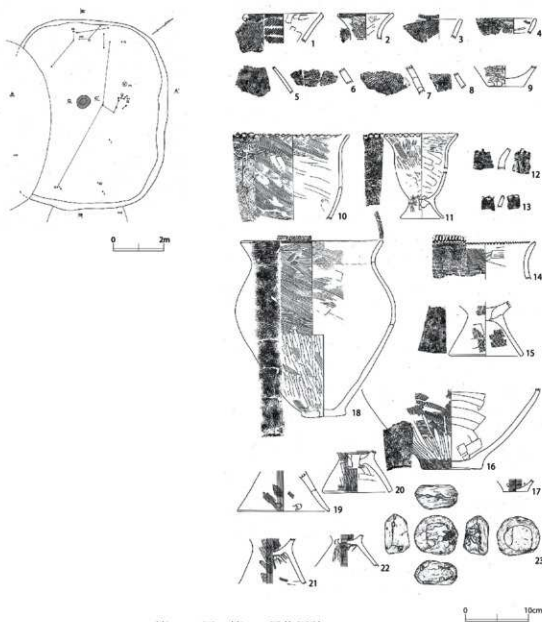
第122図 第79号住居跡



第123図 第80号住居跡



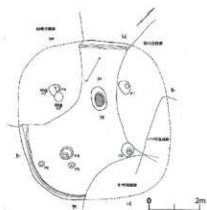
第124図 第81号住居跡



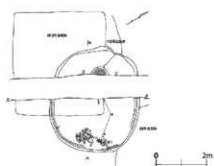
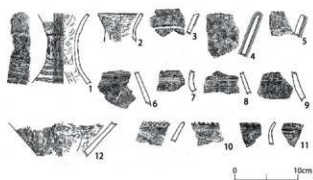
第125图 第82号住居跡



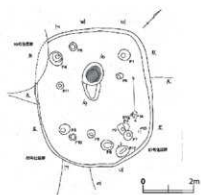
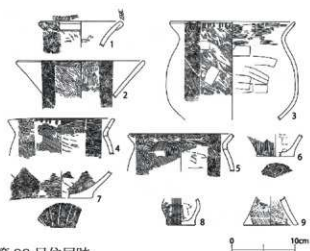
第126图 第83号住居跡



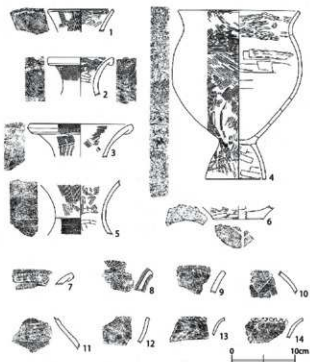
第130図 第87号住居跡

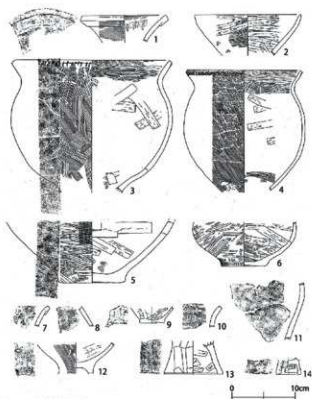
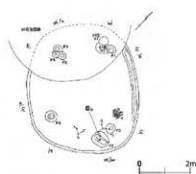


第131図 第88号住居跡

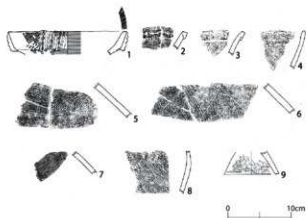
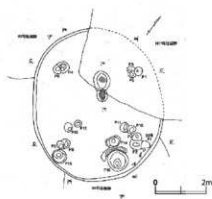


第132図 第89号住居跡

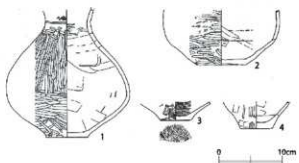
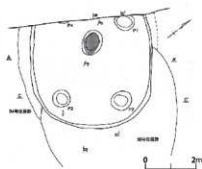




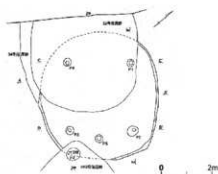
第133図 第90号住居跡



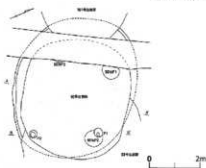
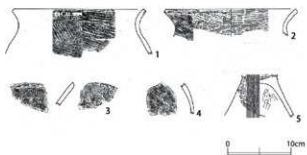
第134図 第91号住居跡



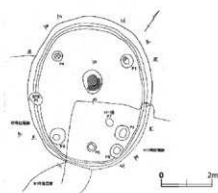
第135図 第92号住居跡



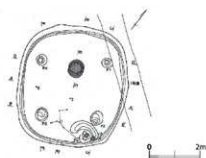
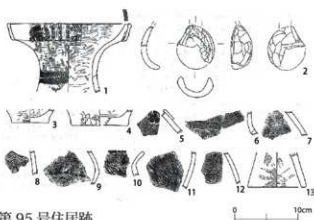
第136图 第93号住居跡



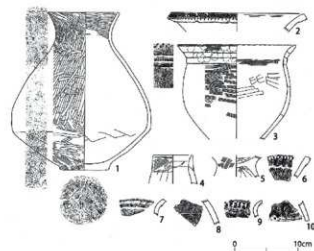
第137图 第94号住居跡

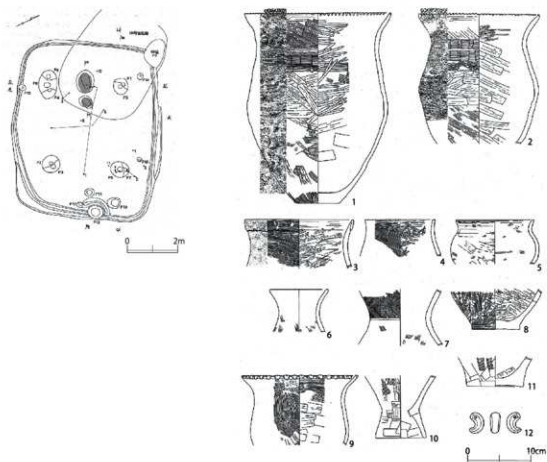


第138图 第95号住居跡

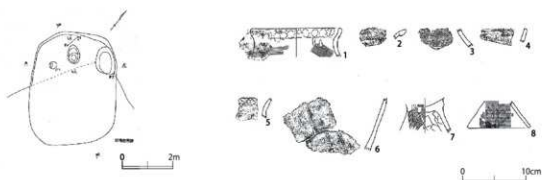


第139图 第96号住居跡





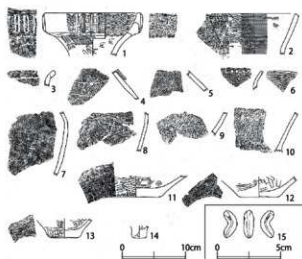
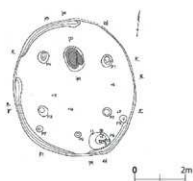
第140図 第97号住居跡



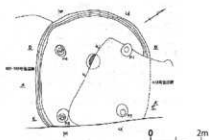
第141図 第98号住居跡



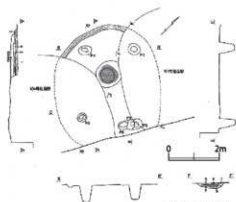
第142図 第99号住居跡



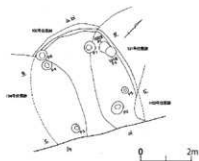
第143図 第100号住居跡



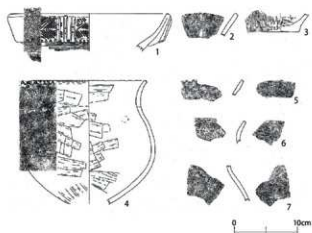
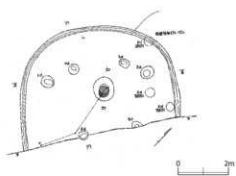
第144図 第101号住居跡



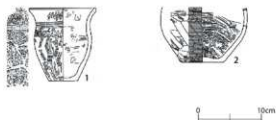
第145図 第102号住居跡



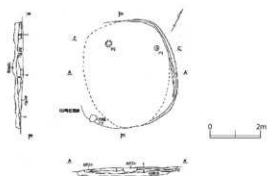
第146図 第103号住居跡



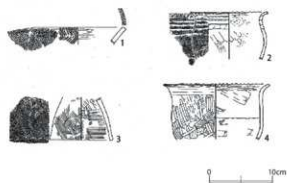
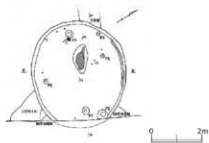
第147図 第104号住居跡



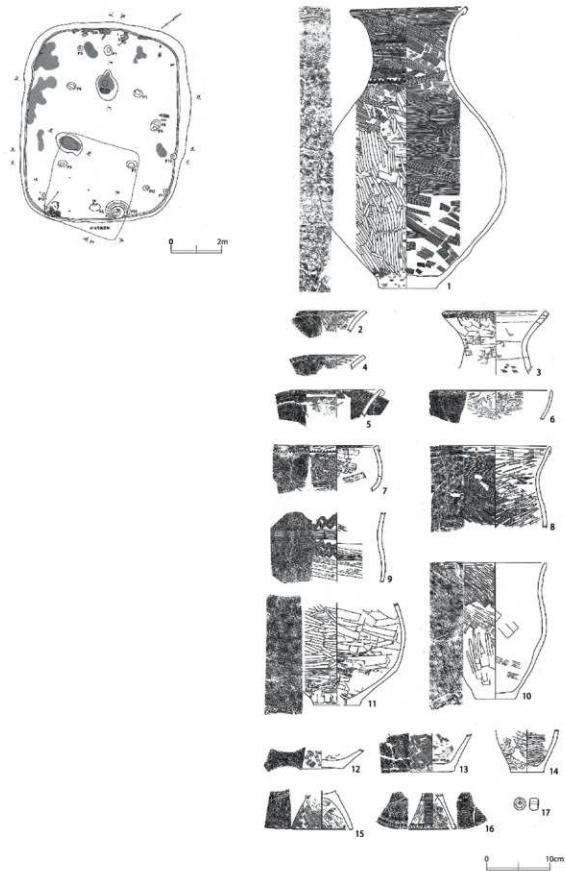
第148図 第105号住居跡



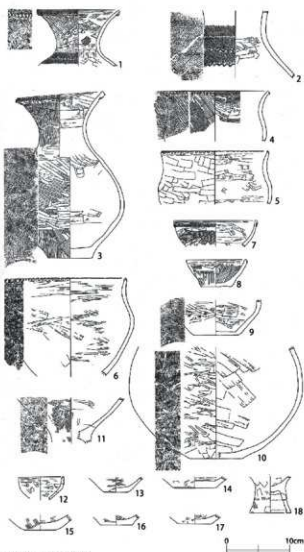
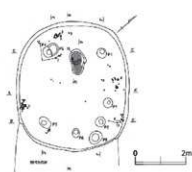
第149図 第106号住居跡



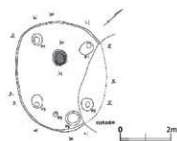
第150図 第107号住居跡



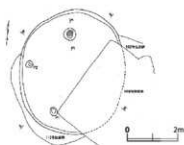
第151図 第108号住居跡



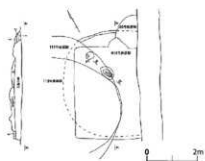
第152図 第109号住居跡



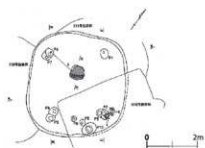
第153図 第110号住居跡



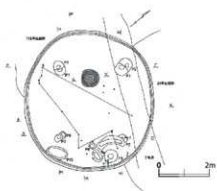
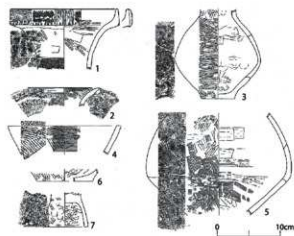
第154図 第111号住居跡



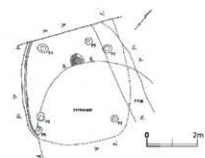
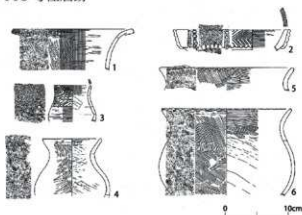
第155图 第112号住居跡



第156图 第113号住居跡

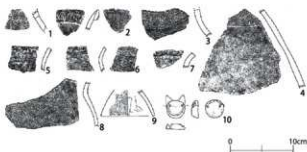


第157图 第114号住居跡

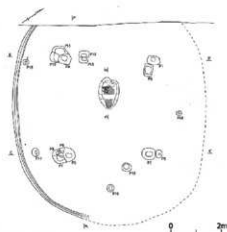


第158图 第115号住居跡

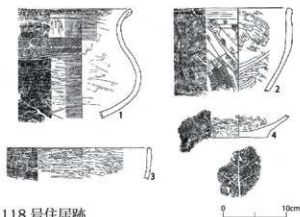
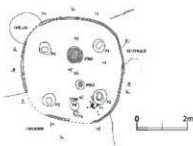




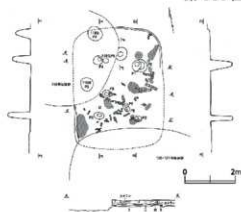
第159図 第116号住居跡



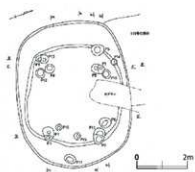
第160図 第117号住居跡



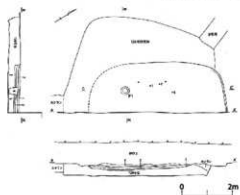
第161図 第118号住居跡



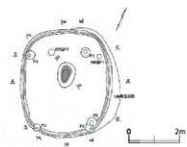
第162図 第119号住居跡



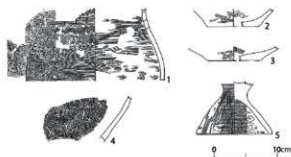
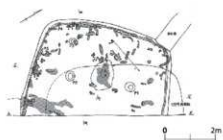
第163图 第120・121号住居跡



第164图 第122号住居跡



第165图 第123号住居跡



第166图 第124号住居跡



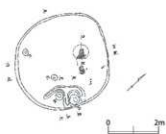
第167图 第125号住居跡



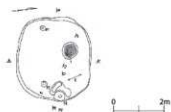
第 168 図 第 126 号住居跡



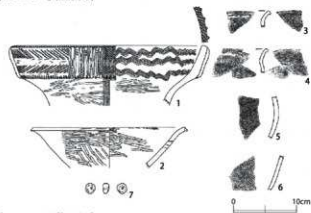
第 169 図 第 127 号住居跡



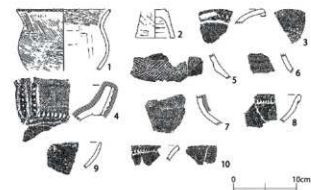
第 170 図 第 128 号住居跡

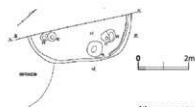


第 171 図 第 129 号住居跡

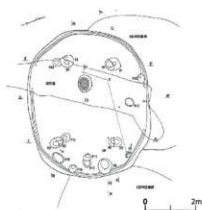


第 172 図 第 130 号住居跡

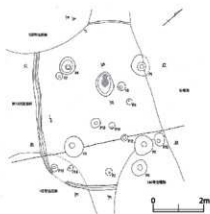
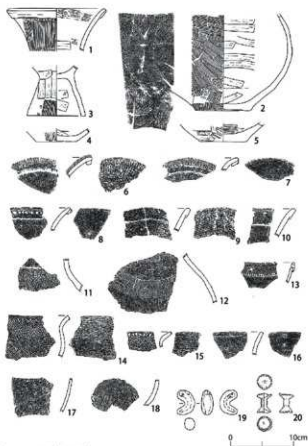




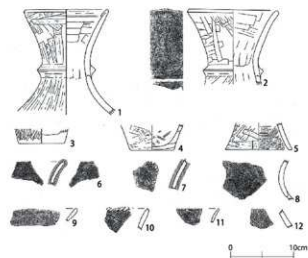
第173図 第131号住居跡

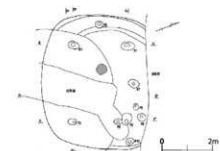


第174図 第132号住居跡



第175図 第133号住居跡

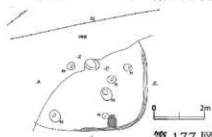




第176図



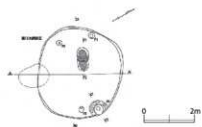
第134号住居跡



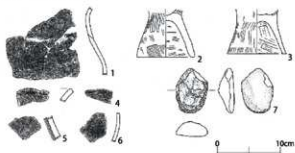
第177図



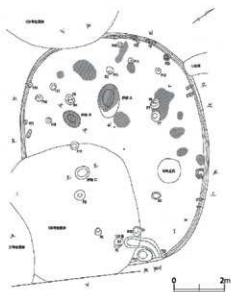
第135号住居跡



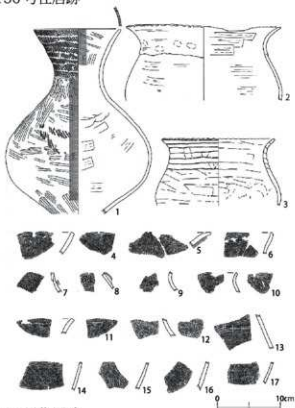
第178図



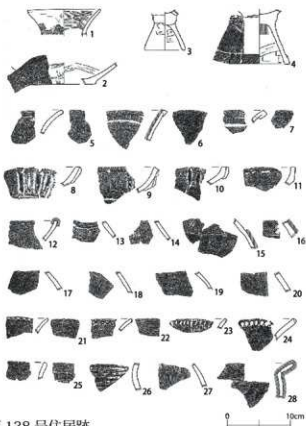
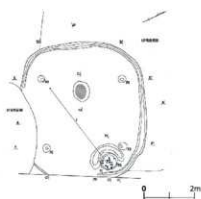
第136号住居跡



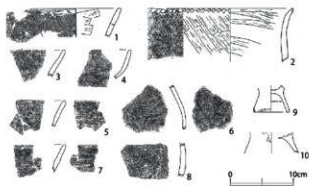
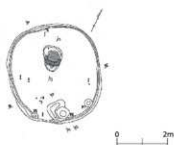
第179図



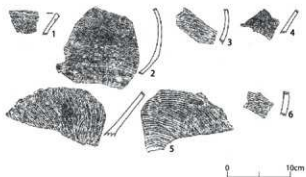
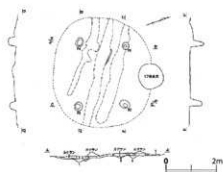
第137号住居跡



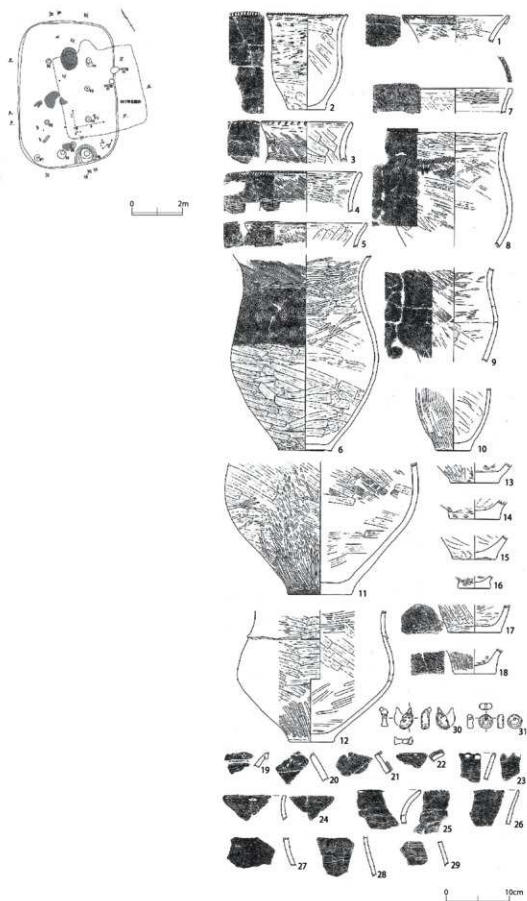
第180図 第138号住居跡



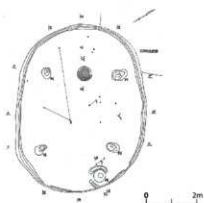
第181図 第139号住居跡



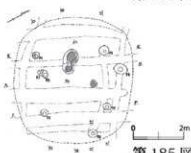
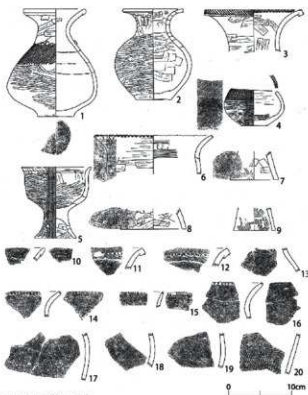
第182図 第140号住居跡



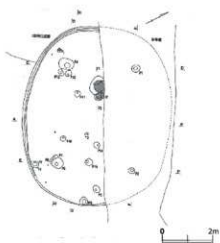
第 183 図 第 141 号住居跡



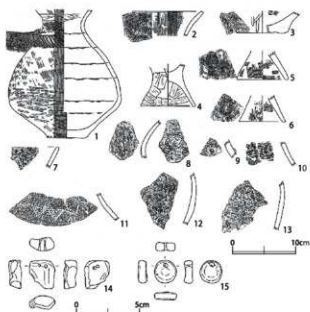
第184图 第142号住居跡

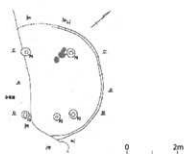


第185图 第143号住居跡



第186图 第144号住居跡

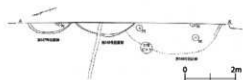
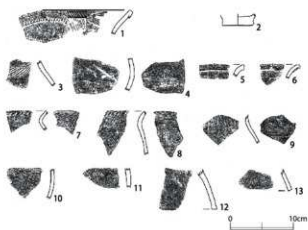




第187図 第145号住居跡



第188図 第146号住居跡



第189図 第147・148・149号住居跡



第2節 弥生時代環濠と遺物

午王山遺跡では、弥生時代の「V字状」の溝が各調査地点で検出され遺構番号が付されていたが、本総括報告書をまとめるにあたり遺跡の内側を廻る溝をA溝（旧第1・2号溝）、その外側を廻る溝をB溝（旧第6号溝）とし、B溝より西側で検出された溝をC溝（旧第5号溝）と新たに遺構名の振り替えを行った。

A溝	2次	1号溝
		2号溝
	3次	2号溝
		2号溝
	5次A区	1号溝
		2号溝
	5次B区	2号溝
		2号溝
	7次	2号溝
10次	1号溝	
11次	1号溝	

B溝	3次	6号溝
	4次	6号溝
	5次B区	6号溝
	10次	6号溝
C溝	2次	5号溝
	13次	5号溝

A溝第2次調査（1号溝）（第191・194図）

A溝は、第2次調査区の東側平坦部で検出された。溝の断面形はV字状を呈し、幅2.2m、深さ1.3mを測る。底面幅も0.4m程で狭く、発掘作業を行うことが困難であった。出土遺物は、第194図1～24が覆土から出土した、1・3はハケ刺突文を施す壺である。13・15・17・19・20の口唇部にはハケ目で面取りが施された甕である。23・24は下層から出土し、櫛描簾状文が施された岩岸式の壺である。

A溝第5次調査A区（1号溝）（第191・195図）

A溝は、第5次調査A区で平坦部分で検出された。第2次調査区東側から接続する溝で、東にある金泉寺との地境へ延び、遺構上面は耕作に伴う根切り溝により壊されている。溝の断面形はV字状を呈し、幅2.1m、深さ1.2mを測る。底面幅も0.3m程である。出土遺物は少なく、第195図1～14が覆土から出土した。2はハケ目沈線区画とハケ刺突文が施された壺である。14は口唇部にはハケ目で面取りが施された甕である。

A溝第10次調査（1号溝）（第191・205図）

A溝は、第10次調査区で道路拡幅部分の調査で、第2次調査区東側のA溝と接する部分である。B溝とは約12m離れている。溝の断面形はV字状を呈し、幅2.3m、深さ1.1mを測る。底面幅も0.3m程で狭く、発掘作業を行うことが困難であった。出土遺物は、第205図1～7が覆土中層から出土した、1は弥生時代中期後半の甕である。3の甕はハケ目が施されるが、胴部下半に接合の段差を残し、段差より下部のハケ目はなでた様に浅く付いている。

A溝第11次調査（1号溝）（第191・196図）

A溝は、第10次調査の盛土保存部分から接するように第11次調査区を斜めに通り検出された。遺構上面には奈良時代の住居跡が2軒検出され、溝の上部は壊されている。A溝の断

面形はV字状を呈し、幅2.4 m、深さ1.15 mを測る。底面幅も0.25 m程で狭く、発掘作業を行うことが困難であった。出土遺物は、第196図1～52が覆土から出土した、1は弥生時代中期後半の壺と思われる、15も同時期の甕とみられる。3・11・14・47・48はハケ刺突文が施される壺で、25は高坏である。

A溝第2次調査（2号溝）（第192・197図）

A溝は、第2次調査区の台地中央から西寄りの平坦部で検出された。溝の断面形はV字状を呈し、最大幅3.0 m、最大深さ1.6 mを測る。底面幅も0.3 m程で狭く、深さもあるため、発掘作業を行うことが困難であった。本溝より外側の西へ約7 mの位置にB溝が位置し共に同方向で並行して検出されている。出土遺物は、少なく第197図1～7が覆土から出土した、1・2はハケ目が施される壺である。3・4は頸部と肩部の境に段差を持ちその段差部からハケ刺突文が施された壺である。

A溝第3次調査（2号溝）（第192・198図）

A溝は、第3次調査区の台地平坦部と斜面に変化する境界線上で平坦面に沿うように東西方向に検出された。溝の断面形はV字状を呈し、最大幅2.3 m、最大深さ1.0 mを測る。底面幅も0.3 m程で狭く、発掘作業を行うことが困難であった。同じ調査区の南端では、A溝外側から約14 m離れた緩斜面部に、比高差約1.4 m下がってA溝と並行するようにB溝が検出されている。出土遺物は多く、第198図1～40が覆土中層から出土した。1・7・8・10の壺は沈線区画内に羽状縄文が施される壺である。10の広口壺は、第3次調査のB溝出土破片と接合した。2・11・32・34はハケ刺突羽状文が施された壺で、2・11は沈線も刺突である。33・38はS字状結節文が施されている壺である。26は出土例が珍しい銅鐔形土製品で、紐が欠失しているが剥落痕がしっかり観察できる。

A溝第4次調査（2号溝）（第192・199・200図）

A溝は、第4次調査区の平坦部で確認され、北側の第2次調査区から直線的に南側へ延びてきたA溝がこの第4次調査区で東側に大きくカーブして東側の第7次調査区に接続する様に検出された。第50・51号住居跡と重複し、本溝との新旧関係は、2軒の住居跡の床面が本溝の上部を壊している。溝の断面形はV字状を呈し、最大幅3.2 m、最大深さ1.4 mを測る。底面幅も0.3 m程で狭く、発掘作業を行うことが困難であった。同じ調査区の、A溝外側から西へ約8.0 m離れた場所でA溝と並行するようにB溝もカーブを描き検出されている。出土遺物は第199・200図1～72が覆土中層から多量に出土した。特に第50号住居跡下の中層からは焼土の分布と東海系の第199図29の壺、第199図31の台付甕が出土している。11・29・64・65・67はハケ刺突羽状文が施された壺で、31・36～41・43は口唇部がハケ状工具で面取りされている甕と壺と共に東海系の特徴が見られる。30は覆土中より出土した青銅製の銅釦である。銅釦は残存径から小さな印象であるが、金属製品のため歪んでいることも考えられる。

A溝第5次調査B区（2号溝）（第192・201・202図）

A溝は、第5次調査B区で台地の平坦部で確認され、北側の第2次調査区から直線的に延びてきて第4次調査区と接続する様に検出された。第51号住居跡が本溝の上に乗っている。溝の断面形はV字状を呈し、幅2.8 m、最大深さ1.7 mを測る。底面幅も0.1～0.3 m程で

狭い部分もあった。同じ調査区の、A溝外側から西へ約7.2 m離れた場所でA溝と並行するようにB溝も直線的に検出されている。出土遺物は第201・202図1～81が覆土中層から多量に出土した。6・14・18・77～81はハケ刺突羽状文が施された壺である。29～31・33・34は口唇部がハケ状工具で面取りされている甕である。47・48は胴部下半の屈曲が強い鉢形土器で東海系の壺の下半部と同様の器形である。63は覆土中より出土した銅鐸形土製品で、本体両側に鱗が付されている。

A溝第7次調査(2号溝)(第192・203・204図)

A溝は、第3次調査区・第4次調査区・第6次調査区に接して囲まれる位置で確認され、台地平坦部と緩斜面に変化する境界線上で検出された。溝南側の壁上部と西側部分は過去の造成で消滅している。奇跡的に西端の第4次調査区と接する場所は残存していたため旧地形に併せカーブすることが推測できた。溝の断面形はV字状を呈し、最大幅2.1 m、最大深さ1.3 mを測る。底面幅も0.25 m程で狭く、発掘作業を行うことが困難であった。出土遺物は第203・204図1～67が覆土中層から多量に出土した。1・5・9・36・37はハケ刺突羽状文が施された壺で、44～46は口唇部がハケ状工具で面取りされている甕で壺と共に東海系の特徴が見られる。3・10・32～35の壺は沈線区画内に羽状縄文が施される壺である。67は覆土中層から出土した銅鐸形土製品である。ほぼ完形であるが鱗部が欠失するが、鱗の剥落痕が左右にしっかりと確認できる。本遺跡A溝出土は3例目である。

B溝第3次調査(6号溝)(第192・206図)

B溝は、第3次調査区の緩斜面で検出され、A溝と約14 m離れているが同じ方向で並行に走っている。調査区の両端は過去の造成により消滅している。溝の断面形はV字状を呈し、最大幅1.4 m、最大深さ0.8 mを測る。底面幅も0.15～0.36 mで狭い。出土遺物は、少なくとも第206図41～47の7点の他A溝出土第198図10の破片1点がB溝覆土中層から出土し接合した。

B溝第4次調査(6号溝)(第192・207図)

B溝は、第4次調査区の台地平坦部で確認され、北側の第2次調査区から直線的に南側へ延びてきたB溝がこの第4次調査区で東側にカーブして東の第3次調査区B溝に接続するとみられる。溝の断面形はV字状を呈し、最大幅1.8 m、最大深さ0.9 mを測る。底面幅も0.15～0.28 m程で狭く、発掘作業を行うことが困難であった。同じ調査区の、A溝外側から西へ約8.0 m離れた場所でA溝と並行するようにB溝もカーブを描き検出されている。出土遺物は第207図1～6が覆土中層から出土した。4・6はハケ目沈線区画が施された壺である。

B溝第5次調査B区(6号溝)(第192・208図)

B溝は、第5次調査B区で平坦部分で検出された。第2次調査区から接続する溝で、直線的に延び、第4次調査区と接続すると考えられる。本溝は第30・62・63号住居跡と重複し、住居跡は本溝の上部を壊して構築されている。溝の断面形はV字状を呈し、幅1.2 m、深さ0.9 mを測る。底面幅も0.2 m程である。同じ調査区のA溝とは約7.2 m離れた間隔でB溝も並行するように検出されている。出土遺物は少なく、第208図1・2が覆土から出土した。

B溝第2次調査（6号溝）（第192図）

B溝は、第2次調査区の台地中央から西寄りの平坦部で検出され、同調査区のA溝の外側から西約7mに位置し、方向も同じく並行している。本溝は直線的に伸び、第5次調査B区と接続する。本溝は第25・30号住居跡と重複し、住居跡は本溝の上部を壊して構築されている。溝の断面形はV字状を呈し、幅1.0m、深さ0.6mを測る。底面幅も0.2m程である。図示できた遺物はない。

B溝第10次調査（6号溝）（第191・209図）

B溝は、第10次調査区の道路建設部分で検出され、同調査区のA溝の外側約12mに位置し、方向も同じく並行している。本溝は、上部が耕作により壊されているため溝の平面は崩れているが本来は緩くカーブしている。部分である。溝の断面形はV字状を呈し、最大幅1.8m、深さ0.95mを測る。底面幅も0.3m程で狭く発掘作業を行うことが困難であった。出土遺物は、第209図1～5が覆土中層から出土した。

C溝第2・13次調査（5号溝）（第193・210図）

C溝は、第2次調査の道路建設と第13次調査の道路拡張部分で検出された。台地の緩斜面部分に位置し、A溝外側から約65m離れている。本溝は、上部が耕作などにより壊されているため溝の平面は崩れているが、断面形、覆土の観察などで弥生時代の遺構である。溝の断面形はV字状を呈し、最大幅1.8m、深さ1.2mを測る。底面幅も0.2m程で狭く、発掘作業を行うことが困難であった。出土遺物は、第210図1～3が覆土中から出土した。また、本溝の南方方向の崖のローム面では、V字の遺構覆土が観察されることから、この独立丘の緩斜面に沿ってC溝が延長していることが推定される。

A溝・B溝・C溝について（第190図）

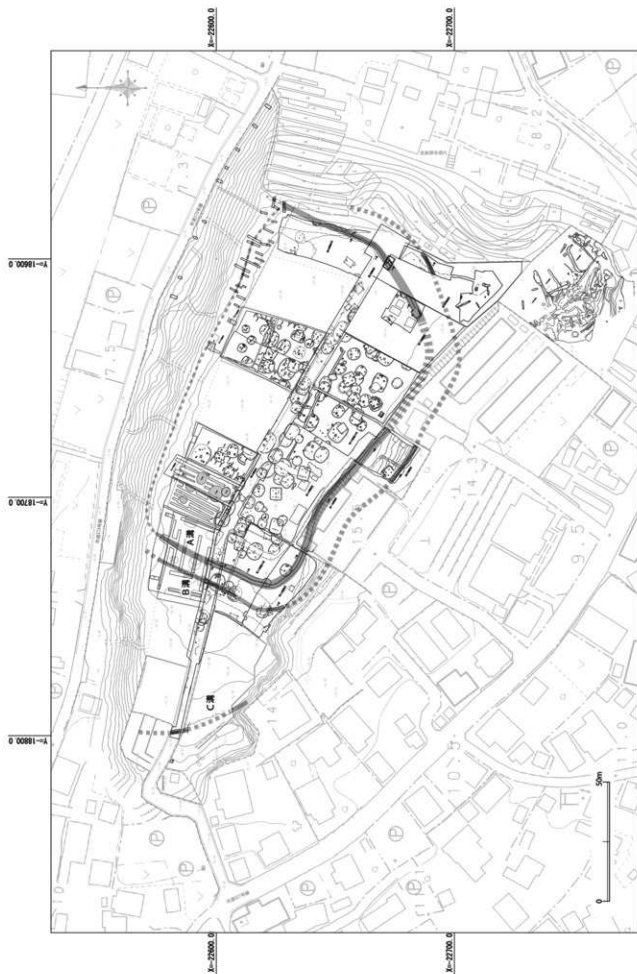
午王山遺跡は、独立した丘であるが、北側が急傾斜の崖地、南側の旧地形では北側より緩い斜度の斜面であった。東側には、縁起が平安期まで遡る金泉寺があり、寺院と墓地の造成により旧地形は急傾斜地であったと思われるが、現在は墓地により階段状の斜面となっている。

A溝は、第2・3・4・5・7・10・11次調査区で検出され、消失部を含む検出推定長は約775m、最大幅3.2m、最大深1.7mである。第2次調査区北側の地番新倉3丁目2829-1地点の宅地造成の確認調査では、北側斜面まで延長が確認されているが、斜面上部を巡るのか、下るのかは確認されていない。第5次調査A区の北側、地番新倉3丁目2811-1地点（北側急傾斜地）の確認調査では、A溝の延長とみられる溝と斜面上部の緩斜面部を横切るように巡る溝が確認され、A溝は遺跡の北側緩斜面上部を廻る環濠と推定される根拠でもある。

B溝は、第2・3・4・5・10次調査区で検出され、消失部を含む検出推定長は約790m、最大幅1.8m、最大深0.95mである。A溝より幅、深さとも数値が低く小ぶりである。A溝外側に沿って常に並行に検出され、出土遺物は少ないがA溝と同時期の遺物（第206・207・208・209図）が溝覆土から出土している。第2次調査区北側の地番新倉3丁目2829-1地点の宅地造成の確認調査でも、A溝と並行に確認されているが、北側斜面部の方向性は不明である。また第10次調査区でも、A溝と並行に検出され、弧状に延伸する方向性も同

様で東の墓地側へ延びる形である。しかし、墓地側は斜面が階段状に造成されB溝は消滅してしまっていると思われる。

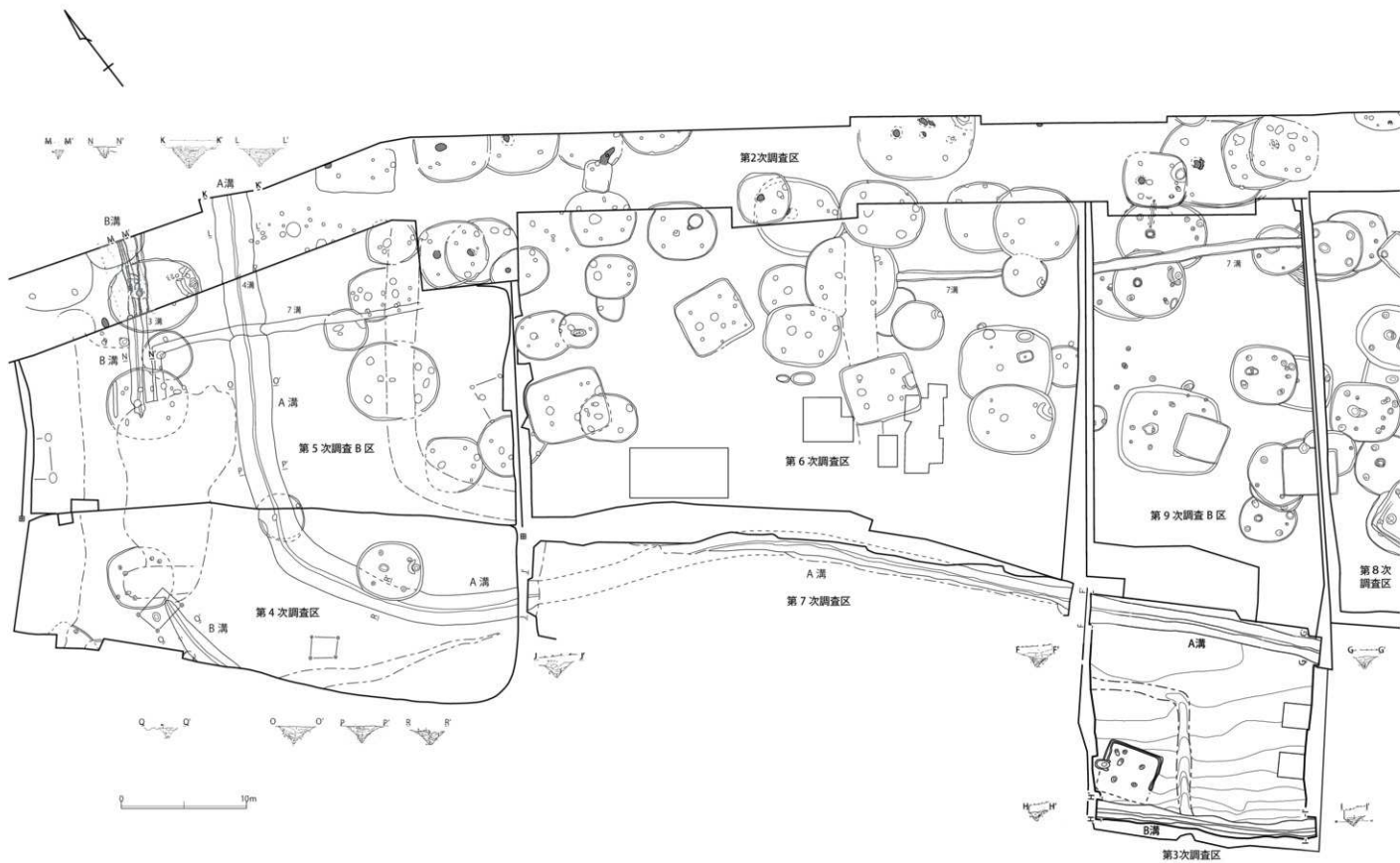
C溝は、第2・13次調査区で検出され、長さは7m、最大幅1.8m、最大深1.2mである。検出場所は、平坦面から比高差は約2.6m下った緩斜面上で標高22mの等高線に沿うように延長が推定される。A・B溝とは廻る位置が違うので、環状となるのか、条濠となるのかは現在のところ不明である。



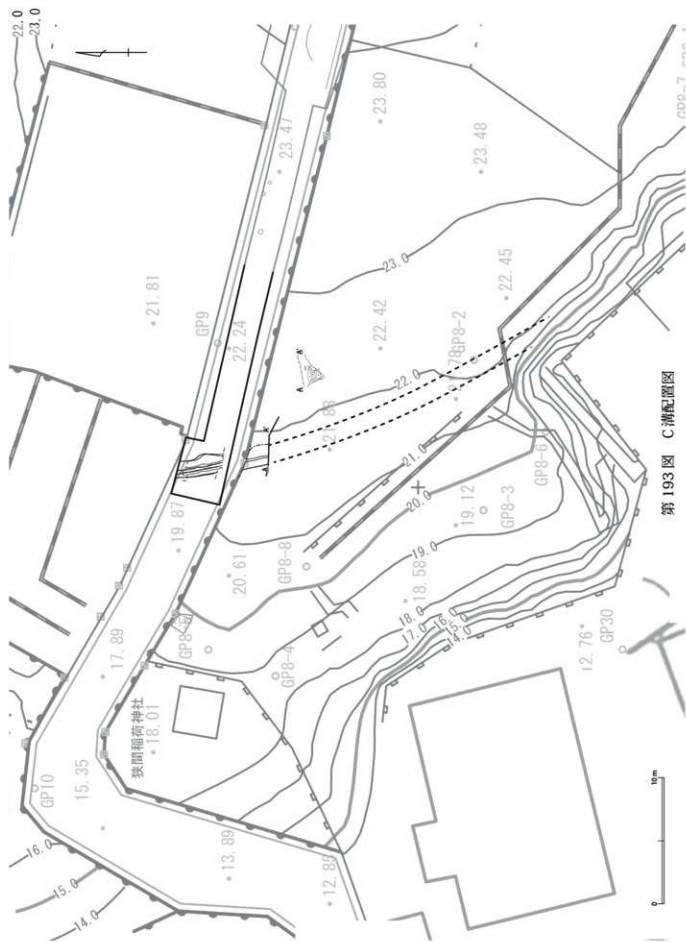
第190図 午王山遺跡 A・B・C溝全体配置図



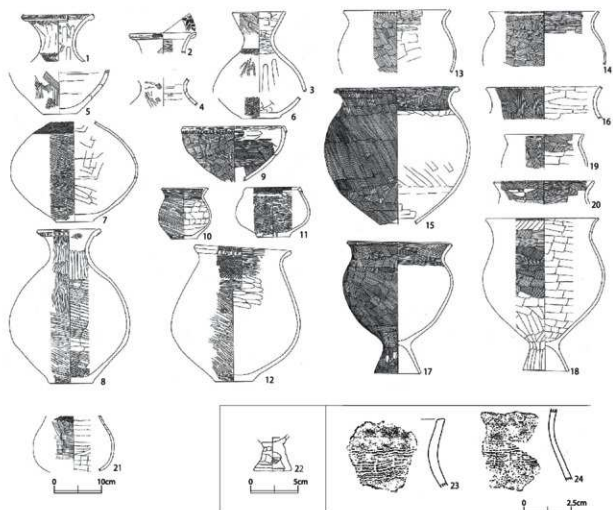
第 191 图 午王山遺跡環濠東側圖



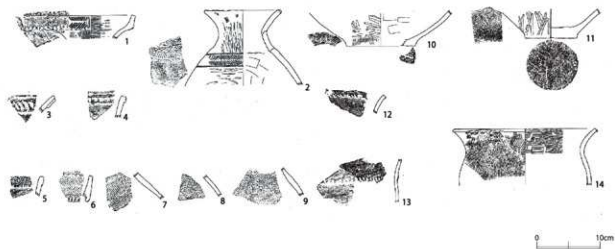
第 192 图 午王山遺跡環濠西側圖



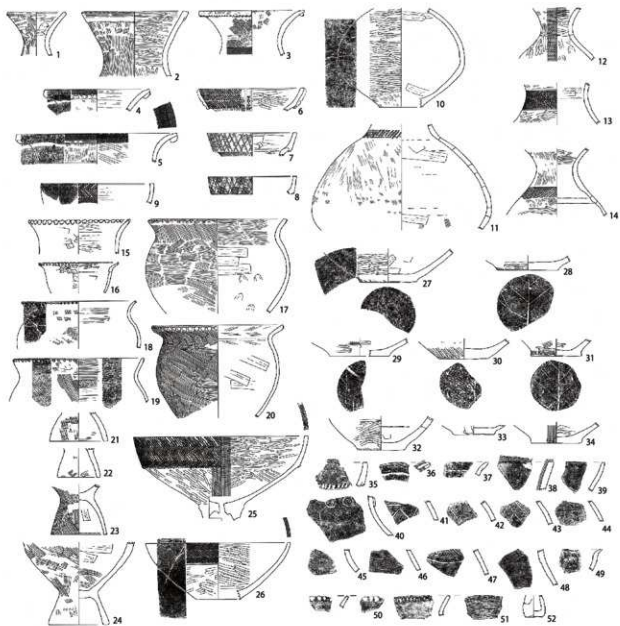
第193図 C溝配置図



第194図 A溝2次調査(1号溝)出土遺物

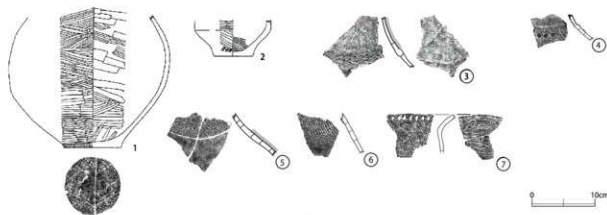


第195図 A溝5次調査A区(1号溝)出土遺物



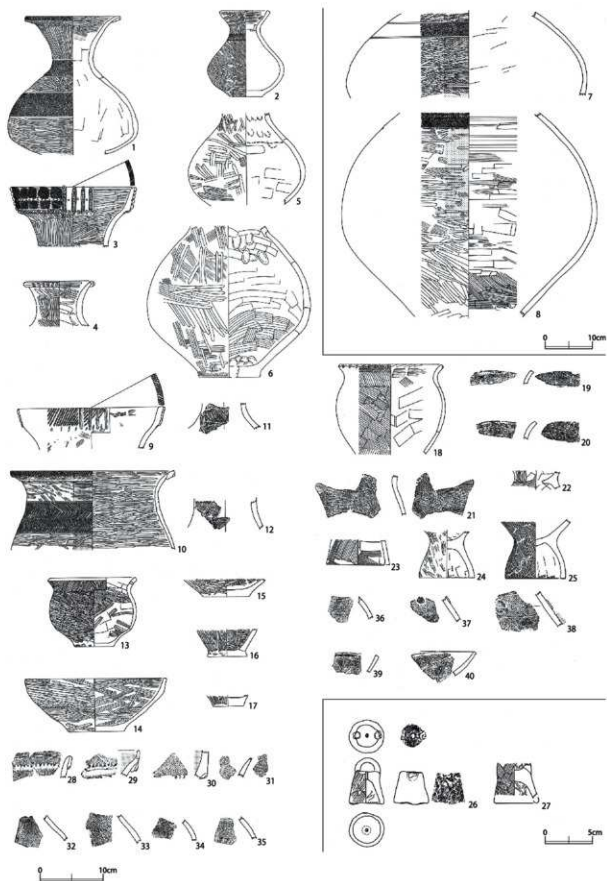
第196図 A溝11次調査(1号溝)出土遺物

0 10cm

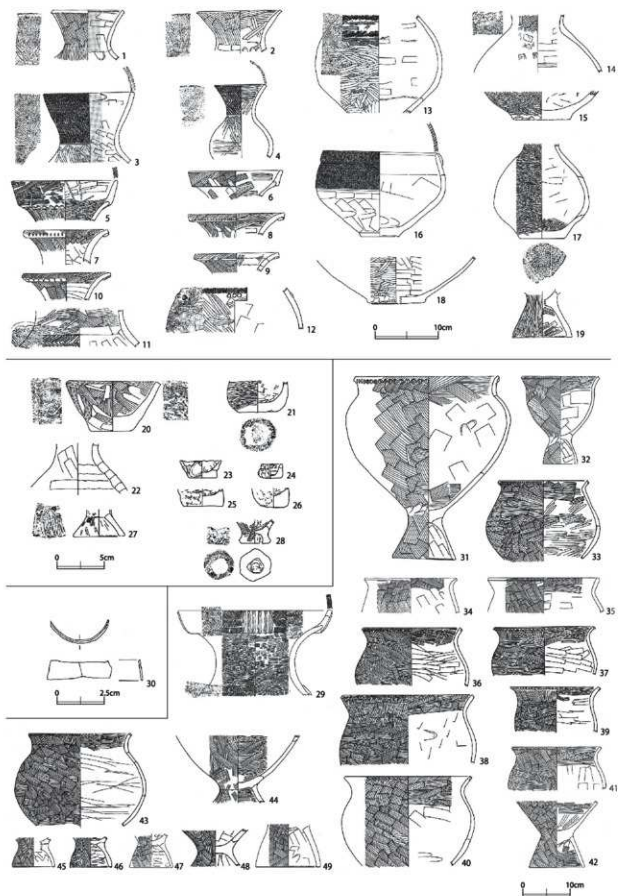


第197図 A溝2次調査(2号溝)出土遺物

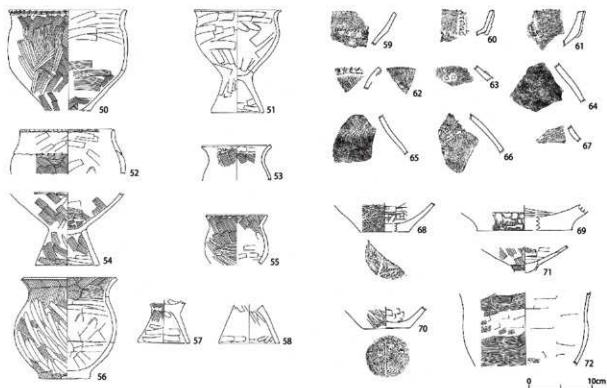
0 10cm



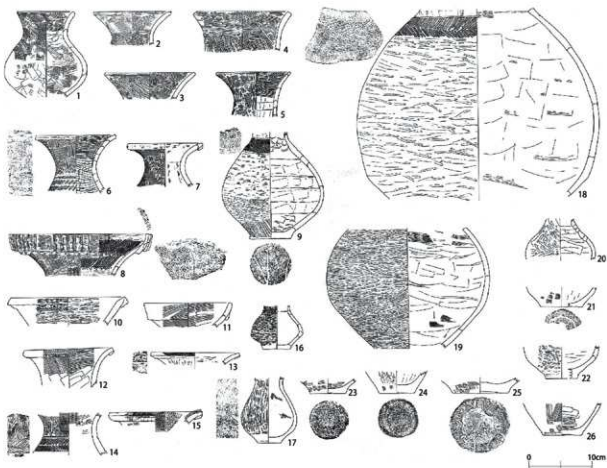
第198図 A溝3次調査(2号溝)出土遺物



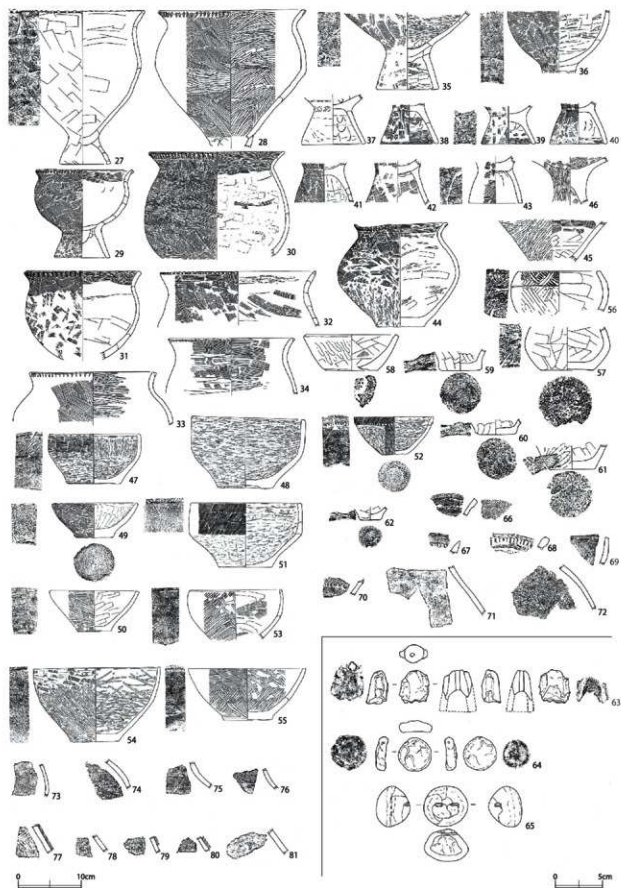
第199図 A溝4次調査(2号溝)出土遺物(1)



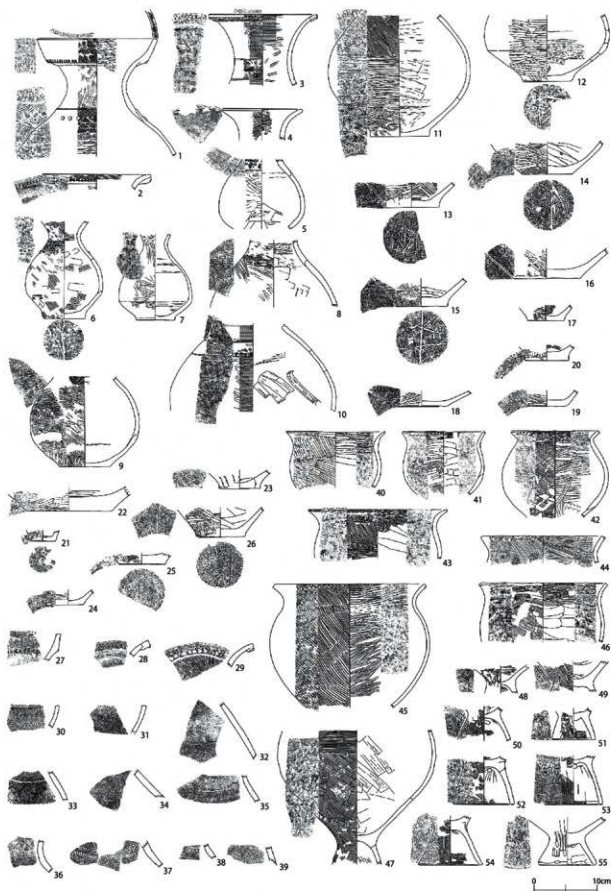
第200図 A溝4次調査(2号溝)出土遺物(2)



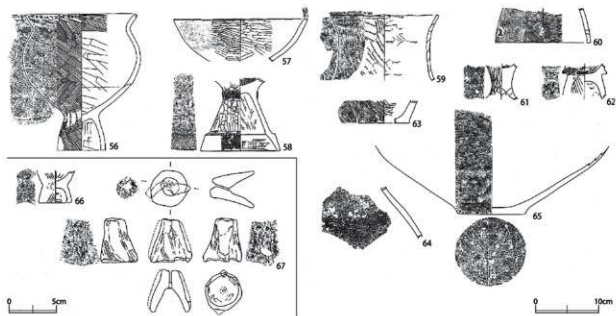
第201図 A溝5次調査B区(2号溝)出土遺物(1)



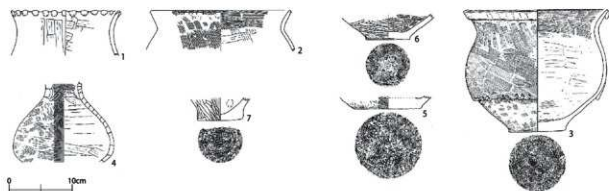
第202図 A溝5次調査B区(2号溝)出土遺物(2)



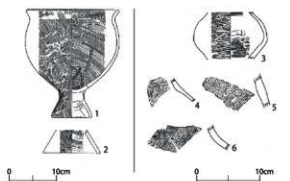
第 203 図 A 溝 7 次調査 (2 号溝) 出土遺物 (1)



第204図 A溝7次調査(2号溝)出土遺物(2)



第205図 A溝10次調査(1号溝)出土遺物



第207図 B溝4次調査(6号溝)出土遺物



第206図 B溝3次調査(6号溝)出土遺物



第208図 B溝5次調査B区(6号溝)出土遺物



第209図 B溝10次調査(6号溝)出土遺物



第210図 C溝13次調査(5号溝)出土遺物

第3節 弥生時代方形周溝墓と遺物

(1) 第1次調査方形周溝墓(第211図)

第1次調査区では、遺跡の東南側の地区で遺跡の平坦部分より緩やかに傾斜する緩斜面の根根状の部分に3基がまとまって検出された。第10次調査で検出されているA溝、B溝より外側で検出されている。

第1号方形周溝墓(第212図) 第1号方形周溝墓は、南側の溝を第2号方形周溝墓の北側溝と共有するように重複している。北側、東側、南側の独立した3本の溝が残存し、四隅が切れる周溝墓を呈しているが、耕作による攪乱・削平が著しく、主体部や西側の溝など消失しているため、周溝が全周するか、四隅が切れるかは不明である。南溝と北溝との幅からみて、一辺が約11.4mの方形周溝墓で、溝の深さは南側溝が最大で確認面から15cmである。主軸方向は約N-11°-Wである。出土遺物は検出されなかった。第2号方形周溝墓との新旧関係は、接続している溝の土層観察では、攪乱が著しく不明である、しかし本方形周溝墓は、環濠集落に近いことと、南側溝の共有を意識していることで、第2号方形周溝墓より先行すると推測している。

第2号方形周溝墓(第213図) 第2号方形周溝墓は、北側の溝を第1号方形周溝墓の南側溝と共有するように重複している。北側溝、西側溝は接続してL字状に検出された。耕作による攪乱が著しいため、南側、東側の溝、主体部は不明である。北側溝の現状の長さが12m、溝の深さは西側溝が確認面から最大で60cmである。主軸は、西側溝がN-28°-Wを示し、北側溝とほぼ直交した方向である。出土遺物は、攪乱層の部分を含む覆土から第213図1~7の土器が出土している。第213図5~7は、弥生時代の壺の胴部破片で文様構成から中期の土器である。第1次調査報告書⁽¹⁾では、中期の土器片は混じり込みと考え、第213図1・2の底部破片からみて弥生時代後期と考えられた。そして近年、午王山遺跡の発掘調査が進み、これまで計15回の発掘調査では、弥生時代終末から古墳時代前期の遺構が検出されていないことが判明してきた。そのため、方形周溝墓の時期としては、弥生時代後期の時期が与えられる。

第3号方形周溝墓(第214図) 第3号方形周溝墓は、第1・2号方形周溝墓の南側に並ぶように位置している。耕作による攪乱・削平が著しいため北側の溝と東溝・西溝につながるコーナー部分のみが残るだけで、コ字状に検出された。主体部は不明である。北側溝の現状の長さが約12.6m、溝の深さは確認面から50cm前後である。主軸は、北側溝と直交する方向で計測すると約N-30°-Wである。出土遺物は、攪乱層の部分を含む覆土から弥生土器の小破片が少量みられた。

(2) 第10次調査方形周溝墓(第211図)

第10次調査区は、遺跡の東南側の地区で、遺跡の平坦部分である。主な弥生時代の住居跡を囲むように構築されている、A溝とB溝の外側に2基検出された。第10次調査報告書⁽²⁾にて、第13・14号溝と報告していた遺構を本報告では、第5号方形周溝墓とした。

第4号方形周溝墓(第215図) 第4号方形周溝墓は、第10次調査区の南側で、A・B溝の外側で検出された。耕作により削平されているため、遺構上部は消滅しているため周溝は四隅が切れているか、全周するかは不明である。東側溝の全容が判明していないため、一辺

の大きさや主体部も不明である。溝の深さは東側溝が確認面から最大で25 cmである。主軸方向は、東側溝の方向を計測するとN-25° - Wである。出土遺物もなく時期の詳細は不明である。ただし、第1次調査を含めた分布状況を見ると、第2・3号方形周溝墓と主軸方向が同様である。

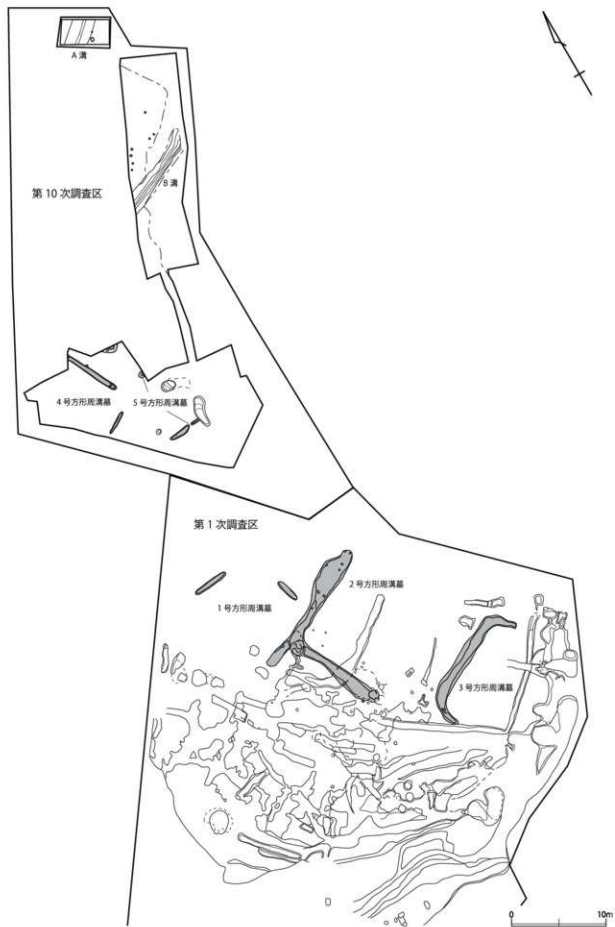
第5号方形周溝墓(第216図) 第5号方形周溝墓は、A・B溝の外側の第10次調査区南側で、第4号方形周溝墓より東側に検出された。耕作による削平と調査区外に延びるため、遺構の形態は不明である。北側溝と南側溝の幅からみると一辺は約8.2 mである。溝の深さは北側溝が確認面から最大で17 cmである。主軸方向は、北側溝と南側溝に対して直交する方向を計測するとN-06° - Wである。出土遺物もなく時期の詳細は不明である。ただし、第1次調査を含めた分布状況を見ると、第1号方形周溝墓と主軸方向が同様である。

(3) 方形周溝墓について

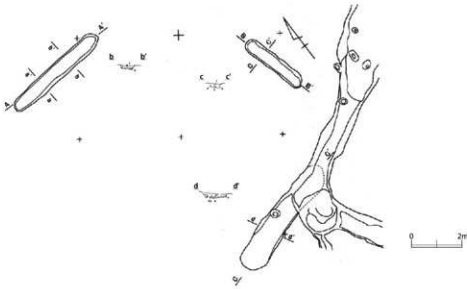
今回検出されている方形周溝墓は、午王山の東端の緩斜面の尾根上にまとまりをもって検出されている。また弥生時代住居群とは画する様に、A溝、B溝の2条の環濠の外側に方形周溝墓が展開し、この位置関係が環濠集落としての意味と価値を大きく考えさせられている。通常の方形周溝墓の考え方では、溝の四隅が切れるものが古い時期とみられるが、ここでは、ローム面の攪乱が著しく、また耕作により削平もあることから、第5号方形周溝墓の南辺溝のように一旦途切れる溝があるように、遺構構築時に全周溝か四隅切れの方形周溝墓かは不明である。方形周溝墓の主軸方向では、第1・5号方形周溝墓の2基(11°、06°)のまとまりと第2・3・4号方形周溝墓の3基の主軸方向(28°、30°、25°)が合うまとまりがみられる。方形周溝墓の構築時期は、遺物も少なく遺構の遺存状態も悪い中で定かではないが、A溝、B溝の2条の環濠に画され、環濠の外側に位置することから環濠存続期の集落と合致する段階に構築されたと考えることが状況的にも合うと思われる。

【註】

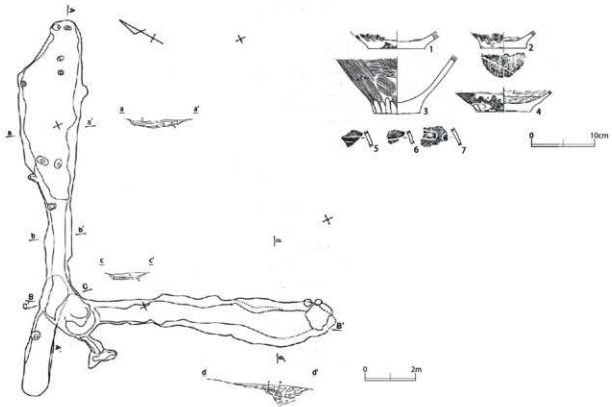
- 1) 鈴木敏弘ほか1981年『埼玉県和光市新倉午王山遺跡』和光市午王山遺跡調査会
- 2) 鈴木一郎ほか2014年『埼玉県和光市午王山遺跡(第10次)妙典寺遺跡(第5次・第6次)峯前遺跡(第6次)-発掘調査報告書-』和光市埋蔵文化財調査報告書第57集 和光市遺跡調査会・和光市教育委員会



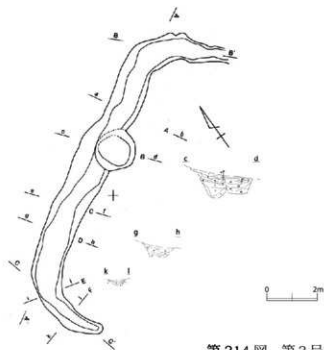
第211図 第1・10次調査区方形周溝配置図



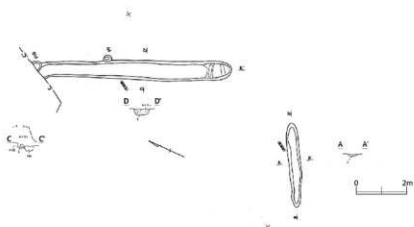
第 212 図 第 1 号方形周溝墓



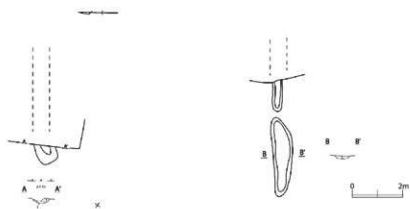
第 213 図 第 2 号方形周溝墓



第214図 第3号方形周溝墓



第215図 第4号方形周溝墓



第216図 第5号方形周溝墓